

義肢・装具のエスノメソドロジー
(平成 16 年度 社会調査実習報告書)

目次

執筆者一覧	原田 越代…………… 2
第Ⅰ部 本文を読む前に	
まえがき	檜田 美雄…………… 3
トランスクリプト記号一覧	原田 越代…………… 6
第Ⅱ部 本文	
第1章 食堂の中の交差点一車いすのエスノメソドロロジー 2—	林 佑香…………… 7
第2章 道具の非道具的利用—ことばやものが実際に使われている様子の研究—	原田 越代・正島 祐子・檜田 美雄…………… 17
第3章 職場のエスノメソドロロジー	正島 祐子…………… 29
第4章 ある入所者の一日の活動を追って	田中 文恵…………… 39
第5章 戸を閉めることのアフォーダンス	佐々木 実花…………… 49
第Ⅲ部 卒論報告	
音を取り巻く相互行為分析—ギター教授演奏場面を事例として—	吉野 秀紀…………… 69
第Ⅳ部 付録	
第1章 インタビュー記録	
渡辺 広一さん（仮名）インタビュー記録	佐々木 実花…………… 81
〃	正島 祐子…………… 91
大見 敏一さん（仮名）インタビュー記録	原田 越代…………… 97
加勢 賢一さん（仮名）インタビュー記録	林 佑香…………… 103
北川 信一さん（仮名）インタビュー記録	田中 文恵…………… 109
第2章 調査の実際	
A. 調査用具と収集データ一覧	佐々木 実花…………… 113
B. 調査依頼状例と礼文例	原田 越代・佐々木 実花…………… 115
C. Y義肢工場訪問報告	林 佑香…………… 117
D. インタビュー記録作成の苦労	原田 越代…………… 121
E. 撮影の苦労	正島 祐子…………… 125
F. 報告書作成の苦労	田中 文恵…………… 127
G. オブザーバーとして	田村 直樹…………… 129
奥つけ	檜田 美雄…………… 132

執筆者一覧

総合科学部人間社会学科 2年（地域システムコース）

原田 越代（はらだ えつよ）

総合科学部人間社会学科 3年（地域システムコース）

佐々木 実花（ささき みか）

正島 祐子（しょうじま ゆうこ）

林 佑香（はやし ゆか）

総合科学部人間社会学科 4年（現代国際社会分野）

田中 文恵（たなか ふみえ）

吉野 秀紀（よしの ひでのり）

神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程

田村 直樹（たむら なおき）

指導教官

榎田 美雄（かしだ よしお）

[kashida.yoshio@nifty.ne.jp]

第 I 部 本文を読む前に

まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室
助教授 榎田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

WWW サイト (本冊子の PDF ファイル公開中)

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/>

1.

この報告書は、その主要部分においては、『義肢と装具』および『(義肢と装具を用いた人間に関わる) 相互行為』に関連してなされた1年間の相互行為分析をまとめたものである(「調査実習」以外としては、卒論を元にした論文として吉野秀紀君の作品を第Ⅲ部に掲載している)。研究は2004年度徳島大学総合科学部開講科目「地域調査実習」(5年生以上は、「社会調査実習」)の一環として行われた。授業の履修登録者は、「社会調査実習」としての履修者が1名、3年次生が3名、2年次生が1名の計5名であった。調査には、義肢装具の制作工房である「Y 義肢製作所」、義肢装具装着者の生活および仕事の場である「Z園」、および多数の個人の方から全面的な支援を受けた。調査地秘匿のため、長時間のインタビューに答えてくれた個人の方や撮影に応じてくれた施設内居住の方々のお名前をここに挙げるができないのは、心苦しいけれども、記して感謝したい。

今回のテーマ『義肢・装具の相互行為分析』は、指導教員の榎田としては、満を持しての企画であった。我々が調査対象地としたA県T市は、全国でも有数の『義肢装具』の制作工房集積地であり、会社の専務取締役の方は、日本義肢装具士協会の理事をしていらっしゃった。また、榎田は平成16年度から、徳島県の「ユニバーサルデザイン基本指針検討会議」委員(専門委員を兼ねる)をしており、義肢や装具に関連した最新の動向に関する情報を得やすい立場であった。もちろん、エスノメソロジーという方法が、「自分の身体でないものが自分の身体である」というこの「義肢・装具」の特徴を探究するのに好的であるだろう、という確信があったことがこのテーマに期待した最大の理由であった。そういう背景の中で、実習の当初は、「Y 義肢製作所」関連データを丁寧に集めることで実習を成功させることができると見込んでいた。

けれども、このもくろみは失敗におわった。理由は以下の2点である。①「患者様(あるいは、ユーザー様)」のビデオ撮影に関して、工房側からアクセスする方策では、なかなか医療関係者のかたがたからの調査企画への承諾が頂けなかった。「患者様」側からアクセスするよう考えるべきであった。②「義肢・装具」の調整作業が、「義肢・装具」の更新時に関してはかなりルーティン化しており、データとしておもしろいと思われた「最初の義肢・装具の制作時点」に関しては、未成年者の場合が多いことから、その実際的に調査可能なケースがひどく少なく、調査日程との調整付けが困難であった。これら2点から、2004年7月の時点で、調査のメインターゲットを、「施設内におけるユーザーの使い方」に変更することとした。この変更は、大変大きな変更で、実習生諸君には、見通しの立たない数週間を過ごさせたことを申し訳なく思う。しかし、彼らはおどろくべき切り替え能力の高さとがんばりでこの変更を成功裏に実践した。本報告書が曲がりなりにも「学術的な水準」が存在するものになっているとすれば、それは、指導教員の見通しの甘さにもかかわらずさいごまでついてくれた学生諸君の努力と資質の高さによるものであるといえよう。

なお、今年の学生に関しては、もう一点強くほめておかなければならないことがある。それは、私の調査実習でははじめて「論文」の「個人執筆」をしたことである。上に記したように今年の実習生は5人と少なく、従来のような班分けシステムをとることができなかった。これまで、「(2、3年次における)調査実習では班による合作、(4年次における)卒論では個人研究」という発展システムで指導を行っていたのだが、今年は(さい

ごまで迷ったけれども)最終的に「個人執筆」路線を採用した。檜田の指導が少し多めに入っているということはあるかも知れないが、どれも十分な水準の作品となっているように思う。大変だけれども実力が付く程度はこちらの方が高いようだ。次回の実習でもできればこの「個人執筆」システムを採用していきたい。

今年も多数の学外者の支援によって『実習』運営が行われた。国際医療福祉大学の阿部智恵子氏、国際基督教大学の岡田光弘氏には、夏休み等に学生の発表を聞いてもらい指導を賜った。記して感謝したい。また、神戸大学大学院経営学研究科博士課程在学中の田村直樹氏には、2005年1月7日～8日の小豆島合宿にまでご同行頂いた。田村氏のどっくばらんな性格は、執筆に行き詰まり暗くなりがちな学生の気持ちをほぐす意味でたいへん有効であったと思う。特別の感謝を捧げたい。なお、研究室の業務を一手に取り仕切ってくれている瀬尾かおり氏への謝辞も怠ることはできない。彼女の機転と手際の良さで調査地における業務の混乱がなんども救われた。続けてお世話になり続けたいと思っている。

2.

さて、残りの紙幅で、本冊所収の諸論文等について簡単な解説をしていきたい。

まず、今回の編集方針を述べよう。調査実習報告書の価値は、その掲載論文の学術的価値もさることながら、全国の同業の教員が実習を実施するに当たっての資料としての価値にも大きなものがある。第Ⅳ部掲載の諸原稿はこの目的に資するよう編集されたものである。第Ⅳ部第1章は、一人称一人語り形式のインタビュー記録であり、学生の感想が末尾に掲載されていることにより、学生が対象者の「語り」のリアリティに迫るプロセスが見て取れるようになっている。つけられた「タイトル」の工夫も見逃せない。第Ⅳ部第2章は、調査の実際に関わる諸原稿であり、調査依頼状・礼状等はかなりの程度そのまま流用して他の実習にも使えるものになっているのではないだろうか。

第Ⅲ部掲載の卒業研究「音を取り巻く相互行為分析—ギター教授演奏場面を事例として—」(短縮版)は、本学の学生のエスノメソドロジー研究の弱みである、「先行研究のレビューが甘い」という問題を苦闘しながら乗り越えようとしたものである。このシュツをめぐる苦闘はおおむね成果をあげているのではないだろうか。味わって頂きたい。

ついで、第Ⅱ部の各論文の簡単な解説を書いておこう。第Ⅱ部の各章のタイトルを見て頂くとわかるように、第2章「道具の非道具的利用—ことばやものが実際に使われている様子の研究—」(原田・正島・檜田論文)以外は、基本的に「動作」を「画像分析」の方法で扱っている。このような傾向は、撮影分析機材の高度化を遠因にして、世界のエスノメソドロジー全体の研究動向となっているが、その最新動向と我々の研究が相即していることをここから見て取ることができよう。残念なことに動画データの「LANハードディスク」による社会調査室内各クライアント・パソコンへの配信システムの構築には失敗し、学生には苦勞をかけたが、個別パソコンのハードディスクを活用して掲載された多数の写真が、これら諸章の分析を分かりやすいものになっているのではないだろうか。

以下、章番号順に解説をする。

第1章「食堂の中の交差点—車いすのエスノメソドロジー2—」(林論文)は、あの名作(日本のデータを扱ったエスノメソドロジー研究の中でとりわけ優れたものだとおもう)「相互行為におけるコミュニケーションと権力—車いす使用者>のエスノメソドロジー研究—」[山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正、1993→1997]の続編として位置づけることが可能な研究であると思う。ひとは90センチの幅があればすれ違えることができるが、車いすではそれは困難である。このような「車いす」の「特質」に基づいて、施設内の食堂に「交差点」が出現することになる。山崎らの論文においては、「介助者」を伴うという「車いす」の「特質」が解析されたが、本論文においては、「車いす」に乗っていることに伴う、

「食堂内通路の交差点化」現象が解析されているのである。私には、これは驚くべき成果であると思われた。なお、本論文の前半では、調査対象地である「Z園」に関する概説が書かれている。後続の論文を読む際にも参照して頂ければ幸いである。

第2章「道具の非道具的利用—ことばやものが実際に使われている様子の研究—」（原田・正島・榎田論文）は、本論部分を原田が、補論部分を正島が執筆し、論文全体の前書き部分を榎田が執筆した。実質的に原田の論文である。論文のねらいは榎田の前書きにあるとおり、“「ことば」の非辞書的利用”および“「杖」の非活用マニュアル的利用”の相同性に注目し、それを「会話分析」（原田執筆部分）および「ビデオ分析」（正島部分）の手法で検討したものである。本論と補論のこのような組み合わせ的編成が可能なこと背景には、「（ことばやものの）社会的意味」を探究するという通底した問題関心が社会学とエスノメソドロジーとの間にあるということが存在するのであり、したがって、ここにおいて、エスノメソドロジーが真性な社会学でありうることが証明（あるいは、例示）されているのだ、と私は思っている。

この1章と2章のいささか原論的な主張に比べれば、以下の諸章（3～5章）は、比較的応用的・実地的な内容を持っているといえよう。

第3章「職場のエスノメソドロジー」（正島論文）は、「大見さん（仮名）」の職場内相互行為を分析したものである。本年の実習では年度の前半に好井・山田・西阪編『会話分析への招待』、山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』をテキストとして用い、年度の後半には上野直樹『仕事の中での学習』ほかを教科書として用いた。本論文にはこの後期の上野の著書の影響が見て取れよう（文献表にはあがっていないけれども）。作業場での業務は毎日くもくとして行われ、音声を用いた分析が困難であった。その中で、ぎりぎりいえることを言っている（F陣形への言及など）ように思われる。

第4章「ある入所者の一日の活動を追って」（田中論文）は、「北川さん（仮名）」の活動を朝から夜まで追うなかで、議論を進めた論文である。朝の体調不良という「イレギュラリティ」がどのように「施設内の日常」として、「施設内の日常」の中に埋め込まれて、「生きられているか」、を証している、という観点がこの論文を評価する第一の観点であろう。なお、そのような視点もさることながら、本論文の後半における、「軽作業場」での「雑誌付録の袋づめ作業」における「紙をV字において他の付録素材を持ち上げる」メカニズムの解明は、「ビデオ分析」の面目躍如であるといえよう。このような「技術（テクニック、道具の非道具的利用＝第Ⅱ部第2章参照＝）」は、ただ現場にいて参与観察する中では理解・把握することができなかつた内容であった。研究室に戻ってきた後、繰り返しビデオを見ることで、そういう地道な研究実践の中から、紡ぎ出された論考であるといえよう。

さいごに、第5章「戸を閉めることのアフォーダンス」（佐々木論文）は、「戸を閉めること」に注目しながら、ひとが繰り返し行為することの中に「秩序」を発見しようとした研究である。「振る舞い」の秩序を「意図」や「意志」に還元する（常識的）「理解」と微妙なバランスを取りながら、研究が進められている。いささか「生煮え」風の論文になっているが、「こういう研究はおもしろい」と著者が感じ始めていることがよく分かる論文であり、こういう論文が掲載されていることも『実習報告書』の価値であろう。なお、末尾におけるジンメル『橋と扉』への言及は、「エスノメソドロジーとジンメルの関係の吟味」という我が国でいまだ未達成の研究課題のとば口を切り開くものとして評価できるのではないだろうか。

※ 本研究の一部（榎田が関わった相互行為分析部分等）は、文部科学省科学研究費補助金「医学教育のエスノメソドロジー」（平成16年度基盤研究（B）（2）：研究代表者、榎田美雄）の一部として実施された。

*** この論文で使用されているトランスクリプト記号 ***

・以下は、本実習報告書で使われているトランスクリプト記号である

? 語尾の音が上がって区切りがついたことを示す

< 急いで発話が始まっている状態を示す

下線 比較的大きな音、または強調されている部分

:: (コロンの列) 直前の音が延ばされていることを示す

gh 喉音

ha,hah,heh,huh など 笑いなど

[2人以上の参加者の発話の重なりが始まる個所を記す。

= 言葉と言葉、または発話と発話が途切れなくつながっている個所を示す

(数字) その数字の秒数だけ沈黙があることを示す

(.) 非常に短い間合い

(()) そのつど必要な注記であることを示す

() 何か言葉が話されているが、はっきり聞き取れないことを示す

第Ⅱ部 本文

第1章 食堂の中の交差点 ー車いすのエスノメソドロジー2ー

林 佑香

1. はじめに

今回、当初のテーマ『義肢装具の相互行為分析』により調査を進めるうち、車いすを利用されている加勢賢一さん（仮名。ここでは施設名、人名などはすべて仮名表記する）と出会い、加勢さんの障害と車いす、加勢さんの日常生活・活動それぞれがどのように関わっているのか関心をもった。加勢さんにもご協力頂き、加勢さんの日常生活や仕事の活動を詳細に見ていく中で、身体の障害は加勢さんの活動にどのように取り込まれているか、また、加勢さんと車いすとの関係について分析を進めていきたい。

2. Z園について

ここで私達が調査を行ったA県T市にある社会就労センターセルフZ園について、施設の概要を説明しておく。Z園は、働く意欲と能力をもちながら、障害のため一般の企業に雇用されることが困難な人たちが入所し、必要な訓練と働く機会と場所を得て、作業訓練費により自活すること、将来の職業自立を目指す施設として、昭和 57 年に開園した。（Z園のパンフレット参照）

Z園は、作業所や職員室がある建物、食堂、入所者が居住する寮、の主に3つの建物が併設されている。それらの建物は廊下や通路によってつながっており、自由に行き来が出来るようになっている。寮の居室は2人部屋が25室あり（2004.7.29において。後2004.12.15に訪れた時は一部改装され、1人部屋で生活されている人もいた）、利用者定員は50名である。現在の入所者数は約50名、寮には入所せず、Z園に通っている通所者も50名ほどいらっしゃるとのことである。

入所の契約条件としては、①市町村より施設支援費受給者証の交付を受けている人②身体障害者手帳の交付を受けている人③団体生活に適応できる人④その他、入所を適当と認め、身体障害者福祉法の入所者の要件に該当する人、が挙げられている。

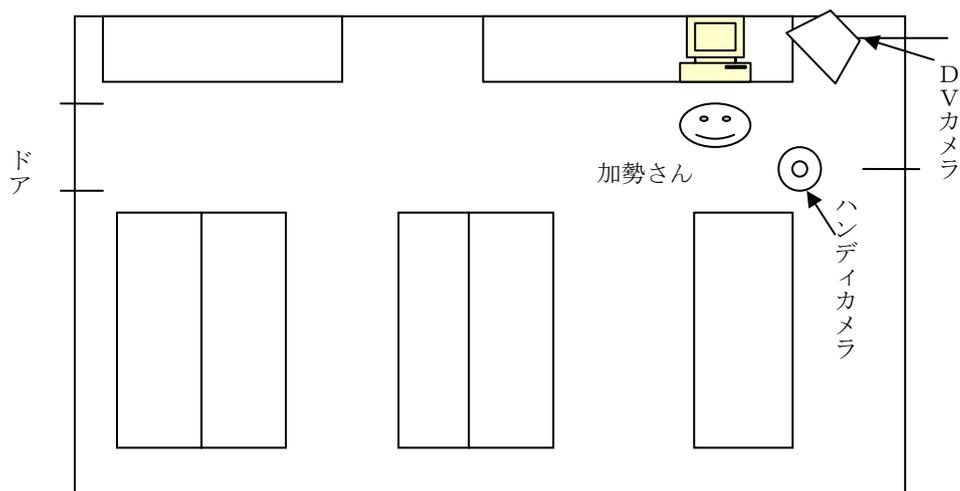
また、作業の内容によって、印刷科、軽作業科、表装科、レザークラフト科が設けられており、1人1つの科に所属し、作業を行う。作業部屋はそれぞれの科によって分かれている。給料はそれぞれの作業内容によって1人1人違い、固定給ではなく出来高払いとも言えるシステムである。

作業は9時から17時までで、12時から13時が昼休憩、15時から15分間小休憩がある。大体7時半頃から食堂で朝食、献立は一週間単位で決まっていて、栄養士さんによってバランスのとれたメニューが考えられている。また一週間の献立は食堂の外にある掲示板に貼られている。その後、掃除をし、朝礼、ラジオ体操を行ってから作業に入る。夕食は大

体 18 時頃からである。入浴時間は女性は 17 時頃から 19 時頃まで、男性は 19 時半からで入れ替わり制である。女性の中には作業終了後から夕食までの間に入浴する人も多いそうである。Z 園には大まかな規則はあるが、外へ出かけたたりすることなどは基本的に自由だそうである。よって近くのコンビニに出かける方も多いそうである。

3. 調査概要

A 県 T 市にある社会就労センターセルフ Z 園にて調査を行った。2004 年 7 月 29 日 (木) は加勢さんに日常生活や作業内容、義肢装具についてのインタビューを 1 時間ほど行い、MD による音声録音をした。翌月の 8 月 4 日 (水) は 8 時から 17 時過ぎまで、加勢さんに密着し、作業所や寮等での様子をビデオ撮影させて頂いた。また、2004 年 12 月 15 日 (水) に再び撮影を行った。ビデオカメラは計 2 台で、1 台は加勢さんが所属する印刷科の作業所に設置し、もう 1 台はハンディカメラとして使用し、加勢さんと一緒に移動しながら撮影した。ビデオカメラの配置図、作業所の配置図については、図 1 を参照して頂きたい。



【図 1：印刷科作業所の配置とビデオカメラの配置】

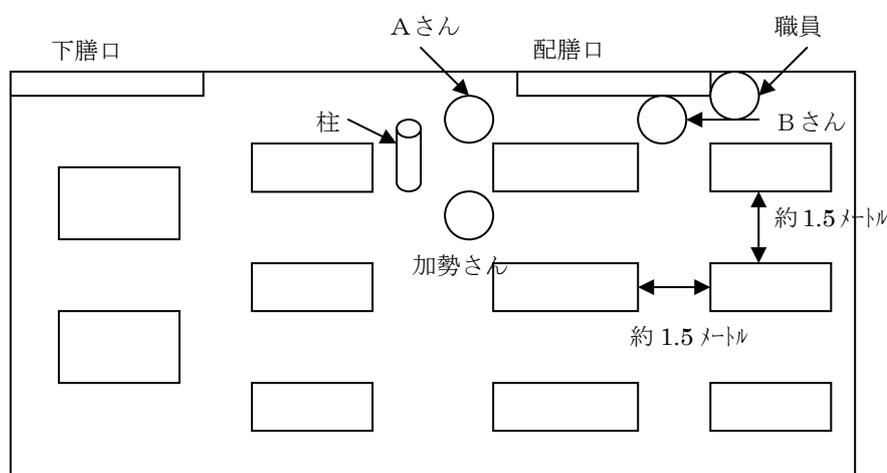
4. 加勢さん (仮名) について

加勢さんは現在 42 歳の男性で、Z 園には 19 歳の時に入所し、開園当初からなので約 22 年間併設されている寮で生活されている。病名は骨形成不全症。骨組織の形成障害が原因で、手足の長い骨や脊椎骨が折れやすくなる病気である。骨折などによって手足が変形していて歩行が困難なため、車いすを使用している。また、装具は保護目的として左足につけている。現在は印刷科に所属し、主には受注台帳をつけるなどの事務的な作業を行っている。8 月 4 日の作業内容はステープラーを止める、パソコン教室でのサポート、受注台帳

をつける、といったものだった。12月15日は、年賀状のレイアウトを校正する作業を行っていた。「この校正の作業はZ園では加勢さんしかできない」（職員A氏のコメントより）そうで、年末ということもあり、とても忙しそうだった。

5. 車いすにおける特有の選択肢と行為連鎖

Z園において、車いすを使用している方は加勢さん以外にもいる。それではこの施設内においての車いすとはどういうものなのか。それぞれの場面において、車いす使用者はどのような行動を適切と見なし、選択しているのか。車いす使用者の加勢さん、Aさん、Bさんの3人が行き交う場面について、それぞれの視線、行動に注目しながら詳細に見ていくことにする。場所は食堂である。3人の配置については図2を参考にいただきたい。



【図2：食堂における3人の配置図】

ここからは加勢さん、Aさん、Bさん3人が行き交う場面の流れを詳細に見ていく。なお、以下のデータは夏の撮影（2004.8.4）のデータである。

7:47:49AM、Aさんは視線を前方に向けたまま、前進し、徐々にスピードを落として止まる。この時視線は進行方向つまり、Bさんに向けられている。ここでは一度も加勢さんを見ていない。AさんはBさんからおよそテーブル1つ分の距離を取り、止まっている。Bさんは配膳口のところに止まっている。Bさんは7:47:48に配膳口の方に向けていた体をAさんの方向に向けるが、この時点では視線はAさんではなく、自分が持っているおぼんに向けられている。この時加勢さんは職員と会話している（7:47:44～7:48:01）。この場面でAさんがとる行動の選択肢として考えられるものは①前進する。②後ろに下がる。③右方向（加勢さんがいる方向）へ曲がる。④停止する。⑤加勢さんもしくはBさんに声を

かけ、どいてもらう。の5つが考えられ、Aさんは④停止する。を選択したことが分かる。ここで「選択肢」として取り得ると考えられるものは無限にあると言えるが、その場で期待される選択肢、有意味さを持つかどうかという点に注目し、記述している。Aさんは、加勢さんを見ていない、Bさんから一定の距離をあけて停止している、といった点から、テーブルと壁の間は2人がすれ違えるスペースがないと判断し、Bさんの出方、つまりBさんがこれからどういう行動をとるのか、前進するのか、しないのかによって次の自分の行動が左右されると考え、Bさんの行動を観察するために④停止する。を選択したと考えられる。(写真1参照。人の配置について、詳しくは写真2を参照して頂きたい。)



【写真1：2004.8.4 7:47:49AM】

加勢さん：停止した状態で職員と会話している。体の向き・視線は職員の方を向いている。

Aさん：速度を落とし、停止する。視線は前に向けられている。

7:47:56AM、加勢さんが職員と会話しながら少し後ろに下がって止まる。Aさんは視線を一瞬加勢さんに向け、また前を見る。ここでのAさんの選択肢として、前述した①～⑤が考えられ、Aさんは④停止する。を選択している。(写真2参照)



【写真2：2004.8.4 7:47:56AM】

加勢さん：職員と話をしている。体は職員の方を向いている。少しだけ後ろに下がる動きを見せる。

Aさん：一瞬加勢さんに視線を向け、その場で止まっている。

Bさん：おぼんを持っている。体はAさんの方向に向いているが、視線はおぼんに向けられている。

7:48:01AM、加勢さんが職員との会話を終え、前進し始める。体の向き・視線を職員から前方（Aさんの方向）へ向ける。ここでの加勢さんの選択肢として考えられるのは、①前進する。②後ろに下がる。③左方向へ曲がる。④右方向へ曲がる。⑤停止したままでいる。⑥Aさんに声をかけ、どいてもらう。であり、①前進する。が選択された。ここで、④右方向へ曲がる。という選択肢は、加勢さんがテーブルからやかんを取り（7:47:14AM）、下膳口まで運ぶ（7:48:20AM）という目的があるため、選択では優先されにくいと考える。（写真3参照）



**【 写 真 3 : 2004.8.4
7:48:01AM】**

加勢さん：話が終わり、体の向きを前方に向け、前進し始める。

Aさん：止まっている。視線は前方のBさんに向けられたままである。

Bさん：体の向きはAさんの方向を向いているが、視線は自分が持っているおぼんに向けられたままである。

7:48:02AM、Aさんは前進し始めた加勢さんに視線を向け、後ろへ下がり始める。ここでのAさんの選択肢として考え得るものは、①前進する。②後ろに下がる。③右方向（加勢さんがいる方向）へ曲がる。④停止したままでいる。⑤加勢さんもしくはBさんに声をかけ、どいてもらう。であり、②後ろに下がる。が選択された。このことから、加勢さんが前進し始めたことがきっかけとなり、Bさんの出方をうかがうことである④停止したままでいる。ことより、②後ろに下がる。ことが優先されたと考えられる。（写真4参照）



【 写 真 4 : 2004.8.4
7:48:02AM】

加勢さん：前進する。体・視線は前（Aさんの方）を向いている。

Aさん：加勢さんに視線を向け、後ろに下がり始める。

Bさん：視線はおぼんに向けられたままである。

7:48:03AM、Bさんは視線を前方（Aさんの方向）に向け、前進し始める。ここでのBさんの選択肢として、①前進する。②後ろに下がる。③左方向へ曲がる。④停止したままでいる。が考えられ、Bさんは①前進する。を選択。視線が前方（Aさん）に向けられていることから、Aさんが後ろに下がっている状況を確認した上で、①前進する。が選択されたと思われる。



【 写 真 5 : 2004.8.4
7:48:06AM】

加勢さん：前進を続ける。

Aさん：後ろに下がる。

Bさん：視線を前方（Aさん）に向け、前進している。



【写真6：2004.8.4
7:48:07AM】

加勢さん：そのまま前進を続け、左（Aさんの方向）に曲がる。

Aさん：さらに後退を続ける。視線は前に向けられている。

Bさん：少しずつ前進する。視線は前方に向けたまま。

7:48:13AM、Aさんは加勢さんに視線を向け、加勢さんに何か話しかけながら（7:48:10AM）、いったん停止し、加勢さんとすれ違う。ここで、Aさんには、①そのまま後ろに下がり続ける。②いったん停止する。という選択肢が考えられ、②いったん停止する。が選択された。（写真7参照）



【写真7：2004.8.4 7:48:13AM】

加勢さん：前進を続ける。Aさんの左側を通り、すれ違う。この時笑顔でAさんと何らかの言葉を交わす。

Aさん：いったん停止し、加勢さんとすれ違う。加勢さんに視線を向け、何か声をかけている。

7:48:15AM、Aさんは視線をやや右後ろに向け、後ろに下がり始める。その後、右後ろを見て、前に視線を戻しながら後退を続ける。ここでは、Aさんにとって、①前進する。②さらに後ろに下がる。③停止したままでの。の選択肢があり得、②さらに後ろに下がる。が選択された。Aさんは後ろに下がっている間（7:48:02~7:48:13）も視線は前方（Bさんの方）に向けられていたことから、Bさんが前進していることを認識した上で、この選択がなされたと考えられる。



【 写 真 8 : 2004.8.4
7:48:15AM】

加勢さん：前進を続ける。

Aさん：やや右後ろに視線を向け、後ろに下がり始める。



【 写 真 9 : 2004.8.4
7:48:17AM】

加勢さん：そのまま前進を続け、持っているやかんを下膳口まで運んでいく。

Aさん：視線を左後ろに向け、後退する。

その後、加勢さんは下膳口でやかんを渡す (7:48:20AM)。Aさんは右に向きを変えて進む (7:48:25AM)。Bさんはそのまま前進を続ける。

以上のことから、車いす利用者が行き交う場面を詳細に見ていくことによって、一瞬一瞬の場面において、様々な選択肢があり、そのうちのどれか、その場面において適切だと思われる行為が選択されていることが分かる。そして、一人が選択した行為によってもう一人が選択し、行為する。お互いの選択・行為がお互いの選択・行為を決定づける要因となっているのである。そして、このことから、私たちが普段何気なく行っている行為、この場合は人と行き交うという行為の中で、同じように、様々な選択肢の中から適切だと思われる行為を選択して行い、それは相互的なものであるといえるのである。

ここで、3人が居合わせている場所を食堂の中の「交差点」と捉えてみてはどうだろうか。道路の信号がない交差点では、ほとんどの車がいったんスピードを落としたり、停止した

りしながら相手の出方を窺い、どちらが先に通るのかを決めてから動いていると考えられる。この、道路で見ることができる秩序が、食堂で、目に見えやすい場面として観察できるのではないか。そこで「3人が交差点に居合わせている」という視点から、3人が選択した行為、特に「止まる」「後ろに下がる」行為は、この場面においてどのような意味を持つのか、シーン別に考えていく。

シーン1「止まることの意味」について

加勢さんの場合：7:47:44～7:48:01、停止しながら職員と会話している。

Aさんの場合：7:47:49～7:48:02、停止している。この間は1度加勢さんが動いた時に加勢さんに視線を向けるが(7:47:56)、停止したままで、視線はほとんど前方(Bさんの方向)に向けられている。

Bさんの場合：7:47:48～7:48:02、視線は自分が持っているおぼんに向けられたまま停止している。

「止まる」「止まったままでいる」行為はどのような意味を持つのか。「止まる」行為自体はそれを行った人にとっての最終的な課題(目的地に辿り着く等)を達成することにはならない。しかし一方では「止まる」行為によって他の人の選択肢が広がり、相手に選択するチャンスを与えることになる。また、「止まる」という行為は常に選び得ることができ、「前に進む」「後ろに下がる」行為よりも優先されやすい行為とも考えることができる。ここで注目したいのは、止まっている間のふるまいである。Aさんは視線をBさんに向けていたり、加勢さんに向けていたりしていることから、他の人の出方を窺っていることが分かる。加勢さんは職員と会話していて、Bさんは視線をおぼんに向けている。止まっている間に別の業務を行っていることから、一見課題達成できないと思われる「止まっている」行為を意味のあるものとして、また自分が止まっていること理由説明として(それが本当の理由とは限らないが)、相手に示していると考えられる。

シーン2「後ろに下がることの意味」について

Aさんが2度後ろに下がる場面に注目する。1度目は、加勢さんが前進し始め、その1秒後、それを見たAさんは後ろに下がり始める場面(7:48:02)である。2度目は、いったん停止して加勢さんとすれ違った後、再び下がり始める場面(7:48:15)である。

Aさんは右後方、左後方を振り返りながら下がっており、「後ろに下がる」行為はAさんにとって少なからず危険な行為であると認識されているといえる。「後ろに下がる」行為は危険であり、行為者の目的達成にはならないが、下がることによってスペースが広がり、また他の人の選択肢も広がる。それに対して「前に進む」行為はスペースが狭まり他人の選択肢が減るが、目的に近づくといえる。

ではどうしてAさんはこの場面において、2度にわたって自分の目的にかなわず、危険であると見なしている「後ろに下がる」行為を適切であると見なし、選択したのか。ここで

考えられるのが交差点の秩序である。この場面において、加勢さんとBさんは交差点の手前で止まっているが、Aさんは交差点の真ん中で停止していることになる（図2の配置図参照）。またこの交差点は配膳口の近くであり、人通りが多い交差点であることが予測できる。交差点の真ん中で停止するとはどういうことなのか。Aさんが停止している間Bさんの様子を窺っていたこと、加勢さんが少し後ろに下がった時、瞬時に視線を向け反応していたこと、加勢さんが前に進み始めた1秒後には後ろに下がり始めていることから、Aさん自身が自分が止まっている場所に違和感を持っていたと考えることが出来る。また、加勢さんは会話を終えると同時に（Aさんの様子を窺うことなく）前に進んでいるし、Bさんは前方にAさんが停止し、自分に視線を向けているにも関わらず停止したままでおぼんに視線を向けている。このことから次の行為について、誰に優先権があるかということは、この交差点で誰がどの位置にいるのか、場所が意味を持っているといえるのである。

6. おわりに

以上、車いすが行き交う場面を、食堂の中の交差点という視点から、そこで何が起きているのかを詳細に見てきた。そして車いす利用者の相互行為場面を通して、連鎖的で順番的な秩序が観察できたように思う。

また、山崎敬一ら（1993）による〈車いす利用者〉の購買場面の分析を受け、今回交差点の秩序に注目して分析を行ったことから、本稿のサブタイトルを「車いすのエスノメソドロジー2」とした。

参考文献

- 岡田光弘 1995 「相互行為場面における身体とカテゴリー——身体の社会学としての購買場面のエスノメソドロジー的相互行為分析——」『Sociology Today』6：27-38
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正 1993 「相互行為におけるコミュニケーションと権力——〈車いす使用者〉のエスノメソドロジー的研究——」『社会評論』44→山崎敬一・西坂仰編 1997 『語る身体・見る身体〈附論〉ビデオデータの分析法』、ハーベスト社：59-79

第2章 道具の非道具的利用 —ことばやものが実際に使われている様子の研究—

0. 導入

以下では本論「体面確保と配慮の表示—施設内の日常会話の研究—」でことばという道具の非辞書的利用を研究し、補論「杖という道具の扱われ方」で杖という道具の非マニュアル的利用を研究する。いずれの場合も、それぞれ「道具」（ことばや杖）の実際の社会的状況の中での使われ方を研究するという点で社会学的研究であるということになる。上記のような観点から別々に書かれた本論と補論をここにひとつにまとめて発表することにした。どうか組み合わせて読んで欲しい。

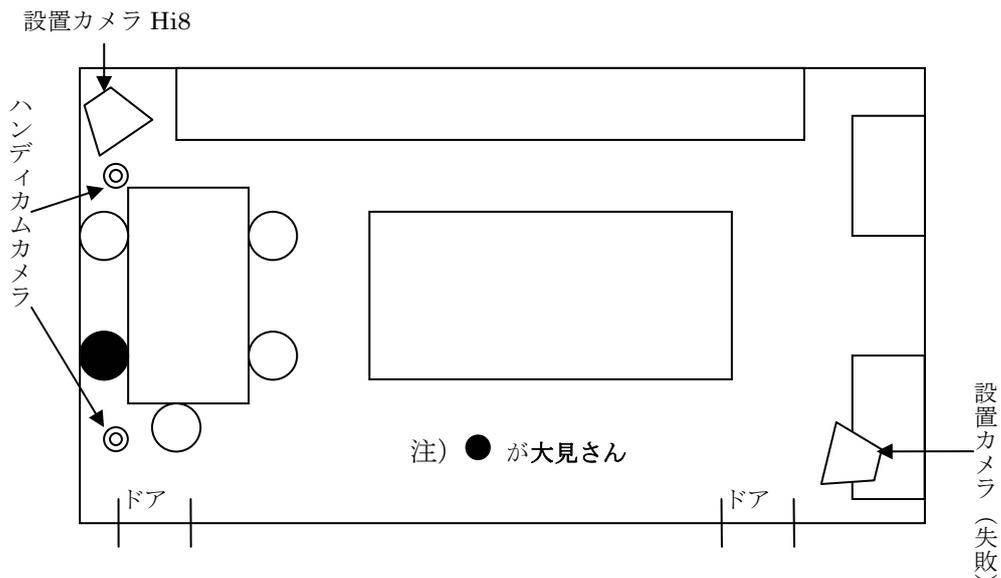
(樫田美雄)

体面確保と配慮の表示—施設内の日常会話の研究—

1. 調査概要

2004年7月29日と8月4日に、A県T市にある社会就労センターセルフZ園（ここでは施設名、人名などは全て仮名表記する）にご協力頂き、調査を行った。7月29日木曜日に調査対象者に日常生活や義肢装具等についてのインタビューを1時間ほど行い、MDによる音声録音をさせて頂いた。そして、8月4日水曜日午前8時から午後5時半過ぎまで、作業所や寮（2人部屋）等での具体的な相互行為のありよう及びその様子について調査を行った。この際、事前に許可を頂いて、撮影・MDによる音声録音をさせて頂いた。私と正島が担当をさせて頂いていた大見敏一さん（仮名）が作業をなさっている軽作業所の設置ビデオカメラは2台で、その他に学生が個々にハンディカムカメラを持って撮影させて頂いた。しかし、撮影後に設置ビデオカメラ1台の撮影に失敗したことに気づき、結果的に3台での撮影となった。軽作業所におけるビデオカメラ配置図については、図1を参照して頂きたい。

本稿は、道具や言葉がただ普遍的に使われるのではなく、マニュアルや辞書には書かれていない状況（文脈）に依存的な使われ方をされているという点に着目しようとするものである。文脈依存的な言葉や道具の使われ方は、ある文脈の人にとっては当たり前であり重要であるが、誰にでも共通するものではない。そうしたマニュアルに書かれていない使われ方にも重要な意味があるということを示していきたいと考える。ここで調査を行うことが必要となってくるが、調査をしたからといってすぐに気付くものでもない。この調査実習報告書では音声録音や撮影で得られたデータを、何度も詳細に見ていくなかで文脈依存的な道具や言葉の使われ方を提示していきたい。



【図1：軽作業所のビデオカメラ配置図 2004年8月4日】

2. 大見敏一さんについて

私たちの班は、大見敏一さんに調査させて頂いた。大見さんは、現在53歳で調査対象者4名中唯一の後天的な障害者であり、くも膜下出血で左半身麻痺になるまでは板前をしていた。障害者等級は2級で左足に装具をつけ、杖を使っている。入所期間は2004年4月1日現在で1年6ヶ月と、4名の中で1番日が浅い。Z園に来る前はA県N市の施設に入所していた。表装科を希望しているが、軽作業科で作業をしている。軽作業科では現在、月刊漫画雑誌の付録を作るところと、刺身などの飾りについては菊の花のようなプラスチックの葉を必要な部分といらぬ部分にちぎり分けるところが見られたが大見さんはプラスチックの葉をちぎる作業を行っていた。テレビ好きで、月刊テレビ番組情報雑誌を年間購読し、そこに記載されていないX放送の番組欄を、毎日娯楽室に置かれている新聞で調べている。軽作業中、会話に参加することはあまりなかったが、会話の随所でテレビ好きであることを作業所の人（入所者、通所者、施設職員など）が知っているように思われた。

3. 注目部分

データを見ていて聞いて気付いたことは、大見さんの話している内容がそれまで言っていた内容と違いが見られるということである。これは、大見さんがくも膜下出血により、2度の手術を受けていることが関係しているのではないかと考える。この時、他者訂正がされる時とされることがなく会話が進んでいく時に分かれる。8月5日のゼミにおいて、私は、他者訂正がされていない箇所であるテレビ番組の会話について、会話の参加者が「麦畑」が本当は「さとうきび畑」であることを知らないために他者訂正がされなかったと発言した。しかし、客観的なデータに基づくものではなかったため、「自己訂正は他者訂正に優先される」ことを述べたうえで、「“麦畑”が本当は“さとうきび畑”であることを知っている人がいた」可能性があることを指摘された。そこで会話の中で、自己訂正を促す箇所が見られることはなかったか、本当は知っている人がいたのかどうかを見ていきたい。会話の中で、自己訂正を促す箇所が見られることはなかったか、本当は知っている人がいたの

かどうかを見ていきたい。そして、他者訂正がされている箇所とされていない箇所とに注目し、日常会話がどのように形成されているのか考えてみたい。

2004年8月4日 大見さんの部屋

さとうきび畑① 7:55:17AM~7:55:44AM

01 学生：今日おもしろい番組何か。ありましたか

02 大見： (月刊テレビジョンに目をやり、手に取る) (1.8) さとうきびの。ある (わ) ((雑誌を開く))。

03 学生：あ：：： (0.2)

04 大見：9時〔PM〕から ((眼鏡を外す)) (0.2) さとうきび畑の歌。明石家さんまがでよるやつ＝

05 学生：＝ですよね。明石家さんまがでてるやつですよね。(へ：)
【大見さん顔をあげて学生を見る】

06 大見：テレビ大阪では(.)女() (3.0) 8時54分から
注)〔 〕内は原田。【 】内は動作。

3-1. 潜在的完結点

大見さんは1行目において、学生の「何か (なんか)」という発言を受けると、その後に続く質問「ありましたか」を聞く前に雑誌を手にするという、質問の意図を予測したと考えられる行動を取っている。この質問の予測と、学生の発話を最後まで聞いたことによる質問内容の確認と理解により、結果として1行目と2行目は、問い-答えという隣接対(好井ら編 1999:16)による会話構成となっている。これは質問をしたその結果として、次の順番に「答え」がくるといった拘束力をもたせる可能性もでてくるためである(同書 5頁)。この時に学生が、例えば、「何か」という疑問詞を順番の最初にもっていくことで、これから何らかの質問をつくり出す可能性を強く投企することができるが、実際の会話では文頭に用いられてはいない。疑問の投企により潜在的完結点に近いことを察知したのが、文頭に疑問詞が提示される場合に比べて、遅いために大見さんは、「何か」と聞くと同時に質問内容を予測して雑誌に目を向けるという行動を取っていると考えられる。発話を最後まで聞くことなく、「今日のおもしろい番組」を探す、もしくは思い出すことを、急いで行おうとする様子は雑誌に目をやり、手に取るまでの動作の流れが速いことからもうかがえる。ここで私は、大見さんが常に雑誌とテレビのリモコンをベッドに手に届く範囲に置いていることや、手に取る一連の動作の流れがスムーズであることから頻繁に雑誌を見ているという習慣があると推測する。こうした習慣と質問に答えなくてはならないという気持ちから、大見さんは急いで雑誌を手にとったのではないかと考える。

3-2. 雑誌の役割—自己訂正と他者訂正—

ここで雑誌は、単に“今日のおもしろい番組”を探すためのものではないと考えられる。2行目において大見さんは、雑誌を開く前に「さとうきびの」と答えている。質問の途中で雑誌を手にとったことにより、質問を予測し理解したことを非言語的に表明する役割と対

応ずる手段としての役割を果たしている。この時、答えるまでにわずかだが時間がかかったにも関わらず、質問を理解しているが正確な情報から答えるまでの会話の空白をうめる役割として雑誌が利用されている。私たちがインタビューを行う際に、「メモ取りはメモを取るという目的の他に、次の質問を考えるまでの時間つなぎになる」と学んだことから推測できるのではないかと思う。学生が 3 行目で「あー」と言ったことで、大見さんの応答に対するコメントとなっている。ここでの「あー」は、「①軽く呼びかける語。②親しい間柄で、同意や肯定の意を表す語。」「物事に感じて発する語。ah:oh」（『日本語大辞典』、1989:1）「①もの感じて発する声。②呼びかける声。③応答の声。」（『広辞苑』第 5 版、1998）「いずれも感動詞の「ああ」を引用した。」という辞書に載っているような使われ方というよりは、状態動詞（Change of State Token：話者の知識状態が例えば「無知」から「知」に変わるように、変化があったことを表示する発話の形：英語の Oh に相当）として使われていると考えられるだろう。「a[aa]ああ int.[感動詞][感動の発声]Ah!;Oh!;O!;Alas!」（下線は原田）（『新和英大辞典』第 4 版、1974:1）に記載されているように「ああ」と同様の意味で使われる「Oh」には、通常辞書に掲載されている言葉の意味とは違う水準の意味を会話分析の意味が明らかにしうることを示したエスノメソドロジー研究がある。

2004 年 8 月 4 日 大見さんの部屋

さとうきび畑①断片（簡略化）

- 01 学生：今日おもしろい番組何か、ありましたか ← 質問
- 02 大見： (1.8) さとうきびの、ある (わ) ← 応答
- 03 学生：あ：：： ← Change of State Token：コメント
- 04 (0.2)
- 05 大見：9 時 [PM] から ((眼鏡を外す)) (0.2) さとうきび畑の歌、明石家さんまがで
よるやつ＝

学生が 3 行目で「あー」と言った後に、大見さんはページをめくりながら「9 時から」と補足することで 1 行目の学生の質問に十分に答えているが、記載されているページまでめくる手を休めることはない。この動作により、音声上の無音がトラブルでなくなり、沈黙が沈黙として会話の参与者に重くのしかかってくるのが回避されていると言えよう。そして記載ページにたどり着くと眼鏡を外し、「さとうきびの」という不完全であった 2 行目の記憶に基づいた答えを言い直している。

これは曖昧であった発言に自己継続したと考えられるが、この時、学生は 2 行目の不完全な答えに対してコメントの意味を含んだ「あー」と返答している。ここで、大見さんが雑誌をめくっていることの果たす役割として、タイトルを何となく覚えているが正確なことはあまりよく知らないことを表している可能性が相手に察知され、具体的な質問を重ねて行うのではなく、与えてくれた応答に対するコメントを行う方が無難であることを知らせているように思った。そのため、自己訂正を促すような発言がなかったのではないかと考える。では、なぜ他者訂正がされていないのか。理由として、正しいタイトルをその場にいた 3 人（大見さん、学生 2 人）が知らなかった。知ってはいるが、言わなかった。この 2 点があげられるだろう。前者の場合で他者訂正がされないのは、大見さんが正確なこ

とはあまりよく知らないことを示しているにも関わらず、自分も知らないことをあえて取り上げて訂正したり追及することは、会話の混乱を起こしかねない。ならば、知らないことを言うよりは、大見さんが雑誌を調べている行為から、正確なことが明らかになるのを待った方が場に適していると判断されることが起こりうるように思われる。後者でも、大見さんが雑誌で調べていることから、相手の尊厳をも揺るがしかねない他者訂正を行うよりも、自己継続を待つという行為に至らせたと考える。この背景には、前述の「自己訂正は他者訂正に優先される」ということがあげられる。

3行目で学生が「あー」と発言したものの、その後さらにコメントしていない。「あー」という発話が、学生が知っていることを表していたならば、大見さんの雑誌による新たな情報「明石家さんまがでよるやつ」という言葉によって、さらに、私も知っていることを表す5行目の「ですよ 明石家さんまがでてるやつですよ」という発言につながっていく。私も知っていることを表明したために、その言葉を確かなものとして相手に知らせるという意味もあり5行目の相づち(?)がされたのではないかと考えた。学生が「ですよ」と言うと、大見さんはそれまでは雑誌を見ていたが、パッと顔をあげている。

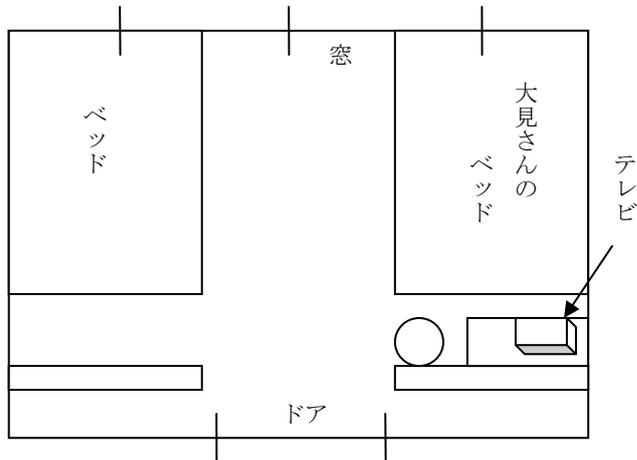
3-3. 雑誌の役割—副次的関与—

これまでに私は、雑誌をめくったりテレビを見ることは、「動作があることによって音声上の沈黙（無音）がトラブルでなくなる」という役割も果たしているのではないかと述べてきた。ここで雑誌の役割について E.ゴッフマンの著書を引用したい。

場面の中であるひとつの主要関与が指定されるかされないかは別として、社会的集まり—少なくともミドル・クラスの集まり—の中にいる者は、その集まりから全面的に遊離している自己の姿を見せまいとして、少なくともある最小限の主要関与を維持しようとする。これは、なぜわれわれの社会で待合室や旅客機に、雑誌や新聞などを会社側が備えているか、という理由のひとつである。これらの備え物は、最小限の関与に役だつにすぎないが、それが重宝がられるのは、(待つことだけしかすることのない時に)その重要さが増すということだけでなく、乗り換え駅や目的地でいつでもそれを手放すことができるからである。特に、新聞はここで重要な役割をはたしている。新聞は、携帯に便利なので、いつでも関与のよりどころとなっているし、また新聞は、関与すべきことがらに関与していないと感じた時には、いつでも取り出して読むことができる。(E.ゴッフマン 丸木ら訳 1980:56-57)

ここで、関与とは、ある個人がある行為—ひとりでする仕事、会話、協同の仕事など—をするのに調和のとれた注意をはらったり、あるいははらうのをさし控えたりする能力のことをいう(同書 48 頁)。大見さんは部屋にいる時はテレビを見ることが多く、画面に向かって体を左に傾けるようにベッドに座っていたのだが、つねに手が届く範囲に雑誌とリモコンが置かれていた。(図 2、画像 1 参照)このため、引用文の新聞のようにいつでも取り出して読むことが可能であった。大見さんは行為の基本線からは遊離している副次的関与をとる他にも、かかわりを放棄するなどの手を使うことができたと考えられる。けれども現場放棄として退去を行うことは、あとにとり残された人に「かかわりの対象として

不適當な人物である」と感じさせるという問題を生じかねない。E.ゴッフマンが示すように退去とは、相手に対する拒絶を表明する物理的行為であるためである（同書 198 頁）。これらのことから、会話が途切れた時などに雑誌やテレビに目を向けるという行為は、場に対する配慮の意思表示であると考えられるのではないかと思う。



【図 2：部屋の配置図】



【画像 12：雑誌を見る大見さん（15:12:45）】

2004 年 8 月 4 日 軽作業所

さとうきび畑② 1:13:42PM～1:14:42PM

- 01 女性 1 : 今日大見つあって何のテレビ見る [ん (で)
 02 男性 1 : [ha ha ha ha
 03 大見 : 麦畑や言うん
 04 男性 2 : hah hah
 05 職員 : 麦畑? (.) 何ほれ? heh [heh
 06 男性 2 : [ほれ何? =
 07 大見 : =沖縄の.
 08 女性 2? : ふう : : [ん
 09 職員? : [ふ : : ん=
 10 男性 2 : =戦争?.
 11 大見 : 戦争の [麦畑って
 12 男性? : [ふ : : ん
 13 男性 2 : 大体いつく何チャンネルで?
 14 大見 : (さんばとび) <4. 4
 15 男性 2 : 4. 何時から?
 16 大見 : 9時から.
 17 男性 2 : あ : : . わし戦争の (話) 見るん好きや=
 18 女性 1 : =あのな [8月のな. 15日な. [終戦日
 19 女性? : [(へえ)
 20 男性 2? : [だっ
 21 職員 : . gh [終戦記念日な : =

- 22 大見 : [しゅ =終戦記念日
- 23 男性 : 終戦記念 [日]
- 24 女性 1 : [う : ん]
- 25 男性 : 終戦記念日=
- 26 職員 : =まあ終戦日. うん.
- 27 男性 2 : heh heh= =heh heh
- 28 職員 : =heh [heh=
- 29 女性 1 : [でも外国のな防火牢]
- 30 職員 : そう (や) 原爆の歌歌わ.. 6 日と 9 日ちやうん=
- 31 男性 2 : =う : ん
- 32 女性 1 ? : そうやな
- 33 ? : もうい [い]
- 34 男性 2 : [hah hah 絶対やっちゃん嘘やな.
- 35 男性 ? : huh huh
- 36 男性 3 : なんちゃ心配することないやろ. [heh heh いつも通り=
- 37 職員 : [う : ん]
- 38 男性 2 : =誰か (.) きっかけがあったらうるさいんで
- 39 男性 3 : ほ [うやな
- 40 職員 : [う : ん
チャイムの音 2 回 職員連絡の放送のアナウンス
- 41 男性 3 : . さっきは春うららやったところやしな (.)

3-4. 本当は知っている人がいた可能性について

さとうきび畑①で 7:55AM に大見さんが“今日のおもしろい”番組として提示したタイトル「さとうきび畑」が、1:13PM の会話では、「さとうきび畑」を「麦畑」と誤って話されている。注目部分で前述したように、私は他者訂正がされていない箇所であるテレビ番組の会話について、会話の参加者が「麦畑」が本当は「さとうきび畑」であることを知らないために他者訂正がなされなかったと考えた。だがここで、「“麦畑”が本当は“さとうきび畑”であることを知っている人がいた」可能性や、会話の中で、自己訂正を促す箇所が見られることはなかったか、本当は知っている人がいたのかどうかについて考えていきたい。

1 行目で女性 1 の大見さんに対する質問があると、笑いが起きている。笑いが起きるような発言でもないにも関わらず、だ。この笑いは、質問の受け手である大見さんに対して、ひとつ間違えば個人としての尊厳を蔑ろにした行為であると捉えられてもおかしくない。1 行目の質問が、受け手である大見さんに合わせた質問であると考えられることから、2 行目の笑いは、大見さんがテレビ好きであることを会話の参加者が知っていることを表しているように思われる。また、これまでも（頻繁に？）大見さんがこの質問を受けているようにもとれた。しかし、これは大見さんが中心である（調査対象者として注目を集めている）ことを作業所の人が知っていることを表している可能性があるのではないかと岡田光弘氏に指摘して頂いた。2 行目の男性の笑いが、意識して質問を行ったことに対する笑いで

あるならば、この笑いが大見さんを軽視しているものではないと考えられる。そして 3 行目で大見さんが答えるという流れになっている。だがこの大見さんの応答に対して、4 行目でも 2 行目と同様に笑いが起きるような発言ではないにも関わらず、笑いがおきている。質問—答え—コメントととり得るのだろうか。

5 行目で職員が「麦畑？何ほれ」と質問している。ここは、「本当は知っている人がいた」という可能性を持っている箇所ではないかと思う。

3-5. 他者訂正

2004 年 8 月 4 日 軽作業所

さとうきび畑②断片

- 18 女性 1 : =あのな [8 月のな. 15 日な. [終戦日
 19 女性 ? : [(へえ)
 20 男性 2 ? : [だっ
 21 職員 : . gh [終戦記念日な : = ← 割り込みではない
 22 大見 : [しゅ =終戦記念日
 23 男性 : 終戦記念 [日
 24 女性 1 : [う : ん
 25 男性 : 終戦記念日=
 26 職員 : =まあ終戦日. うん. ← 再修正
 27 男性 2 : heh heh= =heh heh
 28 職員 : =heh [heh=
 29 女性 1 : [でも外国のな防火牢 ← 体面確保
 30 職員 : そう (や) 原爆の歌歌わ.. 6 日と 9 日ちやうん=
 31 男性 2 : =う : ん
 32 女性 1 ? : そうやな

21 行目と 22 行目の他者訂正はわずかな差ではあるが、職員が大見さんより早い。職員が訂正をした直後に大見さんも女性 1 に訂正を行っているが、その前にオーバーラップがおきており、この時、話を継続したのは職員であった。ここでオーバーラップの前に見られる職員の喉音「ん (gh)」や、若干早く声を出したことが最初の発話者としての優先権を得たと考える。そして、この「ん」によって職員の他者訂正は割り込みではなくなっており、しかも「終戦記念日な」と軽くとめる助詞を用いることで語尾を弱めている。このように訂正することで女性 1 の体面に配慮していると考えられる。しかし 21 行目の職員の訂正の後に大見さんと男性 2 人が続けて「終戦記念日」と、強く他者訂正をするかたちとなっている。女性 1 は 24 行目に相づちをうっているが、その後も他者訂正は続く。24 行目の「うーん」という女性 1 の相づちは承認であったり反論であると考えられるが、29 行目で「でも外国のな防火牢」と答えて話を先にすすめている。このことから、女性 1 の話において重要なことは、焦点を日か記念日かではなく「終戦」に置いていることを「でも」で示すことによって、女性 1 が自らの体面を確保しているということである。そして女性 1 が強く他者訂正されたことで、初めに訂正をした職員が 26 行目では「まあ終戦日. うん.」と

再修正を行っていることが分かる。つまり、この職員による再修正は、相手の尊厳をも揺るがしかねない他者訂正における配慮が示された発話であると考えられる

また職員の後に続けられる他者訂正は、それまでの戦争についての会話と関連性を持った発言であり「8月15日は戦争が終結した日」であるということを知っている女性1の立場を揺るがすものであった。21行目において、「知っている者」というメンバーシップカテゴリーを確立した職員は、「終戦記念日」であることは知らないが「8月15日は戦争が終結した日」であるという点では同じ「知っている者」である女性1の立場の修復として26行目の発話を行っているように思う。またこの会話から「会話のシークエンス（流れ）における次の一手は偶発性によるが、一定の規範的な制約がされている（山崎編 2004:38）」ことが分かる。そして職員は、30行目においても「知っている者」として振る舞っている。（好井ら編 1999:124-147 参照）

4. まとめ

大見さんにとって雑誌は情報を得るためだけに手に取るのではなく、質問を察知したことを表したりページをめくることで音声上の無音（沈黙）をトラブルとしないという、文脈に応じた使われ方がされていた。雑誌は、会話という主要関与がなされている際に、会話と並行してさり気なく続けられている行為である副次的関与としての使われ方がされていたと考える。こうした使われ方は、私たちの日常でもみられるものであり状況によって選択され得るものであるといえるだろう。また状況に依存した言葉の使われ方として、配慮であったり、体面確保をはかるために辞書には書かれていない使われ方がされていた。補論の正島の「杖という道具の扱われ方」でも、杖が体を支えるというマニュアルに書かれている使われ方だけではなく、窓を開けるように、いかに生活を便利に過ごしやすくするかという意識の中で道具や言葉も文脈に依存しながら使われているのだろう。

最後に、遠方からお越し頂き、適切なアドバイスをしてくださった岡田光弘さんのご意見は大変参考になりました。ありがとうございました。

参考文献

- E.ゴッフマン著 丸木恵祐、本名信行訳、1980 『ゴッフマンの社会学 4 集まりの構造』 誠信書房
- 山崎敬一編。2004 『実践エスノメソドロジー入門』 有斐閣
- 好井裕明、山田富秋、西坂仰編、1999 『会話分析への招待』 世界思想社
- 梅棹忠夫、金田一春彦、坂東篤義、日野原重明監修、1989 『日本語大辞典』、講談社
- 新村出編、第一版 1955、第5版 1998 『広辞苑』第5版、岩波書店
- 増田綱主幹、羽柴正市監修、市川繁治郎、日南田一男編集協力、1918、『新和英大辞典』（初版）、研究社、1974（第4版）
- MORRIS G.H. and CHENAIL RONALD J. (ads.)、1995 『THE TALK OF THE CLINIC』 LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES,PUBLISHERS Hillsdale,New Jersey
(原田越代)

補論：杖という道具の扱われ方

掃除は各担当が決まっているが、今回ビデオ撮影した日（2004年8月4日）に関していうと、大見さんは大見さん自身の部屋を掃除していた。部屋は二人部屋になっていて、入って右側が大見さんのスペースである。掃除は主に右側を中心に行っていた。ですぐの廊下に掃除機があり、それを使う。時間は5分程度の簡単なもの。掃除の基本的やり方は、右手に掃除機を持ち動かしながら、左手に杖を持って体を支えるというものである。しかし、細かく分析してみると杖や、杖以外のものをうまく利用して大見さんなりに掃除を行っていることが分かった。

<体を支える>

掃除機を持って体を動かすということは健常者にとっては簡単なことだが、大見さんの場合は簡単に行える動作ではない。掃除機のホースを持つことで非常に体のバランスが悪くなり、不安定な体勢になってしまう。そのため杖が体を支えるのに使われなければならないが、掃除機を使うことで、その杖が体を支える役割を果たせない瞬間がある。そういう瞬間を含んでいる掃除の場面では、体を支えることが非常に大切になる。ここで大見さんは3つのもので体を支えながら、上手に掃除をしていることが分かる。

1. 杖で体を支える

普段は右手に杖を持って歩いているが、掃除の時や、座るために椅子を引いたりなど手の動作を必要とするときは比較的自由に動かせる右手を使うために左手に杖を持つ。右手の掃除機ホースを動かしながら、自分の周辺の掃除を行う。



【画像1：杖で体を支える（7:53:05AM）】

2. ベッドのパイプで支える

体の方向を変えるときにはやはり体の支えが必要となる。ここではベッドのパイプを支えにし、うまく体の向きを変えている。



【画像2：ベッドのパイプで支える（7:51:30AM）】

3. 掃除機で支える

普通は体を支えるべき杖がここでは上手く機能していない。しかも、掃除機のホースまで左手で持っているため、ますます不安定な体勢をとらざるを得ない。そこで大見さんは不安定になった瞬間に素早く右手を掃除機本体の上につき体を支えている。



【画像3：掃除機で支える（7:53:38AM）】

4. 何も支えていない

道具を使って体を支えるというのは当てはまらないが、杖も何も使わずに足だけで支えている場面もあった。この場面はのちにも説明するが、大見さんの真正面にある窓を、杖を使って開けているところの足の部分の画像である。何も支えなしに立つことは少ないが、ここでは足を広げうまくバランスを保っていた。



【画像4：何も支えていない（7:52:46AM）】

杖は体を支える道具として、機能していると考えがちであるが、杖があってもその機能がうまく果たされていない場合があることがある。その場合には体を支えるという機能を、一般には体を支えるという機能を求められてはいない別のものにより補いながら掃除を行っているといえるのではないか。

<道具の目的外使用>

前で示したように、掃除機で体を支えるということも、本来はそういう目的で作られていないものであり「道具の目的外使用」ともいえることである。ここでは、体を支えるために作られた杖の目的外使用の場面をとりあげる。

大見さんは掃除をする際に、窓を手ではなく杖でうまく窓を開けることをしていた。そのときには足だけで体を支えており、バランスよく保っていた。なれた感じでしめる時も杖を使い、窓をしめていた。



【画像 5 : 杖で窓を開ける (7:52:18AM)】

掃除の場面では杖以外にも掃除機、パイプの 3 つを体を支える道具として使っていることがわかったが、ただ単に杖以外のものが体を支える道具として自然に使うことができるのには、私は部屋の広さとも関係しているのではないかと考えた。大見さんの部屋は二人部屋で広さは十分とはいえない。しかしこの部屋が狭いことが逆に掃除機が体を支える道具としてうまく機能している要因になっているのだと思う。狭い部屋ではほとんど掃除機本体部分が遠くに動くことはない。3つ目の画像を見ればわかるが、掃除機の本体がちょうどあの位置にあるからこそ大見さんは動くことなしにすばやく手をつくことができ、体勢を保つことができる。また掃除機の大きさを考えてみると、部屋が狭いことから考えるとあの大きさの掃除機は逆にデメリットになるように思えるが、大見さんが手をつくことから考えればメリットになる。この位置と大きさは道具を使う点で重要な要素となるのではないかと思った。

(正島祐子)

第3章 職場のエスノメソドロジー

正島 祐子

1. 調査の概要

1-1. はじめに

はじめに、私たちが行った調査地及び調査内容について簡単に説明する。

今回の撮影を行った場所はZ園である。Z園では入所者、通所者含めそれぞれが各作業場で働いている。施設の詳しい内容は第Ⅱ部第1章の林の本文に載せているので参考にしてほしい。その働いている方の中で私と原田が調査をさせていただいた方は大見敏一さん（仮名）である。大見さん自身の障害やZ園に入所された経緯については付録にインタビュー記録をつけている。大見敏一さんは軽作業場で作業しており、8月4日に行っていたことは緑のプラスチックのようなものを必要な部分といらぬ部分とに手でちぎり分ける作業であった。次にビデオ撮影を行った12月は刺身の飾りに使うプラスチックの菊を必要な部分といらぬ部分とに手でちぎり分ける作業であり、作業するものは8月と異なっていたが作業のやり方はほぼ同じである。

このように私たちは8月4日と12月15日の2回にわたりビデオ撮影をした。8月は仕事場だけでなく大見さんの部屋での休憩、移動、食事など普段の生活も撮影させてもらい、多くの場面を撮らせていただいた。

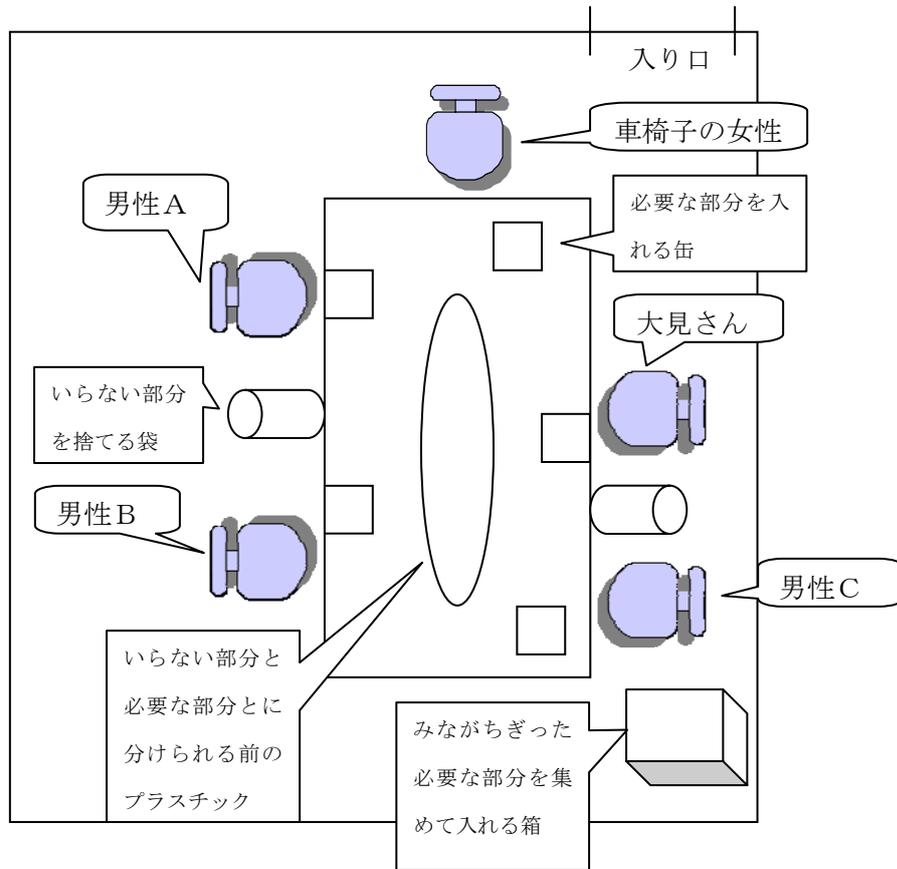
1-2. 注目場面

その中で私が注目する場面は大見さんの作業場面である。8月と12月では緑のプラスチックと菊とで作業物は異なっていた。しかしもっとも注目したのは作業の場所が異なっていたことである。このことに注目し、人、場所の移動などの作業空間の違いを二回のビデオ撮影を比較し分析を行う。

2. 8月4日のビデオ撮影について

8月の時は、基本的に大見さんを含めて5人で緑のプラスチックのものを手で分ける作業を行っていた。写真1に当時の作業の様子を示し、図1にそれをわかりやすく図にしている。

作業時間は、午前は9時から12時で昼食を1時間はさみ、午後は1時から3時、休憩を15分はさみ、3時15分から5時までとなっている。その中で実際に撮影した時間は、DVカメラ（手でもち随時大見さんを追いかけることができる）は9:19~9:58,10:40~11:04,11:15~11:20,11:26~12:00,13:03~13:23,13:25~14:25,14:29~15:18,15:19~15:30,15:31~15:35,15:38~16:32,16:35~16:40,16:42~16:47で、Hi8カメラ（作業場に固定し、全体を撮影したカメラ）は9:05~11:04,11:10~14:18,14:22~16:43である。



【図1 8月4日の座席配置図】



【写真1 5人が作業している様子 (2004.8.4 1:10 PM)】

まず大見さんは図の右の入り口に近い場所に座っている。右手で中央のプラスチックをとり、大見さんの向かって左にある缶に右手で入れる。左手は右手でプラスチックをちぎる時にプラスチックを押しやる役目を果たしている。そしていらぬ部分は大見さんの左横においている袋に集めている。大見さんが作業をしている場面は下の写真 2 を参照してほしい。



【写真 2 大見さんの作業の様子 (2004.8.4 9:17AM)】

次に一番入り口に近い場所に座っている女性は車椅子で作業をされている。車椅子であるため、この狭い作業場の中では作業中に部屋を出る以外の車椅子での移動はしない。

男性 A の方は、比較的左手が動きやすい。左手で中央のプラスチックをとり、右手で持って左手でちぎり、左手で捨てる部分を自分の右においている袋に捨てている。袋に入れるときは左手を右に持っていかなければならないので体勢が右に傾く場面が見られる。

男性 B は、プラスチックを必要な部分と、いらぬ部分に分ける作業を全部右手で行っていた。しかし缶は男性 B の左前に置いている。机の中央から自分のところに持ってきたプラスチックをその缶の上で、必要な部分といらぬ部分とに分けている。こうすることによってちぎって落ちる必要な部分が必然的に下にある缶の中に入っていくので後にちぎった必要な部分を集める手間が省けるのである。男性 B が缶の上で作業をしている場面は次項の写真 3 を参照してほしい。



【写真3 男性Bの作業の様子（2004.8.4 10:13AM）】

そして捨てる場所だけになったプラスチックを右手で左にある袋に入れている。いらぬ部分を入れる袋は男性Aと共有しているようである。そのように作業を行っている男性Bは体を正面よりやや左に向けて作業を行っている。

最後に男性Cはこの日に作業している 5 人の中で最も作業中にいなかった回数が多い方であった。なぜこんなに席を立つ回数が多かったのかはわからないが、今回の撮影でこの男性は 9:41~9:55、9:56~10:16、10:31~11:00、11:20~12:00、13:00~13:44 しか仕事場にはいなかった。

そして男性Cが作業をするやり方は他の 4 人とは違っている。男性Cは中央から持ってきたプラスチックを（この時点で他の 4 人が一回に取る量より少し多い。）手で、必要な部分といらぬ部分とにちぎるのではなくて両手を使い、机で、もむようにしてもんだ力で必要な部分を取っている。実際に今回の緑のプラスチックは必要な部分と捨てる部分は実と枝のような構造になっていてその境目は細くなっていて少しの力でも取れるようになっている。

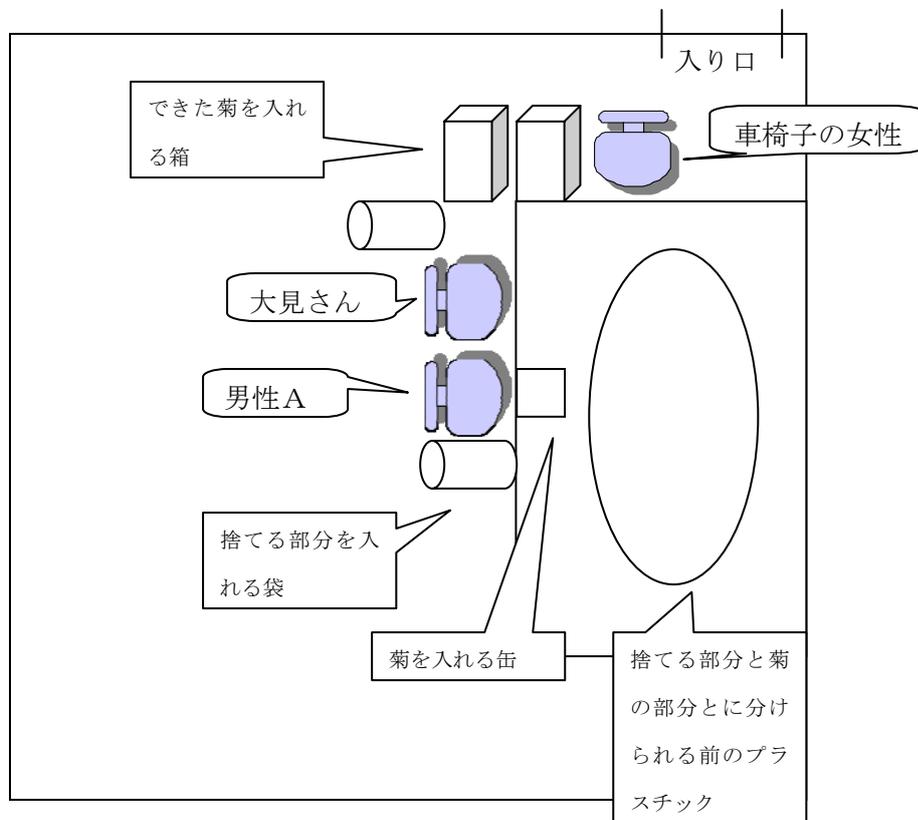
このため、もむだけでばらばらと必要な部分が下に落ちてくるのである。そうして何度かもんだあとに下に落ちている、必要な部分を両手で集め左手においている缶に移す。しかし、もんだだけでは全部は落ちないのでまだくっついていくつかの緑のプラスチックは手で取り、全部取れたら捨てる部分を別の袋に入れる。この作業を繰り返している。男性Cが作業をしている様子は次項の写真4を参照してほしい。



【写真4 男性Cの作業の様子（2004.8.4 1:10 PM）】

3. 12月15日のビデオ撮影について

12月15日は大見さんも含めて3人の方が作業を行っていた。作業を行う部屋は同じであったが、人の配置と机の配置が8月に比べて大きく変化していた。写真5にそのときの作業の写真を示し、詳しく図にしたものを図2に示している。（12月の撮影はタイムコード表示に失敗してしまい、撮影時の詳細な時間が出せていない。）



【図2 12月15日の座席配置図】



【写真5 3人の作業の様子】

まず机の位置は真ん中から、壁側に寄せられていて8月に大見さんがいた場所は埋められている。そして、机には菊のプラスチックが壁側に落ちないように机と壁との間にブルーシートで隙間を埋める工夫がなされている。

大見さんは、8月に男性Aが作業をしていた場所で今回は作業を行っている。そして大見さんは男性Aに背を向けるように左側に座っている。大見さんは左手の方にゴミとなった枝の部分を入れる袋をおき、右手には菊を入れる箱を置いている。大見さんは右手で菊を取り、そのまま右においている箱へ投げ入れている。大見さんが作業をしている場面は下の写真6を参照してほしい。



【写真6 大見さんの作業の様子】

車椅子の女性は 8 月の撮影の時と場所は変わっていない。入り口に近いことで彼女の移動がしやすいのではないのだろうか。8 月と同じように作業中に部屋を出る以外の車椅子での移動はしていない。

男性 A は 8 月に作業をしていた場所から横にずれる形になっている。しかし、できた菊のプラスチックを入れる缶を体の正面においていること、また捨てる部分を入れる袋を右においている配置は 8 月と変わっていないようである。男性 A が作業をしている場面は写真 7 を参照してほしい。



【写真 7 男性 A が作業をしている様子】

4. 注目部分

ここで注目したのは、大見さんと男性 A の位置である。明らかに二人は近く、しかも大見さんは入り口の方に、男性 A は体を窓側の方向に向けて座っているため見た目にはお互いがくっついて作業をしているように見える。以下では詳しく彼らの動作をみていく。

4-1. 男性 A が菊を落とした場面

今回の 1 時間 7 分 56 秒の撮影で男性 A が菊を落とす場面が 6 回見られた。その中で注目したのは 6 回とも男性 A が菊を落とすと必ず大見さんが視線を右下に向ける場面が見られることである。大見さんが視線を右下に向ける場面は次項の写真 8 を参照してほしい。男性 A は、菊を落とすと、左手で拾うために体を大見さんのいるほうへ傾ける。



【写真8 大見さんが目線を下に落とす】

4-2. 作業前のプラスチックを引き寄せる場面

8月の時も、今回の12月もまず中央においた作業前のプラスチックを毎回自分のところに引き寄せることから一連の作業は始まっている。この引き寄せる動作についてみられた8月と12月の違いは引き寄せる場所の違いである。大見さんは体を横にしているが自分の正面から作業前のプラスチックを引き寄せている。しかし男性Aは大見さん寄りの左から引き寄せている。

4-3. 作業前のプラスチックを補充する場面

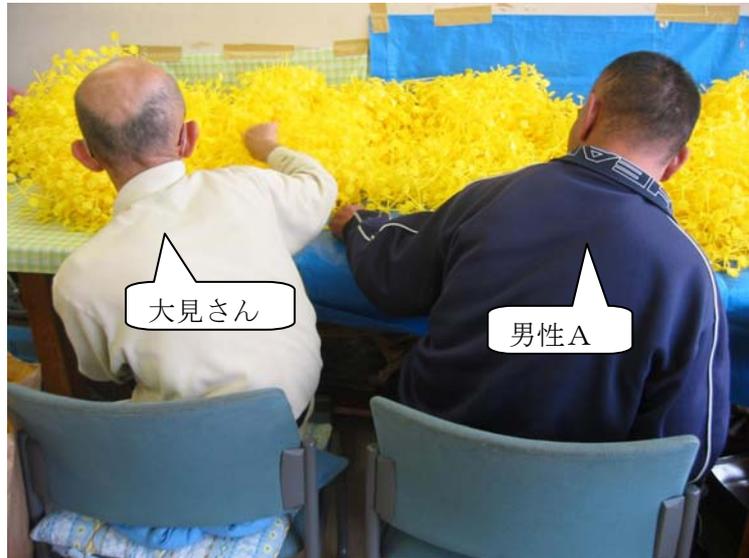
男性Aがプラスチックを補充する場面がある。男性Aは持ってきた新しい袋を大見さんの前でさかさまにし、袋の下の部分を振りながら中に入っているプラスチックを出そうとする。しかし、大見さんは出てきたプラスチックを手で払いのける動作を2回し男性Aに示している。その場面は下の写真9を参照してほしい。



【写真9 大見さんが手で払いのける】

4-4. 二人の位置

二人の距離は8月に比べてどの隣同士の距離関係よりも近かった。下の写真10を参照してほしい。



【写真10 二人の位置】

男性Aが菊を落とすたびに大見さんが気にする動作や、男性Aが持ってきた新しい袋を大見さんの前でさかさまにし、袋の下の部分を振りながら中に入っているプラスチックを出そうとするが大見さんは出てきたプラスチックを手で払いのける動作を2回し男性Aに示している部分をみると一見作業がしにくい環境のように見える。二人の位置には何が生じているのだろうか。

5. 分析

観察からはさまざまな視線の動きや動作が見られたがしかし、ビデオ撮影をしている時間内にはどちらとも作業の場所を変えようとはせず作業を続けていた。二人の位置は上に挙げたような作業のしにくさというトラブルを一見示しているようで、むしろそれらのトラブルが起きていないことの現れとも考えることができる。トラブル回避の最終手段である「作業の場所を変える」というお互いが作業しやすいように二人の距離をとることまでに至らない今の状況がトラブルには至っていないことの証拠になっているのだろうか。

まず、アダム・ケンドンというF陣形（F-formation）の視点から考えてみる。F陣形とは対面的相互行為において特定の身体配置を示すものである。西坂（2001）は加えてF陣形への身体の配置において「重要なのはあくまでも身体の上に表される参加者の志向であって、身体的の物理的な位置・向きではない」として、そもそも『参加者の「操作領域」は、各自の前面に拡がっている必要はない。』という。また相互行為空間の定義についても以下のように示している。

相互行為空間とは、参与者たちが、相互行為の展開のなかで、共同の志向を共同で組織するための空間であり、身体的位置や向きにより、志向的に（物理的ではなく）境界づけられている空間である。

つまり物理的には近い大見さんと男性Aの距離も、相互行為空間としてみればお互いの志向のもとにきちんと境界づけられているということになる。このことから作業の場所を変えないのは物理的には見えない境界線が二人の間に存在し、この職場での二人の間には秩序だった空間が成立しているからだ、とも説明がつくのではないだろうか。

6. まとめ

それぞれが自分の障害の程度（手足の動ける範囲や力など）に合わせて作業が行いやすいスタイルをとっていることがわかった。そしてその中で作業に使う道具を共有し、個々で作業がやりやすい人がその部分の作業を行っていることも観察できた。しかし、最も注目に値するのはこの空間における職場の秩序というものが決して障害（障害の程度や装具の種類）を基準にして成り立ってはいないことである。障害があるからといって作業の内容が変わるのではなく障害の範囲の中で同じ作業は進められ、全体にこの職場が成り立っている。つまり、Z園の大見さんが作業している職場においてなされるやりとりは障害がない職場でのやりとりと変わりはなく、障害がない職場と変わらない秩序が大見さんの職場にも存在しているのではないだろうか。

<参考文献>

西坂仰、2001、『心と行為』、岩波書店。

第4章 ある入所者の一日の活動を追って

田中 文恵

0. はじめに

この章では以下のようなことについて考えていきたい。

本稿を執筆するにあたり、調査対象者の一日の生活をビデオ撮影を行い観察した。その一日の生活場面を大きく三つに分類すると、「食堂・宿舎・職場」となる。そしてそれらの生活場面のそれぞれにおける注目点を取り上げた。

この研究では、データを丁寧に観察することに徹した。そうすることで、撮影当日にその場では気付かなかった点が見えてきた。それは、例えば付録の袋詰め作業の際に観察されるような、袋に付録を順番どおりに不足なく詰めていくというようなマニュアル的課題ではない実際の課題が存在するということである。加えて、その実際の課題は連鎖していることがわかった。マニュアル的課題は調査や観察を行わなくても把握することができるが、実際の課題やその連鎖というのは実際に調査・観察を行わなければ見えてこない点である。

実際の課題とその連鎖がどのようなものであるのか、撮影データをもとに詳細に示していきたい。

1. 調査の概要

1-1. 社会就労センターセルフZ園について

今回の調査では、A県T市にある社会就労センターセルフZ園（以下、Z園と表記する。また、ここでの地名、施設名、人名などは全て仮名表記する）にご協力いただき、二度の訪問をし調査を行った。このZ園は職業訓練施設と宿舎が併設されている施設で、「働く意欲と能力をもちながら、障害のため一般の企業に雇用されることが困難な人たちが入所し、必要な訓練と働く機会と場所を得て、作業訓練費により自活すること、将来の職業自立を目指す」ことを目的としている施設である。この施設には、通所者と入所者の二つのタイプの施設利用者がいる。今回の調査で私が担当させていただいた調査対象者である北川信一さんは後者のタイプで、宿舎（二人部屋）から職場である軽作業場へ通う生活をされているが、休日である土曜日と日曜日には実家に帰省されている。

なおZ園の詳細な概要については、第1章の林の「食堂の中の交差点一車いすのエスノメソドロジー2」を参考にして頂きたい。

1-2. 北川信一さんについて

調査対象者である北川さん（男性）は現在24歳で、Z園に入所して5年目になる。Z園に入所する前にはA県Hにある学校とセンターが併設された施設に入所されていた。

両足に装具を使用されており、比較的長距離の移動の際には装着されている。右半身に障害があり右手が少し不自由であるため、主に左手をよく使われる。

北川さんの仕事の担当は、軽作業科での少女漫画雑誌の付録を袋詰めするという作業である。

1-3. 調査概要

2004年の7月29日と8月4日にZ園を訪問し調査を行った。7月29日には、調査対象者の方に日常生活や装具等について1時間程度のインタビューを行い、MDによる音声録音を行った。また8月4日には、午前7時30分の朝食時から作業が終了（午後5時）して夕食を食べに食堂へ向かう午後5時30分過ぎまでの、一日の生活の様子について調査を行った。事前に施設と調査対象者の方から許可をいただき、ビデオカメラによる撮影とMDによる音声の録音を行った。ビデオカメラには三脚を付け、作業中などの移動がない時には三脚を広げてビデオカメラを固定して撮影を行い、移動がある時には三脚を付けたままの状態ですら調査対象者に常について回る形で撮影を行った。

また、2004年12月15日にも再度Z園に訪問した。その日も撮影を行う予定であったが、事前の連絡の不備のために調査対象者である北川さんが不在であることを確認できておらず、残念ながら撮影を行うことができなかった。

2. 注目点

先にも述べたように、北川さんの一日の生活場面を(1) 食堂 (2) 宿舎 (3) 職場の三つに分類した。そしてそれぞれにおける興味深い注目点を取り上げると以下のようなになる。

- (1) 食堂：バナナの皮をむき食べている場面
- (2) 宿舎：目的別で装具の装着と二つの靴を使い分けている点
- (3) 職場：作業におけるテクニック

(1) では、バナナの皮をむき食べるという流れの中で、よく使う左手と不自由である右手でその目的によってバナナを何度も持ち替えるという場面が見られた。(2) では、北川さんは歩く距離の長さによって装具の装着と二足の靴を使い分けているのだが、その使い分けがいつもと異なる場面が見られた。どうしていつもと異なる使い分けをしたのか、見ていきたい。(3) が最大の注目点となるのだが、付録の袋詰めの作業においての特筆すべきテクニックと、その作業における実際的課題というものが見えてきた。

これら三点について、次節で詳細に述べていく。

3. 考察

3-1. バナナの食べ方

ここでは、食堂での朝食時における北川さんのバナナの食べ方について取り上げる。彼はバナナやデザートが付いた朝食のうち、それら以外の主な食事を終えた後にバナナを食べ始める。

まずお膳の上に置かれたバナナを、よく使う左手で取り障害のある右手に持ち替える。そして右手で掴んでバナナを固定し、左手で皮をむき始める。(【画像データ 1】参照) そしてある程度皮をむくと、今度は左手に持ち替えきちんと皮がむけているかどうかバナナを左右に回転させながら確認する。きちんと皮がむけていなかったためもう一度右手に持ち替え固定し、左手で皮をむく。そしてもう一度左手に持ち替えバナナを左右に回転させながら確認する。きちんと皮がむけたのを確認し、そのまま左手に持ったまま食べ始めるという場面が見られた。(【画像データ 2】参照)



【画像データ 1：バナナを右手で持ち、左手で皮をむいている場面 (2004.8.4 AM7:42:07 カメラ 9)】



【画像データ 2：バナナを左手に持ち替え食べている場面（2004.8.4 AM7:42:14 カメラ 9）】

これらの一連の動きは、一見時間がかかり煩わしく不自然な動作であるように感じられるかもしれない。しかし北川さんにとっては、左手で取ったバナナをそのまま左手で固定し障害のある右手で皮をむくことは困難であるし、右手で皮をむくことができたとしても、左手で行うよりも数倍の時間が必要であるということは容易に推測される。また、右手に固定し左手で皮をむきそれを左手に持ち替えて食べるという動作にも北川さんなりの秩序がありそれに即した動作であると考えられる。右手を口元まで持っていくことが困難であるから左手に持ち替えて食べるということがあるのかもしれないし、右手を口元まで動かさなくても、口を右手のほうへ動かすということも考えられるが、よく使いよく動く左手に持ち替えて食べるということは、北川さんにとって当然のことであるし、これらの動作における秩序なのである。

3-2. 二つの靴

北川さんは、二つの靴を使い分けて使用している。それは装具を装着したときに履く茶色の靴と、装具を装着しないときに履く黒色の靴である。それぞれの使用目的は歩く距離の長さによって異なる。（【画像データ 3】参照）

例えば、仕事場である軽作業場へ向かうときや食堂へ向かうとき、または外出するときなど比較的距離の遠いところへ歩いていく場合などは、装具を装着し茶色の靴を使用する。また黒色の靴は、自室から近くの洗面所へ行くときや実家へ帰省するときなど、歩く距離が比較的短い場合に使用される。このことは、インタビューでの「(実) 家に帰るときは装具を付けずに普通の靴（黒色の靴）で帰る」（第IV部 付録 第1章の田中のインタビュー記録参照）という語りや、職場や食堂に向かう場面、洗面所に向かう場面それぞれの撮影で確認している。



【画像データ 3:装具を付け茶色の靴を履いている様子(2004.8.4 AM9:07:33 カメラ 9)】

撮影当日、北川さんは体調が思わしくなく朝食後に熱を測ったりされていた。そして部屋に帰ってきてからもベッドに横になっていた。Z園の午前の仕事の開始時間は9時であるのだが、この日は9時を過ぎても部屋のベッドで横になったままであった。定時を過ぎても作業場に北川さんがいなかったため、男性職員が北川さんの部屋へ様子を伺いにくるといことが見られた。

①	AM9:05:45	ベッドから起き上がり部屋の近くの洗面所へ向かう。そのとき、装具を装着し茶色の靴を使用。
②	AM9:14:15	洗面所から部屋に戻る。
③	AM9:16:06	作業場へ北川さんが来ていなかったため、男性職員が部屋に様子を見に来る。
④	AM9:16:44	男性職員が「(仕事に) 出て来られそうだったら出ておいで」と言い残し部屋を出て行く。
⑤	AM9:17:07	北川さんは、作業場へ向かうために部屋を出る。

【表 1】

上の表 1 の①から⑤は、北川さんが作業場へ向かうまでの一連の流れを記述したものである。ここで注目すべき点は、①9:05:45 の靴である。先にも述べたように、北川さんは洗面所等の比較的歩く距離の短い場所へは装具を付けずに黒色の靴を使用する。ベッドから起き上がる前は装具も靴の履いていない状態である。部屋の近くの洗面所へ行くだけならば黒色の靴を使用するのが自然なように思われる。しかし北川さんは、長距離用である装具と茶色の靴を履き洗面所へ行った。そして、②9:14:15 に部屋へ戻ってきてからベッドに腰掛けたまま、「仕事に行こうと思えば行けるんやけど、行った後また熱が上がると思うし。我慢して行こうと思うけど」と話された。③9:16:06、④9:16:44 と、男性職員が北川さんの様子を伺いに部屋を訪れ、退室した後すぐに北川さんはベッドのすぐ横にある扇風機を止め、作業場へと出向いて行った。

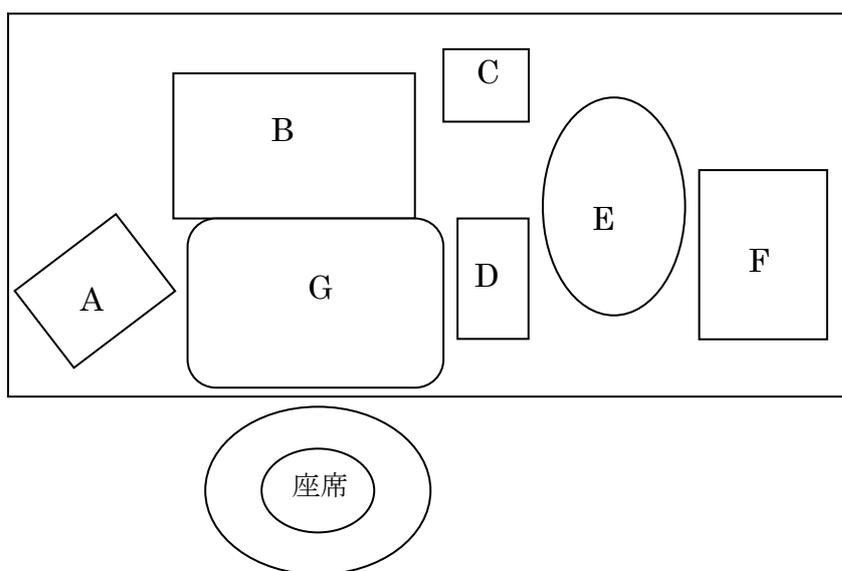
ここで疑問になるのが、何故北川さんは①9:05:45 の時に装具を装着し茶色の靴を

使用したのかということである。二つの靴の使い分けは北川さんにとっては日常的事であり、ただ間違えたということは考えにくい。また、先述の②9:14:15 の後の北川さんの語りから、仕事に行くか否かの迷いが見られるように思える。しかし、①9:05:45 の時点で装具と茶色の靴を使用していることから、この時には既に北川さんの中で「仕事に行く」と言う考えに大きく傾いていたのではないだろうかと考えられる。けれどもなかなか考えに踏ん切りがつかないために作業場へ向かわず部屋にいたのではないだろうか。男性職員が北川さんの部屋から出て行った後すぐに北川さんも仕事場へ向かったことから、男性職員との接触によって北川さんの中で気持ちに踏ん切りが付き、「仕事に行く」という選択をしたのではないかと思われる。

部屋の近くの洗面所という近距離に移動するのに使用された装具と茶色の靴には、北川さんの「仕事に行く」事に対する考えが表されていたと言える。

3-3. 作業における工夫と実践的課題について

ここでは作業の過程で見られる工夫とその過程での実践的課題、またその課題における失敗を回避するためのテクニック等について述べていく。以下、下の図 1 と次頁の表 2 を用いて記述していくので参照していただきたい。



A: 赤色のビニール袋 (収納袋に入っている) B: 透明のビニール袋 (収納袋に入っている) C: 冊子 D: 封筒 E: 財布 (山積みされている) F: 厚めの紙
G: 作業スペース

【図 1: 付録の袋詰め作業に使用される物の配置図】

上の図 1 は、北川さんと北川さん以外の 6 人の方が作業されている同じ机のうち、北川さんが作業を行っているスペースだけを取り出し、作業に使用される物の配置を示したものである。

座席から A までの直線距離は約 25 cm、同様に B までは約 30 cm、C までは約 40 cm、D までは約 25 cm、E までは約 30 cm、F までは約 40 cm である。北川さんは体幹を軸

にし、A から F の物を左手を伸ばして取っていた。A から F の物を総て左側に置くと効率が良いように思えるが、左側には別の作業を行っている方がおりその方の作業に必要な物を置くスペースとなっている。

作業の順番	作業内容	視線	手
①	・ B を一枚取り作業スペース G に置く。 ・ その際、B の開いている方が常に左手側になるように置く。	B	左手
②	・ F を取り、G に移動した後の B の上に置く。 ・ 必ず B よりも少し手前にずらし、F の上部が常に左手側になるように置く。	F	多くは左手。 右手の場合もある。
③	・ A を取り、作業者の体幹から遠方側の F のへりと右上方の角を合わせて置く。	A	左手
④	・ D を取り、先ほど重ねた F・A の、作業者の体幹から遠方側のへりと右上方の角を合わせて置く。 ・ 常に D の上部が左手側になるように置く。	D	左手
⑤	・ C を取り、先ほど重ねた F・A・D の、作業者の体幹から遠方側のへりと右上方の角を合わせて置く。 ・ 常に D の上部が左手側になるように置く。	C	左手
⑥	・ 作業スペース G にある先ほど重ねた F・A・D・C を左手で手前にずらし、親指で F を V 字に曲げ全体を持ち上げる。	作業している 手元	左手
⑦	・ B の口を右手で開け、F・A・D・C を入れる。	作業している 手元	右手で B の口を開け左手で入れる。
⑧	・ 全体を机上で軽く叩き、袋内配置を揃える。	袋内配置を揃えている袋	左手
⑨	・ 最後に F・A・D・C が入った B の中に E を入れる。	E	左手

【表 2】

表 2 は、図 1 の配置の諸々の付録の袋詰め作業の順番と、それぞれの物を取るときに左右どちらの手を使用しているかと、その時の視線の先を示したものである。付録を取る順番は B→F→A→D→C→E で、B の上に F、その上に A というように上に上に C までを重ねていき、すべてを B に入れ終えたあとに E を入れて完成となる。1 つを完成させるのに要する時間はおおよそ 1 分 30 秒で、10 分間で約 6 つの物が完成する。

表 2 の①から⑨の作業の様子を丁寧に見ていくと、作業⑥において注目すべき点がある。それは、重ねた F・A・D・C (以下、X と表記する) を B に入れる時に、X (正確には F と A) を軽く V 字に曲げるという点である。

まず、X (正確に言えば F の左端) を左手で手前に引き寄せる。その時の視線は X を持っている手元にある。(画像データ 4 参照) 次に、X の左端の中心位の位置に親指がくるようにもち、その親指を使って X を V 字のような形に軽く曲げる。この時の視線は X にある。

(画像データ 5 参照) そして X を少し持ち上げる。この時の視線はまだ X にある。(画像データ 6 参照) その後視線を X から B へ向け、右手を持ち上げ (画像データ 7 参照) B の口を開ける。



【画像データ 4 : 重ねた付録を手前に引き寄せる場面 (2004.8.4 AM9:24:12 カメラ 9)】
矢印は視線を表している。以下、画像データ 5 から 7 も同様。



【画像データ 5 : 紙を V 字に折り曲げる場面 (2004.8.4 AM9:24:13 カメラ 9)】



【画像データ 6：重ねた付録を持ち上げる場面（2004.8.4 AM9:24:13 カメラ 9）】



【画像データ 7：右手を持ち上げている場面（2004.8.4 AM9:24:14 カメラ 9）】

これらの作業は単調なもののように映るが、そうではない。大きな山場とも言える点がある。それは、注目すべき点である、X を V 字に曲げる場面である。北川さんは、X を V 字に曲げて持ち上げる際には X の方へ視線を向け F の上に乗っている A・D・C が落ちないかどうかの安定感を確認してから、B の方へ視線を向け入れていることがわかる。そうす

ることでスムーズに X を B に入れることができ、より時間を短縮できる方法である。X を V 字に曲げないと上に乗っているものは落ちてしまい上手く持ち上げることはできないし、B のような柔らかい素材の物にスムーズに入れるのは時間がかかる作業である。X を V 字に曲げることは、この作業をスムーズに行うための素晴らしいテクニックであると言える。

また、この作業の最大の山場へ向けてのスタート点となるのが表 2 の①から⑤である。①から⑤では総ての物を F の右上方のへりと角に合わせて重ねて言っていることがわかる。これは、X を V 字に曲げ持ち上げる際に重ねた物を落とすことなく上手く持ち上げるための準備であり、B に入れる時にスムーズに入れるための準備でもありまた、袋内配置を揃えるという時間の短縮にもなっている。それと同時に、総ての物を F の右上方のへりと角を重ねるというやり方のために A・C・D・E・F が総て見える形となり、B に入れる前にそれまでの不備がないかどうか確認できる。そうすることで、完成までの時間を短縮することができると言える。上記の作業が上手くできれば一番短い時間で作業を終えることができる。

以上は作業が成功した場合であるが、次に一つの失敗例を挙げてみる。撮影したデータの AM9:56:59 に X が B になかなか上手く入らず、成功した場合よりも時間がかかるという場面が見られた。この場面をよく観察してみると、成功した場合よりも C が少し全体から外側へずれていることが見られた。外側へずれた C が B に引っかかり上手く入れることができないということが起きていた。そのことで一つの作業にかかる時間が成功した場合よりも長くなってしまった。

これらのことから、この作業における実践的課題が見えてくる。表面的に見られる作業の流れ、例えば A・C・D・E・F を重ね B に入れるというようなことはこの作業におけるマニュアル課題と言える。そうではなく、A・C・D・F を重ねていく際に総ての物の右上方のへりと角を合わせることで、X を B に入れる際に X を V 字に曲げること、そして V 字に曲げて X の上に乗っている物を落とさないようにすることこそがこの作業の実践的課題である。それだけではなく、これらの実践的課題は「右上方のへりと角を合わせる一落とさないようにする—V 字に曲げる」というように連鎖していると言える。X を V 字に曲げたときに上に乗っている物を落とさないために総ての物を右上方のへりと角に合わせて重ねていき、それらを B に入れる際に落とさないために X を V 字に曲げるのである。そして、B にスムーズに入れるという課題へとつながっていく。実際的課題の連鎖を成功させることが、作業時間を短縮させ作業を成功させることになるのである。この実践的課題の連鎖は作業を成功させるための秩序だったものであると言える。

4. まとめ

これまで北川さんの一日の生活を食堂・宿舎・職場に分けて見てきた。食堂での、バナナを左手で取り右手に持ち替え固定し左手で皮をむきまた左手に持ち替えて食べるという一見不可解な動作の中にもその状況に即した秩序があることを述べた。続いて、宿舎での装具と二つの靴の使い分けの点におけるいつもと異なる靴の使用には、北川さんの「仕事に行く」ことの意味が表れていたことがわかった。最後の職場での作業には、表面的に見られるマニュアル的課題ではないその作業の流れに必要な実践的課題があり、その実践的課題は連鎖しているということがわかった。これら全体を通して言えることは、様々な特殊な形に見える行為の中にもそこには秩序があるということである。

例えば、3-3 で取り上げた作業の場面での北川さんの仕事の構造は、障害者ゆえに特殊な形になっていると捉えられるかもしれない。しかしながらそうではなく、実際の課題の連鎖が秩序だっているという点においては、健常者と同じであると言える。障害者であろうと健常者であろうと、一つの物事の中にはその物事における状況に即した秩序があるのだ。本章を通して主張したかったことは、すべての行為や状況が障害者ゆえに特殊な形になっていて、それがいかに健常者の物と異なるかということではなく、障害者ゆえに特殊な形になっているがそこには秩序があり健常者と変わりはなく同様であるということであ

る。障害者の特殊性を健常者と比べることで際立たせそれを障害者ゆえであると結論付けるのではなく、障害者の生活も健常者と同様なのであるということを述べたかった。

そのためには、この調査で行ったような時間をかけた調査・観察をすることが大切であると思う。3-3 で述べたような実際の課題の連鎖は調査やデータをじっくりと観察しないとわからない点である。このようなことはどのような研究においても共通する点であると思う。時間をかけて調査することやじっくりとデータを観察することで、常識や先入観にとらわれずにその物事における驚くべき事実が発見できるのではないだろうか。

第5章 戸を閉めることのアフォーダンス

佐々木 実花

1. 調査の概要

2004年8月4日(水)、A県T市の社会就労センターセルフZ園(ここでは施設名、人名などは全て仮名表記する)において調査を行った。午前8時から午後5時半過ぎにかけて、作業所や寮等での生活の様子をビデオで撮影した。

2. 鈴木さん(仮名)について

病名は二分脊椎。車椅子で生活している。毎日少しずつだが、義足を装着し、杖をつきながら歩行の訓練をしている。軽作業場での仕事を担当しており、タイヤの部品を扱う仕事や、少女漫画雑誌の付録の袋詰め作業などを行っている。

3. 注目部分

戸が人にどのようなメッセージを送信し、人がそのメッセージをどのように受け止めているのかに興味があったので、戸の出入りに場面を絞って分析していくことにした。様々な戸の出入りの場면을観察したが、その中で特に興味深かったのは鈴木さんの自分の部屋への出入りの場面だ。Z園(仮名)では多くの戸が開け放たれており、自分が開けた戸でも閉めないことが多い。鈴木さんも開け放したまま通り過ぎることが多かったが、閉める場면을観察することが出来た。ほとんどが開け放したままなのに、一部で閉める時があるということから、閉めることには何か特別な意味があるのではないか、と思い考察してみることにした。

3-1 開けるか閉めるかの判断

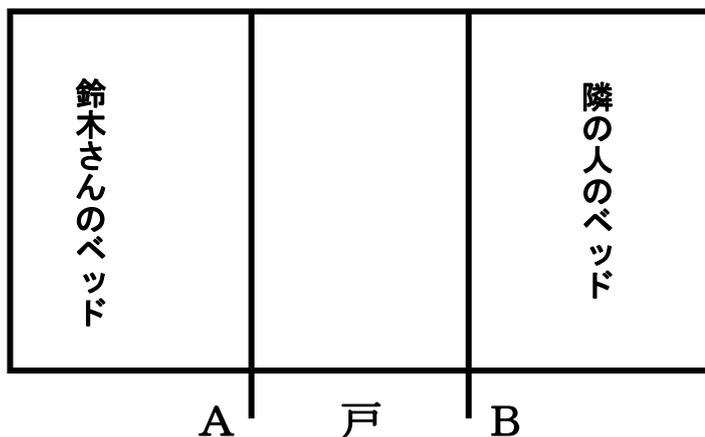
鈴木さんは、自分の部屋の内側から外側へ出る際に①開け放したままにする時と②自分で閉める時とがあった。この違いがどうして起こるのかを考えてみたい。

3-2 仮説 閉め方の違い

鈴木さんが寝泊まりしているのは2人部屋で、入って左が鈴木さんのベッド、右が他の人のベッドになっている。(図1参照)ここでの仮説は戸を閉めることが前提で、それが神経質になされるか否かを問題としている。

私がAの位置に立っている場合、鈴木さんは戸を閉めることに関してそれ程神経質になっていないようだ。私がAの位置に立っている時、鈴木さんに焦点を当てて撮影する限り、部屋の中までがビデオに写ってしまうことはないからだと考えられる。厳密に言うと、この角度から鈴木さんが使っているベッドまでが写ってしまうことはない。写るとすればそれは右側なので(他の人が使っているベッド側)、そこが写ろうが写るまいが、それは鈴木

さんにとって重要な問題ではない。だから私が A の位置に立っている時、鈴木さんは精神的余裕を持って戸を閉めたと考えられる。それに対して私が B の位置に立っている時、鈴木さんのベッドが置いてある左側が写ってしまう。だから鈴木さんは、出来るだけ早く戸を閉めたいという思いから、Aの時と比較すると精神的に緊迫した状態で戸を閉めたのではないか。



【図1：鈴木さんの部屋の構造】

3-3 ビデオに基づく分析

3-3① 撮影者の視線を気にしている場面

上で述べた仮説が成り立つには、まず、鈴木さんが撮影者である私を意識している場面が観察されている必要がある。画像1-1～1-3は、鈴木さんが部屋に入る直前の一連の動作を示している。3枚を見比べてみると、画像1-2でわずかに後ろを振り返っていることが観察できる。これは撮影者を意識していることを表す行動だと考えられる。



【画像1-1】

部屋に入る場面

(2004.8.4. AM6:35:23 カメラ)



【画像1-2】

わずかに後ろを振り返っている

(2004.8.4. AM6:35:24 カメラ)]



【画像1-3】

(2004.8.4. AM6:35:26 カメラ)

また、画像2-1～2-4は、鈴木さんが食堂の戸を開ける場面だ。画像2-2で観察できるように、戸を開けた時に後ろを振り返るしぐさが観察できる。車いすで戸を開けると、体が後ろを振り返るような角度になる。そのため画像2-2だけでは、後ろを振り向こうとして振り向いたのではないとも取れる。しかし、画像2-3を見ると、戸を開け終わった後でも後ろを振り向いている様子が観察出来る。このことから、やはり撮影者を意識して視線を向けたのだと考えられる。



【画像2-1】

戸を開けようとしている

(2004.8.4. AM6:33:53 カメラ)



【画像 2-2】

戸を開けてしまった後、後ろを振り返っている

(2004.8.4. AM6:33:58 カメラ)



【画像 2-3 : 戸を開ける場面③

わずかに振り向いている。】

(2004.8.4. AM6:34:00 カメラ)



【画像 2-4】

(2004.8.4. AM6:34:02 カメラ)

また、画像 3-1～3-4 では、大きく後ろを振り返る場面が観察できる。これは後方に関心を抱いていることを示すデータだと言えよう。



【画像 3 - 1】

(2004.8.4. AM7 : 32 : 50)



【画像 3 - 2】

後ろを振り返った

(2004.8.4. AM7 : 32 : 51)



【画像 3 - 3】

大きく振り返った

(2004.8.4. AM7 : 32 : 52)



【画像 3 - 4】

(2004.8.4. AM7 : 32 : 53)

また、画像 4 - 1 ~ 4 - 6 は部屋から出て来る場面だが、この時鈴木さんの視線は一貫して撮影者の方に向けられている。これは、撮影者の視線がどこに向けられているのか監

視する視線だと考えられる。撮影者がどこを見ているのか監視することは、撮影対象を探ることと関係している。自分にとってあまり撮影されたくない場所(ここでは自分のベッド周り)に撮影の焦点が当てられているのであれば、それを対象から除外するよう撮影拒否の行動をとることが出来る。



3-3② 戸を閉めるのを失敗する場面 (撮影者はBの位置に立つ)

部屋を出ながら戸を閉める場面が画像 5-3～5-11 で観察できる。この場面で撮影者はBの位置 (図1 参照) に立っている。画像 5-7 で観察できるのは、戸を閉めようと取っ手を掴もうとするのだが、手が上手く取っ手に引っかからなかった場面である。鈴木さんは自分の部屋を撮影されるのを拒絶したいので、早く戸を閉めようと試みたのだが、結果的に焦りに繋がり失敗したと考えられる。撮影者が A の位置 (図1 参照) に立ってい

る時にはそのような焦りを生み出す要因は存在しない。確かに A の位置に立っている時にはこのような状況を観察することは出来なかった。



【画像 5 - 1】

入る時は閉まっていた。
自分で開けて入り、出る
時に閉める。

(2004.8.4 AM6:48:46)



【画像 5 - 2】

(2004.8.4 AM6:48:47)



【画像 5 - 3】

出て来るところ

(2004.8.4 AM6:51:59)



【画像 5 - 4】

後ろ手で閉めようとしている

(2004.8.4. AM6:52:00)



【画像 5 - 5】

まだ戸が完全に閉まっていない

(2004.8.4. AM6:52:01)



【画像 5 - 6】

体の向きを進行方向に変えている

(2004.8.4. AM6:52:02)



【画像 5 - 7】

取っ手に手をかけようとして失敗した場面

(2004.8.4. AM6:52:03)



【画像5-8】

体の向きを進行方向に変えた

(2004.8.4 AM6:52:03)



【画像5-9】

最後まで閉めようとしている

(2004.8.4. AM6:52:04)



【画像5-10】

最後まで閉め終わった

(2004.8.4. AM6:52:05)



【画像5-11】

(2004.8.4 AM6:52:06)

3-3③ 落ち着いて戸を閉める場面（撮影者はAの位置に立つ）

画像6-3～6-8では、落ち着いた動作で戸を閉める様子が確認できる。この時撮影者はAの位置（図1参照）に立っている。画像5-7のような失敗の場面は観察されなかった。



【画像6-1】

入る時は閉まっていた。
自分で開け、閉めずに中
に入り、用事を済ませて
出てくる。出たら閉め
る。

(2004.8.4. AM6:35:22)



【画像6-2】

(2004.8.4. AM6:35:23)



【画像6-3】

出て来るところ

(2004.8.4 AM6:35:45)



【画像6-4】

(2004.8.4. AM6:35:47)



【画像6-5】

(2004.8.4. AM6:35:49)



【画像6-6】

(2004.8.4. AM6:35:50)



【画像6-7】

(2004.8.4. AM6:35:51)



【画像6-8】

(2004.8.4. AM6:35:53)

3-3④ 開け放したままにする場面



【画像7-1】

もともと開いている戸に入っていく場面。閉めずにそのまま入っていく。出るときも開けっ放し。中に人がいる。

(2004.8.4. AM7:32:54)



【画像7-2】

(2004.8.4 AM7:32:55)



【画像 7 - 3】
(2004.8.4 AM7:32:56)



【画像 7 - 4】
(2004.8.4 AM7:33:00)



【画像 7 - 5】
(2004.8.4 AM7:34:09)



【画像 7 - 6】
(2004.8.4 AM7:34:11)



【画像 7 - 7】

(2004.8.4 AM7:34:13)



【画像 7 - 8】

(2004.8.4 AM7:34:14)



【画像 7 - 9】

(2004.8.4 AM7:34:15)

3-3⑤ 開け放したままにしようとしたが結局閉めてもらうことにした場面



【画像 8 - 1】

閉まっている戸を自分で開けて入り、開けっ放しで出ようとする。「閉めましようか」と尋ねたら「閉めて」と頼まれた。この時撮影者は鈴木さんに焦点をあてて撮影しており、ベッドは写していない。

(2004.8.4. AM7:03:42)



【画像 8 - 2】

(2004.8.4. AM7:03:43)



【画像 8 - 3】

(2004.8.4. AM7:03:44)



【画像 8 - 4】

(2004.8.4. AM7:03:46)



【画像 8 - 5】

出て行くところ
(2004.8.4 AM7:05:00)



【画像 8 - 6】

(2004.8.4 AM7:05:02)



【画像 8 - 7】

「閉めましょうか？」と尋ね
られて考えているところ
(2004.8.4 AM7:05:03)



【画像 8 - 8】

「閉めておいてください」と返答するところ
(2004.8.4 AM7:05:04)



【画像 8 - 9】

(2004.8.4 AM7:05:06)



【画像 8 - 10】

(2004.8.4 AM7:05:07)

4. 考察、まとめ

ここで、ジンメルの著書『橋と扉』から、扉についての記述や、扉との比較で登場する橋と窓それぞれについての記述を引用し、それを説明していきたい。そして、それがどのような形で鈴木さんの場合に表れているのか考察していこうと思う。

橋の場合には分割状態と結合状態の両要素が、前者はどちらかといえば自然の側に、後者はどちらかといえば人間の側に属するものとみなされるというかたちで落ち合っているとすれば、扉の場合には両要素はもっと釣り合いのとれたかたちで人間の作業のなかへ、人間の作業として合流する。ここに橋に対する扉のいつそうゆたかな、い

っそう生き生きとした意義があるのであって、それは、橋の場合にはどちらの方向にむかって渡るかということによって意味の相違は出てこないのに、扉の場合には出ると入るとでは意図のうえでまったく異なるという点に注目すれば、ただちに明らかとなる。(Simmel,1909:39)

人間が橋を架けようとするものの前提条件として、その 2 地点間が分割されているという目に見える事実が必要である。分割されている 2 地点間を、繋げて 1 本の通り道にしたいという希望があるからこそ人は橋をかけるのだ。もしその 2 地点間が元来繋がっているのなら、その区間に橋を架けようという発想自体起こりようがない。このことは、橋を架けるといふ行為や、架かった橋を見ることで周りの人間の目に明らかとなる。橋を架けている人を見ることで、私たちは、両岸が分け隔てられているということをその人が認識していることに気づくし、その分割された両岸を 1 つに結合したいという意思を持っていることにも気づく。また、すでに架けられた橋を見ることによって、元々は分割されていた 2 地点間の存在が顕在化するし、過去にそこを一続きの状態に結合することを望んでいた人がいたことも明らかとなる。

ところで、結び付けるべき両岸というのは自然が長い年月をかけて作りあげてきたもので、分割状態は自然の支配下にあると言える。一方橋は、人間が作りだしたものなので、結合状態を作り上げるための要素となる橋は人間の支配下にあると言えるだろう。それに対して扉を考える上での結合状態というのは、連続しただだっ広い空間を指すと考えられるが、扉が開いた状態では部屋は連続性を保っているもので、まさに結合状態が作り出された状況だと言える。この状態を生み出すために扉を開くのは人間であるので、結合状態は人間の支配下にある。一方分割状態というのは、だだっ広い空間が扉によって仕切られた状態をいうと考えられるが、この状態を生み出すために扉を閉めるのは人間であるので、分割状態も人間の支配下にあると言える。

橋の場合は、分割された A 地点から B 地点への移動と、B 地点から A 地点への移動は意味の上で違いはない。つまり、どちらの場合も橋を渡るという行為によって分割されている 2 地点間を結合させているに過ぎない。始点と終点が入れ替わっているだけで、両者とも、分割された地点間を結び付ける行為だという点で変わりはない。

それに対して扉は、開けると閉めるのとでは意味が大きく異なる。開けるのは結合状態を作り出す行為であるのに対して、閉めるのは分割状態を生み出す行為であるからだ。扉を開けると、そこには連続性のある広い空間が生まれる。これが結合状態である。扉によって仕切られ得る細々とした空間を結合し、1 つの大きな空間をつくりあげる行為である。その細々とした空間を、扉によって仕切ると、分割状態が生まれる。仕切ることにより、それまでは全体としてひとまとまりだった空間が、新しく出来た小さな空間ごとにそれぞれの秩序を持った組織が存在するようになる。人々は、結合状態をつくり出そうという意図の下で扉を開き、分割状態をつくり出そうという意図の下で扉を閉めるのだ。壁は動か

することができないが、扉を前にすれば人は開くか閉じるかの選択をすることができる。扉は、開くことも閉じることも出来るという点で大きな可能性を秘めた道具だと言える。先程の続きをさらに引用する。

このことは、扉の意味と窓のそれとのあいだに明確な一線を画する点でもある。たしかに窓は、屋内を外界と結合するものとして、その他の点では扉と似ている。しかし窓にたいする目的論的感情はほとんど一方的に内から外への方向をとっている。窓は外を見るためのもので、内を覗くためのものではない。なるほど窓はその透明さによって内部と外部との結合をいわば慢性的に、連続的に成立させている。しかしこの結合が一面的な方向しかたどらず、また、窓が目のための通路でしかないという点に限定されているところから、窓には扉のもつ深い原理的な意義のほんの一部が分け与えられているにすぎない。(Simmel,1909:40)

窓は、内の世界と外の世界を分ける境目としての役目を担っており、内へ入ると外へ出るのでは意味が違う。このことから、窓は橋より扉に近い性質を持っていると言える。内へ入る行為は結合状態から分割状態への方向を示し、外へ出る行為はその逆で、分割状態から結合状態への方向を示す。しかし、窓は部屋の内側から外側を見るための道具としての役割しか与えられていない。[覗き行為はここでは考慮されていない。] しかも、窓から体ごと外に出ることは想定されておらず、あくまで視覚による結合が期待されている。また、窓には扉とは違って透明なガラスがはまっているので常に視覚による内から外への結合がなされていることになる。窓は内から外への一方通行の結合しか許されておらず、しかもそれは視覚によるものに限られているので、扉とはまた違った性質を有する道具だと言える。

さて、鈴木さんについて考えてみる。彼女の場合は戸を閉める場面も、閉めない場面も観察できた。また、閉めるにしても精神的に余裕をもって閉める場面と精神的に緊迫した状態で閉める場面の2パターンを観察することができた。

まず、閉めるか閉めないかの判断だが、これは空間を結合させておくか、分割するかの判断であるという解釈が可能だ。閉めるという判断は連続した空間を分割しようという意思のもとでなされる。そして、その行為を見ることを通じて第三者は、その人が空間を分割しようという意思をもって行動したのだということに気づくことができるのである。また、閉めないという判断は、連続した空間をそのままの形で保持しようという意思のもとでなされる。そしてその行為を見ることによって第三者は、その人が空間を結合させたままにしようとしていることを知るのである。

画像5-1~5-11、画像6-1~6-7、画像7-1~7-9はいずれも、部屋に入るときと出るときの戸の状態を同じにしているという点で共通している。例えば画像5-1~5-11と画像6-1~6-7では、もともと閉まっていた戸を自分で開けて部屋

に入り、出る時は閉めている。画像7-1～7-9はその逆で、もともと開いている戸から中に入り、出る時は閉めずに開けっ放しで通り過ぎる。これは中に人がいる時も、いない時も観察できた。開いている戸は開けたままにしておき、閉まっていた戸は閉めてから立ち去る、という習慣があるらしいことがこれらのデータから分かる。そして、そのことを第三者の撮影者も相互行為の中で感じ取っていることが画像データ8-1～8-10で観察できる。もともと閉まっている戸を開けて入ったのだから、出るときは閉めるはずだ、と撮影者は想定していたのだが、鈴木さんが開けっ放しで通り過ぎようとしたので(画像8-6)撮影者は「閉めましょうか」と尋ねたのである。鈴木さんには、戸を初めの状態に戻すという習慣もあるが、開けっ放しにするという習慣もあるようである。

さらに、精神的に余裕を持って閉める時と、緊迫した状態で閉める時があった。両者は、連続した空間を分割する行為という点で変わりはないのだが、分割するという行為に含まれる意味の違いがあると考えられる。扉は開けることも閉めることも可能な道具である。そして、開ける行為にも閉める行為にも、様々な目的が伴っている。さらに、その目的は相互行為を通して第三者に分かる形で示される。橋の場合にはそもそもどちらの方向に進むのも意味の上では同じであるし、窓の場合は内から外への方向が限定されており、視覚による結合しか出来ないことになっているので、扉の場合の、分割する行為に含まれる意味の違いというような複雑さは生じない。鈴木さんの事例にはジンメルの述べた扉の概念が当てはまっていると言える。

参考文献

Simmel, Georg, 1909, “*Brücke und Tür*”, 掲載誌不詳, 頁不詳=1976, 酒田健一訳「橋と扉」, 酒田健一: 熊沢義宣・杉野正・居安正, 『橋と扉』(ジンメル著作集 12 巻), 白水社: 頁不明。→1998 『橋と扉 (新装復刊)』, 35-42。

第Ⅲ部 卒論報告

音を取り巻く相互行為分析 —ギター教授演奏場面を事例として—

吉野 秀紀

1 はじめに

本研究の主な目的は、音楽における、とくに共同演奏者間においてなされる相互行為の分析である。日常の社会を研究する社会学の領域において、音楽に対するアプローチは様々である。しかしながら、音楽それ自体がいかにして「音楽」たり得るのか、という命題に直面するとき、結論と呼べるものにたどり着いていると明言できる研究は見られない。そのほとんどが、そうならざるをえない理由の一つとして、音楽を初めとする芸術活動がそもそも、人間の精神活動すなわち、他者には観察不可能な個人の内面が起こす「何か」の表象として、すでに認識されている側面があると言えよう。作曲者の思惟、演奏者の主観的感覚、音楽そのものの本質、といったテーマに沿ってなされる研究の出発点（あるいは終着点）もそうした認識の基に音楽をとらえるところにあるように思われる。そうした認識や研究を無意味なものとして完全に否定はしないが、本研究が明らかにしようと試みるものは、そうした観察不可能な「何か」ではない。あくまでも日常社会の一場面としてある「音楽活動」において、その場면을「音楽活動」として成り立たせている諸処の要素の一端を探求することに最大の目的がある。ゆえに、実際に観察されたデータの客観的分析を旨とする、エスノメソドロジーの手法を用いて、さまざまな音楽活動の場면을分析し、これによって明らかにされる、音楽活動を達成するために参与者すなわち演奏者が織りなす相互行為を、以降、明らかにしていきたい。

2 調査概要

音楽活動の場面分析のもととなるデータを得るため、以下の場所において、ビデオによる撮影を依頼し、調査を行った。

- ・ T市内において個人で開かれているギター教室

このギター教室では、生徒の技術レベルとスケジュールを調節して、ある程度クラス分けされた練習を生徒 1 人につき週一回のペースで行っている。（ただし、明確なクラス分けの基準や、昇級試験のようなものがあるわけではないので、1 つのクラス内で若干技術の差はみられる。）今回撮影したクラスは、基礎的な演奏技術においてある程度習熟している生徒（3 名）に対し、先生がその場でさまざまな伴奏を提示し、それに併せてメロディーを演奏するいわゆる「即興演奏」の練習を行っている場面である。

3 先行研究—論理展開の整理

様々な音楽活動の場面におけるデータ収集とその分析を一つの音楽研究としてまとめるために、シュッツの『音楽の共同創造過程—社会関係の一研究—』(1991.A. プロダーゼン 編、渡部光・那須壽・西原和久 訳、『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』、マルジュ社：p 221-p 244)、ならびに、この文献の訳者でもある西原和久の論文『シュッツと「音楽の現象学的社会学」の意味—シュッツ論の新たな課題へ—』(1994. 日本現象学会編、『現象学年報』10巻 p 33-p 48)の両文献を参考に、本研究の論理展開を整理しておきたい。

3-1 リズム問題

音楽の三大要素の1つとしてあるのが「リズム」である。シュッツは、彼の論文の中で、アルヴァックス(1939)のリズムに関する見解に対して以下のように述べている。

「子どもとか、音楽の専門教育を受けていない人の場合には、記譜法の知識が何らなくとも童謡、賛美歌、流行歌、ダンス曲とか行進曲のメロディーを空で憶えてしまう。どのようにしてこういった事が可能になるのだろうか。またどのようにして音の組み合わせのこの種の記憶が、集合的記憶に関係づけられているのであろうか。アルヴァックスの答えは、素人による音楽事象の記憶もまた集合的記憶に基づけられてはいるが、その記憶は常にメタ音楽的経験と結合しているというものである。歌の旋律が想起されるのは、歌詞一つの社会的産物—が想起されるがためである。歌詞と分離されたダンス曲とか行進曲とか他の楽曲については、音楽的想起の担い手の役を果たすのは行進やダンスや語りをするリズムである。だが、リズムは自然のうちにはない。リズムもまたわれわれが社会の内に生活していることのひとつの結果である。社会から孤立している個人がリズムを発見することはできなからう。この言明(私は誤りだと思うが)の例証は、労働歌や演説のもつリズムカルな特性への言及を除けばなんら提示されてはいない。歌詞とリズムは両方とも社会的起源をもっており、結果的には、素人の音楽的経験も同様に社会的起源をもったものである。ただ、素人の音楽的経験は、完全に音響事象のみの世界にも関わっており、また音楽的織地にのみもつばら関心をもっているわけではない社会にも関わっているのである。」(シュッツ 1991 : 226—227)

シュッツの関心の出発点は、引用の冒頭にもあるように、記譜法の知識をもたず、何らの音楽的専門教育を受けていない者ですら歌や行進曲のメロディーを憶えることができるのはいかなる理由か、という点にある。そして、この問いに対するアルヴァックスの回答は、いわゆる素人の音楽的経験が、音楽の専門知識とは関わりのない社会起源すなわち社会における経験に由来しているというのである。そしてアルヴァックスはまた、そうした音楽的想起を担う社会的産物として、歌詞とリズムを提示している。

リズムの経験が音楽的経験の範囲を超えた社会的起源であるとするにはなんら疑う余地はない。音楽以外の領域においても、人は日常の行為の中でさまざまなリズムを共有する場面を経験する。例えば、「じゃんけん」をする際、お互いの手が同時に出るようにするために、「ぽん」の前に「じゃん、けん」と唱え合う場面などが考えられる。アルヴァ

ックスが「リズムは自然の内にはない」と言明しているのは、リズムそのものについて、こうした社会的経験こそが起源であると言う点に帰結しているのだと考えられる。しかしながら「なぜ『じゃん、けん』と唱えれば『ぼん』を容易にあわせることが出来るのか」という疑問にたいする回答が出来ない限り、リズムの根本的な起源は明らかにならないのでは、という指摘も無論考えられよう。シュッツがアルヴァックスの言明に対して（私は誤りだと思うが）と控えめながらも批判しているのは、シュッツがこうした疑問点にも着目していたからなのかも知れないが、残念ながらシュッツは論文のなかでこの点に関して詳細には述べておらず、あくまで可能性の範囲を超えることは出来ない。

もう一つこの引用に関して注目すべき点がある。それは「音楽の専門知識がなくともメロディーを憶えることが出来るのはなぜか？」という問いに「素人の音楽的経験が音楽の領域とは異なる社会的起源を持つからだ」と答える文脈についてである。この文脈は、アルヴァックス、シュッツが共に志向を試みている「音楽」という領域そのものの捉え方の枠組みを示しているといえよう。そもそも「音楽」という領域の起源はどこにあるのか。「生まれながらにして音楽の専門知識を持った者」が「音楽」を創造したなどということはおそらくあり得ない。「素人」がメロディーを憶えることができたり、「じゃん、けん」と唱えれば「ぼん」で容易にあわせることができたりするという「社会的前提」があるからこそ、そうした社会関係の中で産み出されては消えていくメロディーやリズムを体系化し、それを発展させる形で「音楽」という領域はあくまで社会的に達成されたものと考えれば、この文脈において疑問とされていることは、もともとなんら不思議なことではない。すなわち専門知識を必要とするいわゆる「音楽の領域」は、素人の音楽的経験という領域をまず前提としているのだと考えられるのである。ここまでの論点を図式化すると下図のようになる。

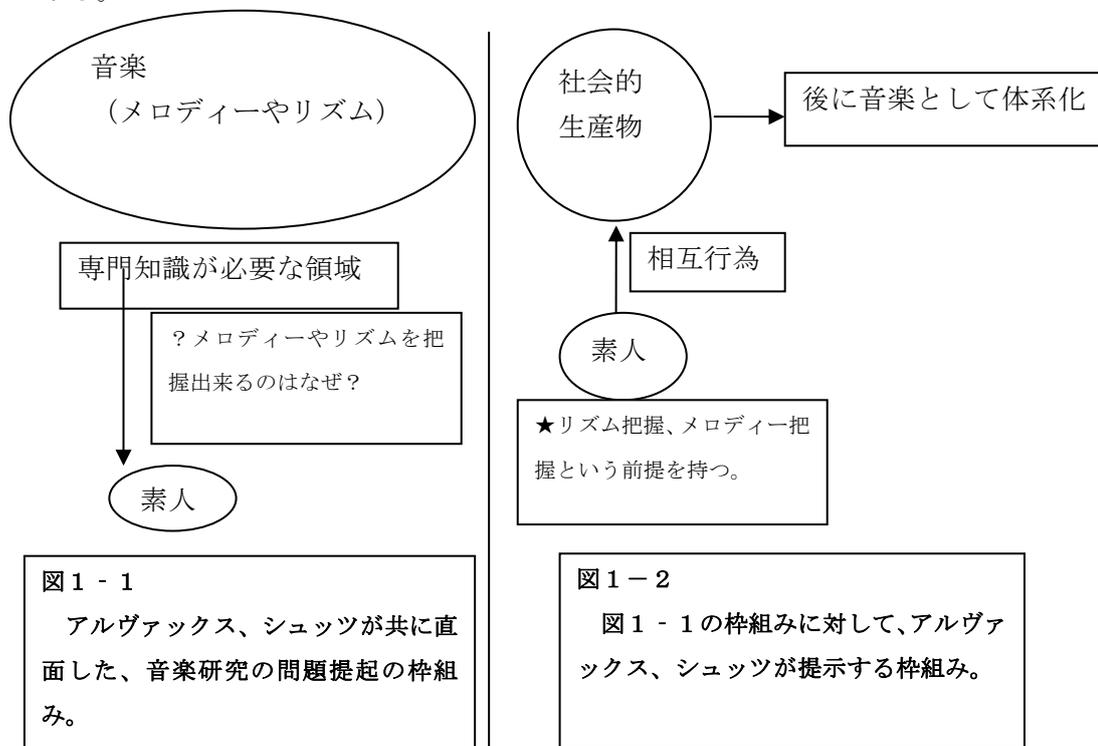


図 1 - 2 で示した図式は、本研究においても重要な枠組みである。図 1 - 1 にある矢印

は、専門知識が必要な音楽領域が何らかの理由でまったく知識のない素人にも解釈されうる、という問題関心をあらわしている。これに対し図1-2は、素人がそもそも専門知識を必要とする音楽領域とは関連のない世界において、社会的経験としてリズム把握やメロディー把握という前提をもち、そうした素人がおこなう行為の結果としての、音楽という社会的生産物の存在を想起する枠組みである。音楽の捉え方に関して、アルヴァックスやシュッツが志向しようとしているこうした図式は正しいとおもわれる。その上で本研究においては、実際の音楽活動の映像分析という手法を加えることによって、この図式の実像に照明をあてることを試みるのである。

3-2 「音楽の社会関係」の定義

音楽を論じたシュッツの研究について、西原は以下のように述べている。

「五十一年に発表された『音楽の共同創造過程—社会関係の一研究—』と題される第三の論稿は、右の第二の論稿と明らかに議論の位相を異にしている。たしかにシュッツが『音楽は概念図式とは結合していない一つのコンテクストである。』（C P I I, p. 159）と述べる点は先の論考と大差ないが、今次の論稿タイトルからわかるように、ここでははじめから議論の対象が、音楽を媒介にした作曲家、演奏者、聴き手の間のさまざまな音楽の『共同創造過程』（making music together）あるいはその『社会関係』に置かれている。」（西原 1994）

また、同論文において西原は、「現象学がそもそも主観主義である」という社会学内部での了解という点に関して以下のようにも述べている。

「筆者は、現象学＝主観主義という一面的了解に対して、あえて現象学の3つの文脈を語ることによって応えてきた。筆者が初学者向けに示す現象学の諸論点は、以下の三つの議論の文脈がフッサール現象学にはある、ということである。すなわちそれらの論点とは、①意識経験の文脈、②危機認識の文脈、③意味生成の文脈である。」（西原 1994）

※ここで言うところの「主観主義」とは、西原によれば「意識、自我、その他、なんと表現しようと、現象学は自己の主観性を問題にする学問であって、それゆえ、現象学は人が他者とともに生活を営む社会的なものへの視点をはじめから欠いている、という了解のうえでなされる否定的言辞を指す。」という。

引用の部分で示されている①～③の文脈の内、「主観性の考究」として「意識経験の文脈」があり、他の二つの研究文脈はそれとは異なる文脈であるとするのが、現象学的社会学の解釈における西原の図式的強調であるといえる。こうした西原の主張は、ここではひとえにシュッツ論に対する「主観主義的了解の先行」についての批判と、シュッツ研究の新たな展開の背景を強調するものであるといえよう。

さて、シュッツの論文に視点を戻してみると、この研究において、シュッツが音楽にお

ける「社会関係」あるいは「相互行為」に視点を向けていることはたしかに読み取れる。そして、シュッツがとりあげている音楽を取り巻く社会関係とは「作曲家－聴衆関係」「作曲家－演奏者関係」、「共同演奏者間の関係」、「演奏者－聴衆関係」の四つである。シュッツは特に「作曲家－聴衆関係」について以下のように述べている。

「作曲家と受け手との間に数百年の隔たりがあっても、受け手は作曲家の音楽的思惟の分節化の流れを作曲家とともに一步一步たどっていくことによって、作曲家の意識の流れに疑似同時的に参加する。かくして、受け手は作曲家と共通の時間次元で結ばれる。そして、そのような時間次元は、話し手と聞き手との間に現勢するような、真正な対面関係において両当事者が分有する生ける現在の派生形態にほかならない。」(シュッツ 1991 234)

話し手－聞き手関係が「相互関係」であることは、疑う余地のない事実であるが、「作曲家－聴衆関係」が同様に「相互」といえる関係か否かという点については議論の余地があるように思われる。たとえシュッツが言うように、聞き手が「疑似同時的な音楽的思惟への参加」を達成したとしても、それが聴衆と作曲家の二者において達成される「相互」な関係と呼ぶべきかどうか、という問題である。もちろん、近年のエスノメソドロロジーの領域において、「相互関係」が必ずしも参加者が同じ空間と外的時間を共有している必要はない、という見解は様々な研究から一般的なものになっている。たとえば、テレビのニュース番組でニュースを読み上げるキャスターなどは、実際に同じ空間を共有していない「視聴者」という存在を考慮することで適切な振る舞いを実践している。しかしそうした相互関係と比較しても、「作曲者－聴衆」という関係が「相互関係」であると言い切ることにたいしては慎重になるべきであろう。なぜなら「作曲家の聴衆に対する適切な振る舞い」もしくは「聴衆の作曲家に対する適切な振る舞い」というものがどのような場面でもどの様に観察されるのかという問題を解決する必要があるからである。第一、こうした関係がかりに認められるとして、その詳細を追求していくと、詰まるところ聞き手すなわち聴衆が、作曲家の音楽的思惟をどのように受け止めているか、という「主観研究」に行き着いてしまう可能性も考えられる。このことは、②作曲家－演奏者関係についてもおおむね同様で、つまるところ「音楽の社会関係」の前提として、空間の共有や外的時間の共有よりもむしろ、関係する二者（もしくは複数の者）の間に、互いに対して「適切な振る舞い」が存在するという点を、少なくとも現段階においては重視する必要がある、ということが本研究の基本的立場である。

3-3 複定立的諸段階と単定立的把握

シュッツは論文の冒頭で「音楽は、概念図式とは結合していない一つの有意味なコンテクストである。」(シュッツ 1991 221)と声明している。この声明はそもそもシュッツの音楽社会学の一面をなすものである。このことは論文のなかでより詳細に述べられている。その最も重要なキーワードとなるのが「複定立的諸段階」と「単定立的把握」という論点である。

「複定立的諸段階」とは、ある一つ概念図式に到達する際に、概念的意味を構成する要素を「一步一步」共遂行ないし再遂行する諸過程のことである。シュッツの例を借りれば、三平方の定理を習う高校生の営みがそれにあたる、「 $a^2 + b^2 = c^2$ 」という公式が表わす概念的意味を獲得するために、ピタゴラスが延々展開した証明過程を再遂行することはすなわち「複定立的諸段階の再遂行」である、そしていったん再遂行してしまうと、たとえその定理の証明方法を忘れてしまっても、その意味を一目ですなわち「単定立的」に把握出来るようになる、といった事を示している。このことを踏まえて、シュッツは「音楽作品の意味は本質的に複定立的構造からできあがっている。その意味は単定立的には把握されえない。」(シュッツ 1991 235)と述べている。

しかし、シュッツがここで述べていることは、あくまでも「音楽作品の意味」といったいわば音楽の「本質」を探究する志向における主張である。シュッツは、こうした本質探求の志向とともに、あくまで音楽的行為を行うもの同士の「現象」を探究するという志向も提示しているのである。本研究においては、あくまでも「相互行為」としての共同演奏者間において、その行為を達成する為に必要な「複定立的諸段階」とは、むしろ記譜法の意味するところを学ぶことや、楽器の演奏方法の習得などに見られる諸段階の手続きである、そしてそれらは、練習や教授といった形での複定立的諸段階の再遂行を一端行ってしまえば、どれも単定立的に概念図式の把握ができるようになるものであると考える。この点はシュッツが提示するところの「現象探求」の志向に沿うものである。しかしながら「音楽作品の意味」を探究する「本質探求」の志向については、本研究はこうした志向にはあえて沿わない。これら二つの志向は個別に独立するのではなく、むしろ「音楽作品の意味」といったものは、そうした単定立的把握による概念図式をもちいておこなわれる演奏者達の「行為」の結果としてはじめて場面のなかで達成されるものであると本研究では考える。シュッツの「本質探求」の志向は、いうなれば音楽作品の意味もしくは、作曲者の音楽的思惟を中心に、それに追従していく(同時性を共有する)演奏者や聴衆の社会関係という枠組みをもっている。しかし本研究の枠組みにおいては、「音楽を取り巻く相互行為」は、どのようなものになるにせよ、「音楽活動の結果としての音楽」を達成するための、参加者の様々な振る舞いそのものであり、そこには「音楽作品の意味」やその場には存在しない作曲者の「音楽的思惟」が根源的に存在する必要はないのである。

以上のような論理展開をふまえて初めて、本研究は、撮影によって得られたデータの客観的分析、すなわち観察可能なもののみをよりどころとする「音楽の社会学」という立場を獲得し、これまでの音楽研究に別角度からの光をあてる可能性を見いだすのである。

4 分析

ギター即興演奏の教授場面の分析

以下の分析に用いるデータは、2003年7月31日、T市内で行われているギター教室の場면을撮影したものである(詳細は「調査概要」を参照)。下の写真1は、分析に用いる映像の中での参加者の配置を示す者である。



写真 1 参加者の配置図:画面中央に座っているのが、先生である T。T から見て右側には生徒 Y が座っており、左側には生徒 I が座っている。また、フレーム外になってしまっているが、T の正面の位置に生徒 W が座っている。

ー アドバイスの前後における生徒の演奏と振る舞いー

この場面は、練習の途中で先生である T から、メロディーラインの構成について口頭による注意が促されたあと、再度同じ伴奏で練習を行う場面である。(7:17:18) から始まるこの場面は、T から伴奏の弾き方の説明がなされ、最初に一度、3 人の生徒が順番にリードの即興演奏を行った後に、T が生徒に対するアドバイスとして発話を行う、その後アドバイスをふまえて再び生徒が同じ伴奏で即興演奏を行うという一連の場面である。以下の断片 1 は (7:21:20) からの T の発話のトランスクリプトである。

断片 1 T の発話

(7:21:20~7:22:55)

- 1 なんかしっくりけ：：へんだろ () ひいにとってそんなことない ()
- 2 ほんで () サイドギターがそのメロディーで () え：：() を () 結構も
- 3 =ってるときっていうのは：：() その () ただ単にアドリブ《※1》だけ=
- 4 =入れてくと () その () え：：邪魔したり () その () サイドの流れ=
- 5 =にのらんかったりするけん () そんなときって () けっこう：：これ ()
- 6 おんなじ () 【ギターを弾き始める】チャチャチャチャ：：ン：：タタタタ：=
- 7 =ンの繰り返しやから () リードギターも () あの () 単純なメロディー=
- 8 =を繰り返し乗せていったほうが () きれいな場合もある【W の弾いたフレーズ
- 9 を聴いて視線を向けながら】そ：：そ：そ：全くおんなじもんで () ほんで ()
- 10 これあの () やったらわかるけど () ドレミファ音階 () うん () だか=
- 11 =らその () ドレミファ音階を合わせてみたらいい ()
- 12 メジャーでドレミファ音階と合わせてみて () で () けっこう：：() え：：
- 13 おんなじくりかえしの () なんか () 一つ目玉になるメロディーをこの自分=
- 14 =で決めたら () ちょっとぼくが () なんかやってみるね () え：：
- 15 【T、I、W を指して】この 3 人いこか () わ：：んつ：：すり：：ふお：：
- 16 【演奏スタート】

《※1》アドリブ：即興演奏のこと。

この発話の後、Tは自分でリードを一度演奏し、説明したことの手本に相当するものを提示していると思われる。そしてその後、再びI、W、Y、にも同じ伴奏でリードを演奏させている。この際、一度目の練習の時と比べて、Iが演奏中にしきりに首をかしげたり、リードの演奏を躊躇したりしていることが見て取れる。下図はその際の映像の静止画を示したものである。



写真2 (7:24:59) における静止画

写真2におけるIの振る舞いに注目すると、ときには声も出しながらしきりに首をかしげ、演奏にも所々躊躇が見られる。こうした、Iの振る舞い、すなわち、一回目の演奏と、二回目の演奏における振る舞いの違いを産み出しているのは、Tの「ドレミファ音階」という説明にあると考えられる。Tの発話を受けた後、その文脈の流れに沿って行われる二回目の演奏において、Iが行わなければならない課題は、すなわち「ドレミファ音階をあわせてみる」ことに他ならない。単にIが、滞りなくリードを演奏すればいいのであれば、Iは一度目に演奏したように、自分がスムーズに演奏できるメロディーの組み合わせを演奏すれば良いはずである。

また、この断片からは、以下のようなことも考えられる。それは、Tの「メジャーでドレミファ音階と合わせてみて」という発話が、それ自体で、次にIが演奏する際に課題となる演奏の条件、すなわちIがトライすべき行いを示し、どのような演奏が条件を満たしており、またどのような演奏が条件を満たさないのか、という点までも端的に場面に提示しているということである。Iが二回目の演奏でトライしているのが紛れもなく「ドレミファ音階を合わせてみる」という振る舞いであるからこそ、演奏が中断されたりすることなく場面は進行していくのである。言い換えれば、この場面の参与者にとって、リードを演奏する際の音の組み合わせやメロディーの組み立て方の様々な方法の中で、「ドレミファ音階で合わせる」という意味概念に解釈出来るものが共有されている、ということも考え

られよう。「即興演奏の教授」という場面においては、一般的なピアノのレッスンなどとは異なり、「この様に弾きなさい」と言われて、指導者の演奏の軌跡をたどる、といったやりとりだけでは不十分な場合も見られる。それはひとえに、即興演奏という演奏形態それ自体がもっている特性によるところが大きいことは明白である。しかしながらそうした即興演奏の教授という場面においても、無数に近く存在するリードの音の組み合わせ方のなかから「ドレミファ音階であわせる」といったような共通理解のもとに選択肢を絞り込む事で、課題を提示し、トライを促し、他者評価や自己評価を場面に提示したりする、という「教授場面」が達成されているのである。

5 考察

ここまでのデータ分析によって、音楽活動の一場面において行われている相互行為に着目することで、「音を取り巻く相互行為」を達成するために参加者が互いに行う振る舞いの一端は、提示することができた。この点を踏まえて、再度、シュッツが論文の中で提示した以下の文脈について検討してみたい。すなわちそれは「音楽は、概念図式とは結合していない一つの有意味なコンテクストである。」という主張である。先にも述べたように、これはシュッツの「本質探求」の志向を示すものである。これは、シュッツが、演奏者や聴衆が相互関係や社会関係を織りなす対象として、「作曲家の思惟」や「音楽の意味」といった対象も含意したことに理由があると考えられる。つまり「作曲家－聴衆関係」「作曲家－演奏家関係」をシュッツが考慮している点である。すなわちシュッツの枠組みを借りるならば、本研究の主たるテーマである「音をとるまわりの相互行為」は、以下の図2のように表わされると考えられる。

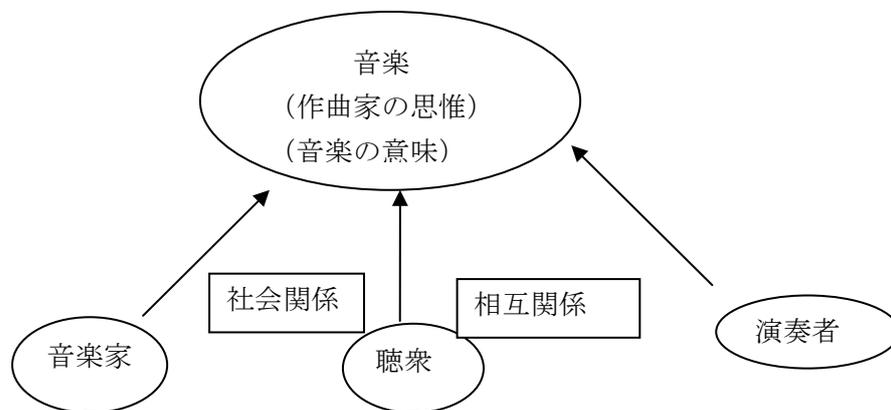


図2シュッツ的「音楽とそれを取り巻く人との社会関係」の図式

すなわち、音楽が本来持っている意味、もしくは作曲家が創造した音楽的思惟、というものが少なくとも「音楽」には内在しており、演奏者や聴衆が、そうした「音楽」と相互におりなす関係も音楽の社会学研究の枠組みとして必要である。という図式である。こうした図式は、すなわち「作曲家－聴衆」という相互関係を疑いなく容認できる図式であるとも考えられる。

これに対し、あくまでも「音楽活動の場面」を成り立たせている参加者同士の相互行為

にのみ視点をおいた、本研究の提示する「音をとりまく相互行為」の図式は図3のようなものである。

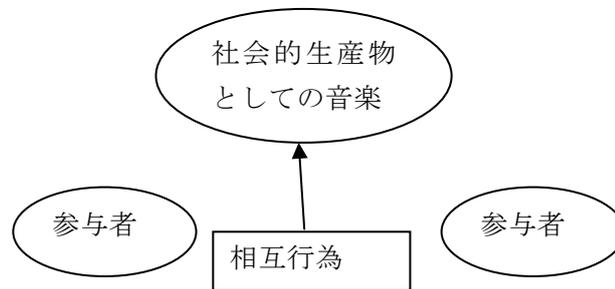


図3 本研究における音楽活動を達成させる相互関係の図式

この図式は、音楽がそもそも、参加者の織りなす相互行為によって達成される社会的生産物であることを前提として考えるアプローチの枠組である。そして、今回の分析では、この様に場面ごとに「音楽を達成する」ための相互行為の中で、参加者が様々な音楽的要素を、様々な意味概念と結びつけることで、音楽活動の諸処の振る舞いを端的に把握し、場面を達成させていることを提示してきた。すなわちそれは、音楽という領域が、行為を行う人びとによって、時には何らかの意味概念と結びつけて端的に把握し、それを参加者の間で共有することによって、一つの音楽を創造していくという解釈ができる、という可能性の一端を示すものである。

6 まとめ

最後に、本研究の全容を、各章ごとにまとめておく。

(1 はじめに)

本研究は、「音を取り巻く相互行為分析」という一つのテーマに焦点をあて、エスノメソドロロジーの手法を用いて、実際の音楽活動の場面について検討するものである。その目的は第一に、これまでの音楽の社会学における、「音楽」そのものの解釈（すなわち人間の精神活動の表象、作曲家の思惟、演奏者の主観的感覚といったことがら）を「音楽の本質」とする研究視点から離れ、音楽活動の場面で行われる参加者間の相互行為から、音楽が社会的生産物として達成されていく一連の過程に着目することにあつた。それはすなわち音楽研究の領域を、観察可能なデータ分析によって追求する研究領域に組み込む試みに他ならない。

(2 調査概要)

調査概要は本文で示したとおりである。

(3 先行研究)

先行研究として参考にしたシュッツの論理展開は、「1 はじめに」のところで示した本研

究の立場から分析するとき、従来の現象学的音楽研究と比較して、着目すべき重要な点と、より議論の必要を要する点とをともに導き出していると思われた。着目すべき点としては、シュッツは（彼が論考の中で引用しているアルヴァックスとともに）音楽を成り立たせている要素が専門知識を要する音楽の領域にあるだけでなく、まったくの素人が持っている「社会的前提」の中にも重要な要素があり、そうしたもののたちの相互関係が生み出す社会的生産物としての音楽という枠組みにも視点をむけていることである。（図1 - 2参照）

しかしながら、シュッツはこうした枠組みを音楽研究の全体的な土台として適用するところまでは至っていない。こうした枠組みはあくまで音楽という領域の側面を示すものとしてあつかわれているのである。シュッツはそうした枠組みうんぬん以前に、「音楽は、概念図式とは結合していない一つの有意味なコンテクストである。」（シュッツ1991 221）という前提に立っている側面がある。また、この前提の説明として「音楽作品の意味は本質的に複定立的構造からできあがっている。その意味は単定立的には把握されえない。」（シュッツ1991 235）と言い換えている。「複定立的」「単定立的」という用語の意味するところは、数学の公式を覚える過程を例に挙げて示されている。公式を覚える過程として、まず第一にその公式の証明過程を教わる、こうした一連の証明過程は、公式の意味を把握するための「複定立的諸段階」という。そしてひとたびこの「複定立的諸段階」を通過してしまうと、それ以降はたとえ一連の証明過程を忘れてしまったとしても、公式そのものを見ただけで公式の意味が把握できるようになる場合、そうしたことを、公式の意味を「単定立的に把握する」というのである。つまり「音楽作品の意味は本質的に複定立的構造からできあがっている。その意味は単定立的には把握されえない。」ということとは、音楽作品の意味が人々によって最初に把握されるときに通ってきた一つ一つの諸過程をいったん通ったとしても、それ以降同じ音楽作品の意味を把握するためには、そのつど同様の諸過程を再び通らなければならない、ということを示している。この前提はすなわち、「相互関係」や「社会関係」といった視点に立ちつつも、そうした関係を「音楽作品の意味」と演奏家や聴衆との関係に定義づけるシュッツの主張を表すものといえよう。これはシュッツの音楽研究における志向の中において「音楽作品の意味」という「本質」を探究する志向をあらわす主張である。ただしシュッツは、この「本質探求」の志向にばかり研究の枠組みをおいているわけではない。上記の「音楽作品の意味は本質的に複定立的構造からできあがっている。その意味は単定立的には把握されえない。」という主張は、あくまで音楽の「本質」に焦点をあてる場合の主張であって、シュッツは参与者同士の相互関係という「現象」に着目する際には「単定立的に把握される意味構造の共有」という「現象」を認めている。つまりシュッツは音楽研究において「本質探求」の志向と「現象探求」の志向とをともに考慮しているのである。本研究の分析において検討を試みたのは、まさにこの点に関する別角度からの視点を提示することにある。すなわち、「音楽作品の意味」というものが「本質」であり、探求の対象であるという視点からは距離をおき、むしろ個々の相互行為場面において参与者は、様々な意味概念と音楽的行為を結びつけ、端的に把握することによって場面を成立させている、という「現象探求」の視点のみをより詳細に検討することで、シュッツが論じている以上に音楽の様々な様相をあきらかにするであろう、という点に視点をむけることである。

(4 分析)

分析においては、より複雑な音楽的行為（即興演奏）を、「ドレミファ音階であわせる」といった意味概念の中に絞り込むことで、あらゆる音の組み合わせを個人の音楽的思惟によって自由に取捨選択されているように考えられがちな即興演奏という音楽的行為にも、「課題」や「成功と失敗の解釈」という側面を互いに共有しうることがあきらかになった。このことはすなわち、即興演奏という音楽的行為を行う参加者が、無数に存在するメロディーの中のいくつかを「ドレミファ音階であわせる」という意味概念と端的に結びつけて解釈しているという、可能性の一端も示していると考えられる。

(5 考察)

本研究によってここまで示してきたことは、あくまで音楽活動の一場面を観察・分析することによって得られたものである。無論これをもって「音楽の社会学」という広大な領域の唯一の結論にしようとしているわけではない。また、シュッツその他の研究者が論じてきた音楽という領域の解釈を完全に否定し、議論の土台の置き換えを要求するものでもない。しかしながら、「音楽作品の意味」というものからは独立した形で、様々な「音を取り巻く相互行為」が達成されている、という日常社会の現実に視点を向けることで明らかになる、音楽的行為そのものの端的な把握を用いた振る舞いの数々は、より詳細に分析されるべきであり、そのことが「音楽の社会学」という研究領域に多少なりとも新たな広がりを与えうる可能性をもっていることを、本研究は提示するものである。

7 主要参考文献

- A. シュッツ、佐藤嘉一 訳、1988、『社会的世界の意味構造－ウェーバー社会学の現象学的分析－』、木鐸社。
- A. シュッツ、渡部光・那須壽・西原和久 訳、1991、「音楽の共同創造過程－社会関係の一研究－」、A. ブロダーゼン 編、渡部光・那須壽・西原和久 訳、『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』、マルジュ社：p 221-p 244。
- D. サドナウ、徳丸吉彦・村田公一・ト田隆嗣 訳、1993、『鍵盤をかける手 社会学者による現象学的ジャズピアノ入門』、新曜社。
- 張江洋直、2005、「関東社会学会第48回大会『プレナリー・セッション：社会学の方法と対象』（2000年6月10日／会場：東洋大学）報告レジュメ」、
<http://www.wakhok.ac.jp/~harie/Schutz's-postulates.html>。
- H.GARFINKEL,1967,"Good"organizational reason for "bad"clinic records
,H.GARFINKEL ,*Studies in ETHNOMETHODOLOGY*, POLITY PRESS : p 186-
p 207.
- 西阪仰、2001、『心と行為 エスノメソドロジーの視点』、岩波書店。
- 西阪仰、2001、「参加の構造とモノの对象的性格」、『研究所年報』明治学院大学社会学部付属研究所：p 191-p 201。
- 西原和久、1994、「シュッツと『音楽の現象学的社会学』の意味－シュッツ論の新たな課題へ－」日本現象学会編、『現象学年報』10巻 p 33-p 48

第IV部 付録

第1章 インタビュー記録

熱いものは怖くない 渡辺 広一さん（仮名）インタビュー記録

2004年7月21日 18:00～前半
徳島大学総合科学部1号館第2会議室にて
質問：佐々木 実花

1. 障害の等級について

私は義手をつけています。私は障害者手帳を持っており、1種1級です。1種には付き添いが付きます。付き添いとはつまり介助者のことです。飛行機などの乗り物に乗ったときに介助者も割引が付きます。1級、2級、3級というのは障害の重さです。1級が1番重いです。1級の人のおほとんどが1種です。2級の人の中には1種と2種の人がいます。2種というのは介助者がつかないものをいいます。要するに介助者がいてもその人たちに特典がつかないのです。

2. 義手の操作方法

私がつけている義手は手を伸ばせば開くようになっています。これがワイヤーで〔写真1、矢印2参照〕、これ〔ワイヤーの部分〕を引っ張ると開きます。

3. 義手のゴムの秘密 その1

これはどこにでもある輪ゴム〔写真1、矢印1参照〕。元々は別のゴムが入っていたんですけど、輪ゴムが一番調節し易いからつけることにしました。きつくしたりするのに便利なんです。ずいぶん前から輪ゴムにしました。付け出した当初はタイヤを切ってつけていました。強いという意味で。既製品にはまた別の既製品のゴムがついていたんです。しかしこれは切れても買い増しができませんね。ですからチューブを貰って来て、それを切っつけていたんですけど、そんなことするより輪ゴムが一番だと思ってね。

3. 事故の原因 その1

私がこうなったのは17歳の時です。高校2年の秋に、実験でやってしまったんです。火薬の実験で、花火を作ってたんです。正確には発炎筒ですね。オリンピックの時、トーチが走るでしょ。あれを作ってたんです。危険な実験をしてたんです。その時に爆発してしまっただけです。

4. ワイヤーの秘密

義手をつけるようになってからいろいろ不便なことがありましたが、一番不便だったのは、よくワイヤーが切れたことです。そのころの義手は学者が考えた理屈通りの装置だったのです。実物がないと説明しづらいのですが、とにかく今私がつけているのが一番簡単な方法です。どうしてこうなったかと言うと、まずこれは壊れないのです。それとね、布の紐を使っているのです。これはワイヤーです。昔はね、ここまでずっとワイヤーだったのです。ワイヤーと紐とどっちが強いと思いますか？当然ワイヤーが強いのです。ところがワイヤーはねじれに弱いのです。ねじれると、ワイヤーは鋼鉄ですからすぐに切れるのです。何かの拍子にねじれるのです。それと、それまでは義手をリュックサックのように背負っていたのです¹。作るほうも大変で材料費も多くかかっただろう。夏は暑いし皮はくさいしね。もう本当に嫌だったのです。

A 県に帰ってきて新しいのを作る時に、実験してみると言われました。義手屋のおやじさんも大丈夫かって相当訝ったのですけどね。ワイヤーというのは、ひどい時には新品作って1ヶ月くらいで切れていたのです。それが3年も4年も持つ。ちょっとしたことで、ねじれて切れる時がある。これ〔写真 2 参照〕はねじれて切れかけになったから、私が紐で結わえてボンドで引っ付けたの。本当にこういうのは使う人の工夫です。それで、私があんまりよく使うので義手屋のおやじが富山かどこかの、こういうことを研究している人に言ったらしいのです。D 大学にいた人で C 県に行った人だったかな。それで私のところに紹介状が来てね、写真撮って送ってくれて手紙が来ました。それで写真撮っていろいろ書いて送ってあげました。最初からこうしておけば本当に楽だったのに、と思う。頭の中で考えるのと、実際に使って改良してみるのとではずいぶん違いますね。

5. 義手を受け入れる

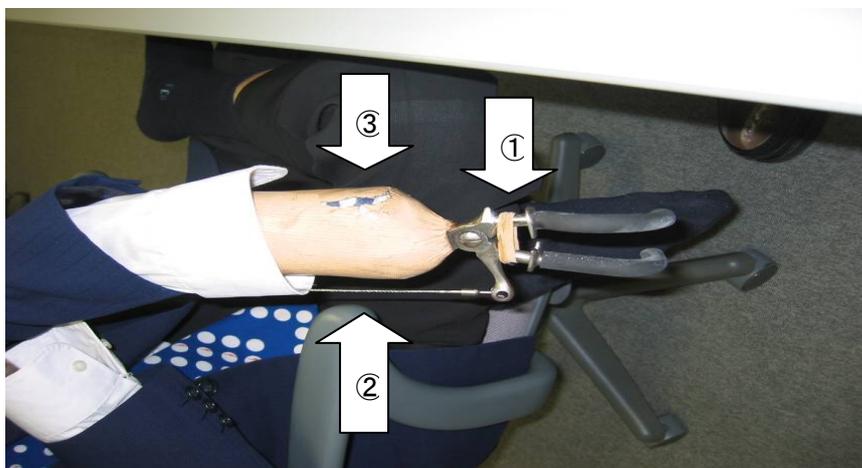
義手を受け入れるのは、私はそんなに抵抗ありませんでしたよ。仕方ないなと思って。皆さん、「自殺も考えたのでしょうか」とか聞くのですけどね、自殺なんて考えたこともない。仕方ないなって。家族は心配したでしょうね。びっくりしたでしょうね。その頃バレーボールの選手だったのです。それがもう出来なくなりましたからね。

6. 事故の原因 その2

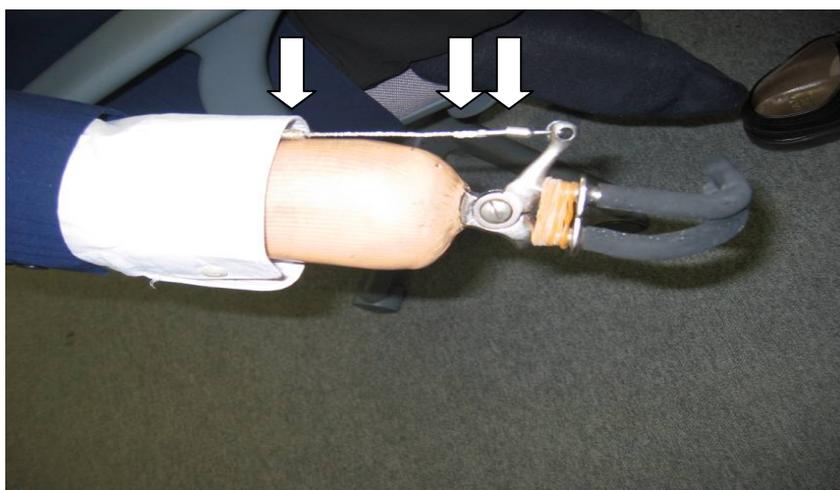
バレーボール部には1年の時に属していました。私の学校は進学校だったですから、体育部にいるということは非常に肩身の狭いことだったのですよ。それで2年の時に辞めました。私は科学が好きでしたので、1年の時には科学部に入っていたのです。そこで、友人から発炎筒作ってみたいかって言われて。どうして作ったかと言うとね、その日は運動会の日だったのです。例えば野球部の方は、リレーのバトンにバットを使うのです。ラグビー部の方はバトンにラグビーのボールを使うのです。そしたら私は科学部ですから、ある人が考えて、発炎筒作ってくれていうことになったのです。それで私が火薬を調合して

¹ 左右の義手が背中で背負うような形で繋がっている。

発炎筒を作って、実験したらバカンと爆発したのです。運動会の日に。



【写真1：①輪ゴムに取り替えている ②ワイヤー ③コーティングが破れている】



【写真2：ワイヤーを紐でくくり、ボンドで接着したところ】

7. ゴムの秘密

長い間チューブを使っていましたよ。A県に帰って来てからも使っていたように思う。おそらく10年から15年は使っていたでしょうね。そのうちに輪ゴムのいいのが出て来ましたね。輪ゴムは巻いてみると結び目がないですからね。タイヤは必ず結び目がありますから。結び目っていうのは邪魔ですね。汚いし、解けますしね。解けたらバサッと落ちます。解けたらすぐに結ばざるを得ませんね。自分では結べないですから誰か周りの人に結んでもらいます。15年くらいたってから輪ゴムに変えて、今に至りますね。

8. したいけどしたくない義手の交換

義手の交換は、法律上は3年か4年で変えられます。ところがこれは、15年から18年使っていますね。どうしてかと言いますと、いったん使い始めたら変えたくないからです。変えてしまうと合わないから。使っているのが一番便利なのです。これはもう、こんな風になっているんです〔写真1、矢印③参照。表面のコーティングが破れている〕。汚い話ですけど。実はもう新しいのを作ってもらってるんです。ところが新しいのには腕が上手く入らないの。無理して入れたら今度は抜けないんです。自分にぴったりのを作ってもらおうと思えば出来るのかも知れないんですけど、実際にはなかなかできないんです。

9. 研究者への要望

こういう製品〔義手のこと〕売れますか？市場性ありますか？ないでしょう。日本中探したってこれを使ってる人は数えるほどしかいない。これ生産中止なんです。それで別の義手をつけてみたんですけど、上手くいかないの。これ、固定されていますね〔写真3参照〕。これは3つの接点で押さえているんです。ところが別のは接点が2箇所なんです。ですから、ペンを持っててもグラグラするの。次の新しいのを、義手屋が取りに来いって言うんですけど取りに行っていないんですよ。もしも論文書かれるのならこういうのこそ書いていただきたい。これは儲けにならないから作らない、と言うのではなくて何か作ってもらいたいですね。何かで訴えようと思っていたんですけどね。それと、研究がなされてない。ずっと昔に、3箇所が出来ないかとわざわざ聞いたんですよ。それなのに今度の分にはそれがありませんよ。それを付けたときにグラグラしてね。ですから、もう取りに行かないで古いのを使っているんですよ。もう嫌なんです。もちろん新しいのに早く取り替えたいという気持ちは強くあるんですよ。忙しいから取りに行けないというのもあるんですけどね。



【写真3：3点で固定されているのでペンもグラグラしない】

10. 高校時代～今

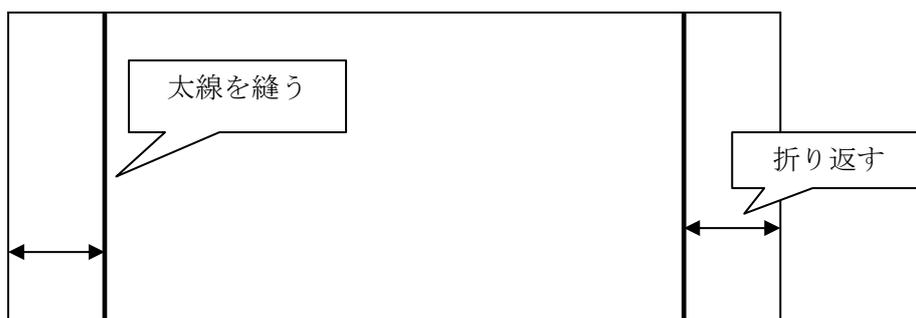
高校はT高校です。そしてB大学の法学部に行きました。それから卒業してA県庁に入りました。そこで59歳まで働きました。勸奨退職だったんです。今一番給料を貰っているのは県の研修センター。

11. 義手の日ごろの手入れ

義手はタオルで拭いて手入れしています。それから、汚くなったと思ったらハイター（漂白剤）の中へ浸けます。きれいに落ちるんです。義手は全部取ってハイターの中へ浸けます。そして、こういう黒いの〔ワイヤーが擦れて黒く汚れた部分の説明〕が綺麗に取れるんです。一晩浸けます。1年に1回とか、気が向いたときに。拭き掃除も毎日じゃないです。おしぼりが出て来た時〔外食をしてお手拭が出てきた時〕に。お風呂に入る時は全部外します。

12. 入浴時の工夫 その1、ズボンのファスナー

ちょっと紙貸してください。あのね、手ぬぐいがこうあるでしょ〔図①参照〕、この端を折り返すんです。そして折り返した所を縫うんです。すると袋になりますね。袋に手を入れて洗うんです。東京の身体障害者厚生…という国の施設で一番最初義手を作ったんですが、そこで指導を受けました。こういうの作ったらいいですよって。それからね、昔はここ(ズボンのファスナー)ボタンだったんです。今はチャックでしょう？だからファスナーにしないでか、あの時言われたのはその2つだったかな。



【図1：手ぬぐい】

13. トイレ・旅行

家のトイレは水洗で、ウォシュレットが付いてますね。しかしそれまでは紙でしたね。でも別に不自由はなかったです。きれいに拭けました。

旅行では国内も国外も困ったことはありません。

14. 熱いものは恐くない

障害者って言うのはね、見た目ほど不自由じゃないんですよ。「あんた不自由だろう」ってみんな言うけれども。でも私が、「あんた、うどん茹でる時に硬さどうやって調べるの？私なんかこうやって掴んで調べればいい。あんた出来るかい？」って聞いたら、「熱くて出来ん」って言うけど。ですからね、それほど不便じゃないんです。

ただね、つい最近女房に一言文句言ったんですけどね。オーブントースターの上にそんな紙〔普通の白い紙〕を置いてるんですよ。私は今までトースター焼くときにね、紙が邪魔になるな、と思ってどけたりしてやってたんだけど、このごろ暑いですから、たまたま義手を外したままトースター使って上の紙に触ったら、すごく熱いんですよ、その紙が。それで、「危ないじゃないか」って言ってね。義手で触ったら熱くも、冷たくもないですからね。今まで平気だったんです。ですから危ないなあと思ってね。それぐらいですよ。ある面で便利ですよ。よかったら片手ぐらい義手にされたらどうですか？火でも掴めますよ。

15. 入浴時の工夫 その2

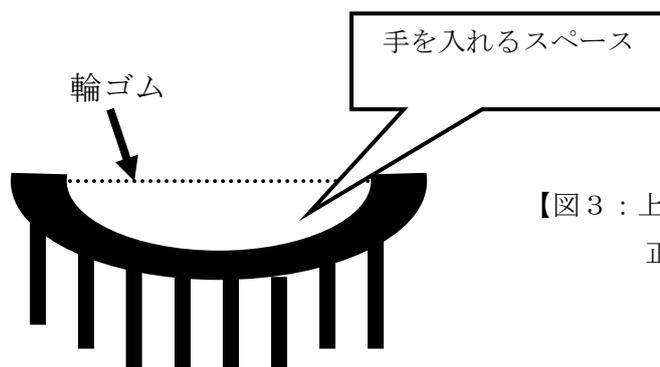
頭を洗うときのブラシがあるでしょう。私もずいぶんそれには困ったんです。そこで、ちょっと簡単な図を書いてみますね。〔図2参照〕こういうブラシがありますね。それで横から見ると、こうなってるのと、こうなってるの〔図2左：ブラシの上部が丸く盛り上がっている物と、図2右：へこんでいる物〕があるんです。



【図2：上部が盛り上がっているブラシ（左）と、上部が凹んでいるブラシ（右）。正面から見た図】

↓

私はこういうの〔図2右：上部がへこんでいる物〕をずっと探してたんです。ここ〔図3参照〕にゴムを巻くんです。そして、手を突っ込んで頭を洗うんです。ところがこういういいのがないんです。これ安物でしょ。大体安物なんです。高価なのは、上が丸くなってますよ〔図2左参照〕。

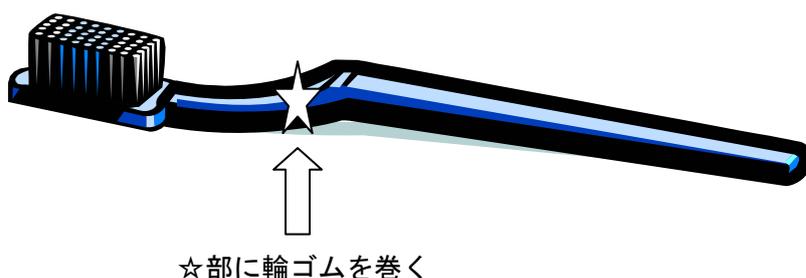


【図3：上部が凹んだブラシ。正面から見た図】



【図4：輪ゴムの巻き方、紐の取り付け位置】

これ〔図2左〕は輪ゴムを巻くとすると、まず入れるのが不便なの。ここ〔図2右〕ですとね、輪ゴムがこう〔ブラシの上部と輪ゴムの間に手を入れる隙間出来る〕なるでしょ。でもこれ〔図2左〕でしたらぺたんと引っ付いてるから〔ブラシと輪ゴムの間に手を入れる隙間がない〕駄目なんです。それで工夫してね、ここに〔図4☆〕紐をつけたんです。そしてこの紐を引っ張るんです。そうするとここが〔ブラシと輪ゴムとの間〕浮くから。紐を引っ張ると輪ゴムがプーッと浮いてくるでしょ。ところがね、これ〔図2左〕でするとね、これがクリクリクリ動くんです〔クシの上部が曲線になっているので安定が悪い〕。シャンプーがついてるからね。それで困ったなと思ったんですけどね、まあこれは、いくらかきつくすることで解決しました。これを〔図2右〕大事に大事にしてもね、何年も使っていると歯が抜けてくるんですよ。こんな安物は、いい所の100円ショップでいくら探してもないの。ですから今はもうこれ〔図2左〕にするしか仕方ないなと思って。



【図5：歯ブラシの工夫】

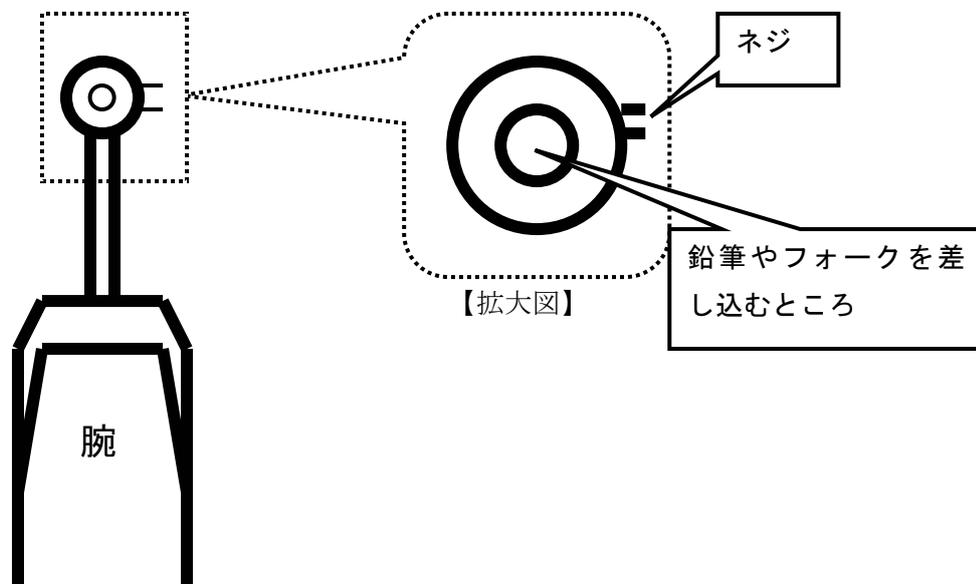
それから私が工夫してるのは歯ブラシです〔図5〕。歯ブラシ使っているとね、よだれがこっちに流れて来ませんか？皆さんの手はね、きれいに掴んでいられます。私はそれ〔よだれ〕が来るとね、ツルツル滑るんです。それで困ってね、私がする時にはこっちを磨く時にはこうやってして、こっちを磨く時にはこうやってしてたんですけどね²、いくらして

² 右を磨くときは体を左に傾け、左を磨くときは体を右に傾ける。

でも流れて来るんですよ。それで一計ありましてね、ここ〔図5☆〕で輪ゴムを巻いたんです。そうして、流れてくるのを止めるようにしたんです。これをし始めたのはそんなに古くなくて3年くらい前からですね。だからね、それまでは後ろ向いたり、ちょっと唾が溜まると吐いてはこう〔体を傾けていた〕やってたんです。これは何十年も。たくさん溜まると駄目ですよ。輪ゴムで止まらないで流れて来ますからね。ちょっとなら大丈夫です。こういう工夫が大事ですね。

16. 事故後、義手をつけるまで

事故があって20日くらい入院しました。11月に20日間くらい入院したのかな。そして2ヶ月くらいして義手をつけたように思いますね。東京までつけに行かないといけませんでした。それと、傷口がもう完全に良いという医者判断を得てから春休みに行ったのかな。私の母も、教員で勤めてましたので、冬休みではなくて春休みに行ったのかな。11月に事故しましたから、春休みに行ったのかも知れない。県にも身体障害者指導所っていう所があるんだけど、そこで仮の義手〔図6〕を作って貰ったね。あんまり生活に役に立たなかったですがね。非常に簡単な作りでしたよ。私の手に被せる様に装着するんです。先に穴が開いてるだけ。ここにネジが付いていて、こいつを差し込んでネジで締めて字を書いたりしてましたね。鉛筆を持つ時などは1回1回ネジを締めていましたよ。面倒臭かったですね。この鉄の先に、フォークをつけましてね、ここを鋏で留めて、それを丸い所にチョイと差し込む。だからフォークは使えました。使うのは全部フォークでした。



【図6：最初につけた仮の義手】

17. 服装について

休日の服装も大体今着ているようなものです。ネクタイはしてませんがね。ボロのズボンにワイシャツ。ワイシャツはボロになったら外に着て行けないから家で着てる。たまにワイシャツがたくさんあるから、着ないのはもったいないから着てるんです。それと、タートルネックはくすぐったいから嫌いなんです。ですから、ワイシャツを着てます。ポロシャツはあんまり好きじゃないから着ません。それか、スポーツウェアね。『大草原の小さな家』っていうの、観ますか？あの時アメリカ人が着てるでしょ？その生地がちょっと厚っぽいウールなんです。ネクタイはちょっと締めれないですけどね。襟の付いたものです。それが好きで昔から着てたんですけどね。今は子供が残して行ったのがあるから、もったいないんで大きいけど着てます。3枚も4枚もあるんです。もったいないからね。あれ、買うと高いんだと思う。

18. 健康への配慮

健康に気をつけて食べているものには玄米があります。炊き方によって硬くなったり軟らかくなったりします。圧力釜で炊くとそんなに硬くなくておいしいですよ。白米ほどはおいしくないけどね。23, 4才の時から玄米にしています。私はもともと体が頑健だったんです。東京で4年間生活して体壊しましてね。これはいけないと思っいろいろ本読んだら「玄米菜食」っていうのがありましたのでね。その時体の調子が悪いんで、医者に行っ たんです。そしたら糖が出ていると言われましてね。糖尿ですね。糖尿病じゃないんですけど糖が出ていて、肝臓の異変があると言われました。私びっくりしてね。それは糖尿病じゃなかったんですけど。私も4年間の生活が悪かったなあと思ってね。確かに悪かったんですよ。好きではないんですけど3食ともラーメン食ったりね。昔から食べるものには気をつけてたんです。私が中学3年の時の教師が体育の先生でね。食べ物が大切だっ てことを度々言っ たので、私はそれには気をつけてたんですけど。それでこんなことになっ たので困ったなあと思っ て玄米菜食。ですから今は、毎年身体検査をしてBが1つだけ。後は全部A。で、Bは何かって言うと身長に比べて体重が軽いと。私太りたいんですけど。羨ましい人ちょっとください。太らないんです。

※ []内は佐々木

インタビューのポイント

- ・ 強気な発言をしていた点。例；お湯に義手を突っ込んでも熱くない、旅行で困ったことはない、等
- ・ 義手を使いやすいように改良していた点 例；輪ゴムを利用、バンドで補強、等

- ・ その他の様々な工夫 例；頭を洗う時に使うブラシ、体を洗うタオル、歯磨きの時の輪ゴム、等

感想

今回インタビューをさせていただいて最も印象に残っているのは、渡辺さんの強気な発言である。例えば、うどんの固さを調べるのに、渡辺さんは直接湯の中に義手を突っ込んでうどんをつまみ上げることが出来る、よかったらあなたも義手にしてみませんか、とおっしゃっていた。義手をつけて生活するのは、私たちには想像できないほど大変なことに違いない、きっと様々な苦労話が聞けるはずだ、と想定して質問したはずなのに、逆に義手を勧められてしまった。障害を持って生活されている方に対して私はどうしても偏見を抱いてしまうが、多分それは私だけではなく、他の多くの健常者の方も同じではないかと思う。それに対して障害を持っている方は、健常者からの同情に対する返答方法を日頃の生活から身につけているのではないかとも思う。うどんの事例や、トースターを直接触っても熱くないという話などは、これまでに何度も健常者に対して披露してきた得意話なのだろう。この類の話になると、渡辺さんはそれまでも増していっそう流暢に話される。日ごろ話慣れていない事を話される時と比較するとその差は明確である。例えば最初に義手をつけに行っただのがいつだったかを伺った時、渡辺さんは春休みだったか、冬休みだったかで悩んでいらっしやったようだ。義手をつけ始めたのはいつか、などという質問は恐らくほとんど聞かれることがないのではないか。質問された時に初めて考えることだから、様々なエピソードを結び付けて結論づけるのに時間がかかるのだと考えられる。

渡辺さんの強気な発言から感じ取れるのは、障害と共に生きている方は健常者に同情されるようには自分自身を可哀想だと捉えておらず、義手を含めた自分の身体や工夫を凝らした生活に誇りを持っていらっしやる、ということだ。健常者には分からない苦労もあるだろうが、それを上回る喜びもあるのではないか。そのことを健常者と障害者の両方の立場を経験してきた渡辺さんは良くご存知なのかも知れない。障害を後ろめたいものとして隠そうとするのではなく、得意話のネタにしてしまう渡辺さんの発言には、同情の目を向けることしか出来ない健常者に対して、障害に対する違った角度からの視点を投げかけているように感じた。障害者としての工夫に満ちた生活に対する誇り、そして障害に負けない人間の強さやしぶとさを感じた。

人柄と職業経歴

渡辺 広一さん（仮名）インタビュー記録

2004年7月21日 18:00～後半
徳島大学総合科学部1号館第2会議室にて
記録：正島 祐子

1. はじめに

今回インタビューさせていただいた渡辺さんは、高校時代に化学の実験で両手首を欠損し、それ以来義手を使い生活をされている方である。障害についてのインタビューは前半の佐々木の報告に載せている。ここでは、渡辺さんの仕事についてのインタビュー報告である。簡単な職歴を述べると、大学進学、卒業した後B自治体（仮名）に35年近く勤務。そしてB自治体内での多くの移動を経て、現在は研修センター（仮名）スタッフとして勤務されている。

2. 大学進学と職業選択

まずD大学（仮名）に入った理由は、当時D大学が司法試験にいちばん合格者が多かったんです。それでお前弁護士になれと人からいわれてそれなら自分も弁護士になろうかと思ってD大学にいったんです。ところが大学では司法試験を受けませんでした。というのもすべるとわかっていたからです。それで司法試験は受けずに国家公務員の上級試験を受けたんですが、国家公務員の上級試験には受かったんです。そして受かったから当時の厚生省を受けたんです。そこに飛ばされたんです。しかしそこは採用してくれなかった。〔国家公務員試験は試験に合格しても名簿に搭載されるだけで、採用は未確定である。〕しかたないなあって思っているときにB自治体にどうだといわれて、まあそれじゃあB自治体いながら司法試験の勉強でもするかと思って帰ってきたんですけど結局だらだらとなってしまうました。

3. B自治体での仕事

いちばん長くいたのは法令係でした。そこで長いこといました。何をするかって言うと国で言えば法制局みたいなものです。わかりにくいところもありますが。県では条例とか規則を作るんですがその審査をやっていたんですよ。そこで係長まで行きましたね。それから地方課というところが変わって、これは市町村の指導をするところですね。そこを出て次に青少年婦人室というところで、これは青少年の健全育成とか非行防止だとか、婦人の社会進出の促進のための仕事ですね。今は男女共同参画社会といわれていますがこれの前段階です。その次に行ったのは、土地水対策室にいてそこで初めて室長になって、まあ課長級ですね。どういう仕事かという土地って言うのはバブルの後遺症にあったときに土地が値上がりしていたので一定の規模以上の土地〔取引〕については知事の認可が必要

でその指導、水っていうのは堰のような問題や、それに地下水ね、川の周辺の地下水の問題を扱っていました。今度は人事委員会の人事課長で、仕事は県の職員の採用試験等ですね。その次が地方労働委員会で、ここで次長というまあ副部長みたいな。地方労働委員会は労働争議があったときにいろいろ斡旋とか調停するところで、そこを辞めて次に行ったのは芸術の森に文化館（仮名）というところがあるんです。そこでいましてここは大きな二つの仕事というのは文化ネットワーク（仮名）っていうインターネットのネットワークがあるんです。インターネットは大げさですけどコンピュータのネットワーク。それと野外劇場なんか持っていてね、芸術文化のいろいろな催し物もやりました。パソコン打つ時にその義手で不便なところといいますけれど、そこには館長として行きましたからね細かいところはしません。ただこのときにまだ平成7年、8年ですからね、今ほどパソコンなんか普及していませんからね。パソコン習ったことかなって思ったんですけど忙しくてできなかったですね、2年間そういうのなかったですね。そして地方労働委員会というところに帰ってきたんです。ここで事務局長という職についてそれが私のB自治体生活の最後です。

B自治体の仕事の中に何かやりがいがあるというわけではなく、もう司法試験がダメだから仕方ないからB自治体に勤めていたという感じでした。だって他にいくところがないんですもん。

職業選択の際にポイントになったことというのは公務員が働きやすいだろう、時間が取れるだろうということで、それとB自治体に行けと薦めてくれる人がいましたから。今思うと私はB自治体以外の選択肢をとったほうが良かったかなと思うこともあるんですよ。ん、私あまりB自治体が好きじゃなかった。A県（仮名）が好きじゃなかった。A県に帰るのに嫌だと思った。どうしてかというね、私のところにA県の人間が来ると必ず金を貸してくれと言うんです。でまともに返すやつはそのうちの半分くらいで、A県の間人は汚いな、A県には絶対帰るまいと思っていましたんですけどね。まあ仕方なしに帰ってきたということですね。

地方課に入ってA県嫌いが直ったかという、まあ仕事は仕事ですからね、そこは割り切っています。A県嫌いをね、これはどこも同じなんじゃないかな、人って言うのは人をだましますよ。ほんとにね人は信用できない。平成12年、平成14年にひどいことだまされてね。こんなに人間って信用できないものだと思いますね。まあこれはA県だけじゃないと思いますがね。

障害が就職をする際に不利になったかといえば、それはあったんでしょうね。でも少なくとも国家公務員の上級試験に受かったから学歴の面ではそんなになかったです。それと先程も言いましたように人が見るほど不便じゃないですからね。ただ民間会社には行きたくなかった。なぜかという競争が激しうだから。あれだけ激しいともう互していけるかなという気がしました。当時はB自治体に入ったら時間を見て司法試験の勉強をしようとしてたので、民間会社には行く気はまったくなかった。

しかしB自治体に就職して実際に司法試験の勉強に時間が取れたかというところ、最初のうちはね6時くらいから12時、2時くらいまでやっていましたけどね、だんだんだんだんと他の事に時間取られて。忙しくなった理由をいうならば、昭和39年に東京オリンピックが行われていたんですね。そのあとに東京パラリンピックがあって、それに私はA県代表として出たんですよ。100m、走り幅跳びの選手としてね、それで身体障害者会の子に誘われたんですよ。断っとけばよかったんですけど私も案外付き合いがいいほうでね、そんな役務を持たされたりしてね。

それと朝8時から5時まで勤めていることがなんか疑問に思えてね。勉強しないで働くことに疑問をもってね。そして司法試験にもう受かるのかなという疑問もでてきて。27ぐらいまで勉強しましたけどね。

そのときに親に今の仕事に悩みがあるとかを言うことはなかった。B自治体を辞めると今度どうするかということが大変だったからね。経済的じゃなしにやめると今度再就職というのが公務員は一定の年齢をこえると今度はいれませんからね。最初は司法試験の勉強はしていたがだんだんと試験を受けるという意識から遠のいていきましたね。

芸術の森までの通勤手段はというと、芸術の森に行く以前は全部B自治体〔建物〕内の移動でしたが、芸術の森は私の家から10分くらい歩いてバス停まで行って、私はB自治体のちかくなんですよ家がね。あのY橋（仮名）のところのバス停に10分ちょっと、10分くらいかかるかな、それで20分くらいで芸術の森に着くんですよ。ちょうどラッシュの反対側ですから。便利なんですよ。だからそんなに不便ではなかったですね。当時まだ自動車の免許持ってなかったですからね、今は持っていますが。

健常者が車に乗るときに比べて審査が難しいというわけではありません。健常者と同じように普通にハンドルをにぎって運転もします。

4. 研修センターでの仕事

研修センターでの具体的仕事の内容は、県とか、市町村の職員の研修施設です。そこで地方自治制度とか、地方公務員制度とか、公務員倫理だとかいろんな科目を持っているわけです。

5. Z園（仮名）との関わり

監事という仕事をしていますが、監事の仕事というのは具体的には会計監査です。会計監査ですからね、年に一回諸帳簿の検査ですね。

身体障害者会というのはまったくのボランティア団体なんです。ですからZ園の職員は給料をもらってますけどね、私たち役職はまったくのボランティアでね、何の報酬もないんですよ。まあ今監事っていうのをやっているんですけどね、まあどうしてなったのかといわれればひとつ難しい問題もありますけれど、何が難しいかって言うと、まあ適任者がいなかったからということなんでしょうね。あの障害者会っていうのはね、人がいないん

ですよ。適任者がいなかったから私をと思ったんでしょうね。

Z園の内部については私全く知らないんです。こないだたまたまZ園の中回られてた時にお会いしましたね。あれはね私何でZ園に行ったのかな、そう私の研修センターというのはZ園の隣なんですよ。それでね研修センターに私土曜日とか日曜日に仕事しにいくときがあるんです。そしたらねだいたい研修センターの広い中で仕事しにきているの私だけなんですよね。ちょっといろいろなもの請け負っているからあれも忙しくてかなわないんでね。よく行くんです。それでお昼ご飯はZ園につくってもらうんです。お昼ごはんくらい人の顔見ながら食べないとね、精神的におかしくなるとはいけないと思って。そういうことがあって、あのときはたまたまZ園にお金を払いに行ってたんです。日曜日には職員のかたいませんからね。そしたら榎田先生〔今回の調査実習の担当の教官〕がおいでになられていますよということですね、じゃあちょっとご挨拶に行きましょうということですね。その程度ですから内部のことはまったくわかりません。

個室化のことについては聞いてはいますがけれどもね、しかし聞きかじりの知識しかないですから、正確に言えるかどうかはわかりません。ただ個室というのはね全国的なあれで、やっぱり人は一人でね、プライバシーの確保されている所で生活したいと思いますね。

6. 障害者水泳会（仮名）

障害者水泳会は平成5年から入っています。A県で国体があったんですね。それで、あ平成4年のね11月でなかったかな初めて泳ぎに行ったのは、平成4年の11月の20日だったと思う。もう誘われて誘われてしてたんですけど、行く気はなかったんですけど、人数が少ないからどうしても来てくれということですね、11月20日プールに行って久しぶりに泳いだら気持ちがよかったもんですからね、それでずっと泳ぎだして。水泳をするときは義手はずします。これはね、水泳は体に何にもつけないということが原則ですからね。タイム計るときは必ずはずします。つけることによってタイムがアップする場合がありますからね、ですからつけないんです。私の場合ですと、つけると〔水を〕かく場合得しますからね。これが国際的なルールです。

で私が入ったからだと思うんですが、前の世話してる人が会長やめたってなりました。渡辺さんしてくれて。それでわたしはそんなのいやだから、潰すわけにはいかないんでね田中（仮名）という男に会長になってもらって、私は副会長になりましたね。会のこの細かいところはできないから根本的なことは考えましよう、細かいことは会長の田中さんにしてくださいよということですね、その後ずっと副会長はしています。

現在も泳いでいるかという、忙しくてね。忙しくてもね、すぐ泳ぎにいけたらいいんですけどね、夜5時半ころ家について、で荷物置いてさあ行きましようとなるとね、もうたいそう、できなくなってね、ただB自治体の本庁にいるときはね、B自治体〔建物〕から青少年スポーツセンター（仮名）〔障害者水泳会が練習している施設〕ってのは歩いてそんなにかかりませんでしたからね、終わったらすぐおなかどんなにすいてても無理して行

ってたんです。泳ぐと楽しいですからね、それで家に帰ってたんです。それですから長いこと続けましたけどね。退職して、研修センターに行きだすとね〔遠いので〕ほとんど行っていません。

7. 大学への要望

大学一般と、徳島大学へのご意見はとくにはありませんが、要望といえば先程のこのような〔前半のインタビューで、生産性がないため販売中止になった〕義手ですね、儲けのないようなものについても、発売が中止されるんじゃないしに、研究していただきたいなと思いますね。

感想

インタビューが終わってみて前半の生活面でのインタビューにかわり、後半の仕事面での渡辺さんのインタビューでは事前に知っていることが少なく、質問も考えるのが難しかったため、こちらが考えていた予想とはずいぶん違う答えが返ってくるが多かったという印象を受けた。しかしそれだけ、障害を持つことでいろいろ変わるであろうという私たちのイメージがこんなに大きいものであったかということに気づかされた結果であったとも思う。

しかし生活面での障害の影響と、仕事での障害の影響はやはり違うところもあるのではないかと感じた。お風呂の入り方や、歯磨きの仕方、ボタンのつけ方は時代でさほど変わらないようなことだが、一方仕事をしてみると渡辺さんの「このときにまだ平成7年、8年ですからね、今ほどパソコンなんか普及していませんから」というコメントからもわかるように、仕事のやり方というのは時代でずいぶん、しかも短期間で変わってしまうところが多いのではないかと感じた。だからほとんど仕事の面では苦労がなかったとおっしゃる渡辺さんであったが、それが時代が変わって今就職活動をするということになったとしたら、障害を持つという条件が人生にどう影響するのだろうかと思った。

余談にはなるが、インタビューが、終わってから携帯電話を機種変更されたというので携帯電話を使うところを見せてもらった。昔は折りたたみのタイプではなかったのですが電話に出られたというのだが、そのとき持っていらっしやった以前より軽くなった携帯電話は折りたたみになっていて開くのに一度机のような平たいところに置かなければならず、でるのに時間がかかるとおっしゃっていた。しかし開く作業や、耳までに持っていく作業は実にスムーズでなれた感じで携帯電話を使ってらっしやった。他にも荷物を入れているバックにファスナーが開きやすいように紐をつける工夫がしてあったり〔写真1参照〕、ワイシャツが着やすいようにボタンのところを工夫してあったり〔写真2参照〕と仕事をする際に使うものに対しては、さまざまな工夫をされているようだった。このように何もしないならば苦労して行わなければならないことも渡辺さんは苦労なくできる工夫をしているからこそ苦労がないように思えるのだと感じた。

また渡辺さんは障害があるなしにかかわらずさまざまな仕事やボランティアをなさっていて人生経験が豊かな方であるなど感じた。それと同時に本当に忙しい方である。土日も研修センターで仕事をしていらっしゃるのでもZ園で昼食を召し上がっていたということはインタビューをしてわかったが、「Z園の内部についてはまったく知らない」とおっしゃっていたものの、お昼の時間にZ園の方とコミュニケーションをとっていらっしゃるようである。

* [] 内は正島が記入



【写真1 紐でファスナーを引っ張る】



【写真2 ボタンが工夫されたワイシャツ (ボタンは穴通しでなくワンタッチでつけられるようになっている。)

あんまり言うたら怒られる 大見 敏一さん（仮名）インタビュー記録

2004年7月29日

Z園（仮名）大見さんの部屋にて
質問：正島 祐子、記録：原田 越代

○ 障害を持つ前について

障害を持つ前は、職人しとった。板前。板前の仕事は下積みが長かった。10年したわ。10年下積みをして、まだ一人前じゃない。北陸行って、そこでセンターの職人の支配人として頭になった。上に立って板長をしようとした。刺身は食べるけど、魚はあんまり好きじゃない。今でも料理しようと思ったらできるけど、ここでは料理はできん。ご飯は食堂で作ってくれるし、部屋に台所はないから。家とかに帰った時？兄が1ヶ月に1回来てくれて、お盆・正月には2・3日帰るけど、その時にも兄夫婦と娘は働きに行っているから料理はしない。来月〔8月〕兄貴が迎えに来る。期間が2・3日というのは短い。お盆・正月だけ家に帰るといのは、Z園の前にいたA県N市のY病院（ここでは施設名、人名などは全て仮名表記する）の時もそうだった。

○ 杖について

近くのローソンやスーパーに1人でよく買い物に行くけど、障害を持ってから歩くのがつらい。どのくらい行くか？結構行くよ。1日何回も行くし。雨降りでは傘がさせないからカッパを着て出かける。雨の日は杖が滑って危なかったこともあるから、あんま行かんけどな。だいたい杖の先、ちびっとるし、新しいのに買い換えることを考えとるよ。今使っている杖は1回買い換えて2個目。買い換えた理由？これ〔杖の先が〕擦れて、ちびるから、先だけでも換えれるんやけどな。杖は病気になってからずっと使っている。杖の先だけを換えれるんやけど、今度は折りたたみ式のものを買おうと思う。値段は兄貴が買って来てくれているから、知らない。4・5千円位するやろ。最近暑いし、歩いて行くのは結構しんどい。お盆〔兄が迎えに来て、家に帰る〕までに、また散髪に行かなあかん。散髪屋は向こう、道を渡っていつものとこ。

○ 装具について

杖の他に、足を固定する装具をつけている。寝る時とかは外すけど、いつもつけている。足を固定するため両方、靴のサイズが違う。こっちは23cmやし、こっちは25cmかな。この今履いているのは古いけど、靴も今度帰る時に履いて帰ろうと思って新しいのを作った。部屋とかに自分が使い易いように工夫しているところ？工夫しているところはない。障害を持ったのは、耳の手術をしようと思って入院した時に、くも膜下出血になってから。大

きな手術を 2 回したけど、左半身麻痺が残った。くも膜下出血して左半身麻痺になってからは、仕事も辞めたし生活の環境はだいぶ変わった。職人に戻りたいと思っても、もう板前には戻れない。

○ Z 園に来る前について

X 島の第一 S (施設名?) の紹介で、震災の年の 5 月 26 日から A 県 N 市の Y 病院で 7 年半の間入院していた。あの時 [の地震は]、大きかったわ。ものすごい揺れたもん。それから K 市にある B 県立リハビリセンター (仮名) に 10 ヶ月いて、そこで今の Z 園を紹介された。お盆に兄貴と来て、Z 園の前の園長の吉川先生 (仮名) と面接をして、10 月 1 日に入所した。

○ Z 園の生活について

朝は 7:30 に起床する。朝起きる時間は決まっていて、7:40 に点呼がある。食堂で朝食を食べる。みんな一緒や [寮利用者全員で食事]。食事の席は最初から決められていて、自然に席が決まったというわけではない。食事のメニューも壁に張り出されている。決まったメニューだと嫌いな物もでてくるけど、前もって栄養士に言うておけばそういう注文というのは聞いてくれる。その他以外に、自分で買ったり? 買うよ。そこの西友とかローソンあるやろ。部屋にポットも置いてあるしな、今もインスタントラーメンをかうてきとる。X ラーメンと金ちゃんヌードル。辛い [味の濃い] もん好きやから。買って来た物は流し場にある専属の冷蔵庫にみんな入れている。あそこ入れとったら、名前を書いとつても無くなるんや。自分ののは自分で持っている。

朝食を食べ終わって仕事始まるまでは朝礼が毎朝あって、8:40 かな、10 分位ある。8:30 からあるんかな、朝礼は。10 分位朝礼して、ラジオ体操した後 9:00 から 12:00 まで仕事で、1 時間休憩して 1:00 から 3:00 まで仕事。昼食も食堂で食べる。3:00 から 15 分休憩だがこの時には部屋帰ってきて、便所行ったりする。トイレ休憩。んで、5:00 まで仕事で、夕食は 5:30 から。

○ 身の周りのことについて

部屋の掃除とかいろいろ決まっている。食堂当番もあるし、それも壁に張り出している。掃除道具は、食堂の横にある事務所のトイレに箒とか入れている。寮の部屋の掃除も専属の人がいるけど、業者ではなく食堂の係りをしとる人が掃除してくれる。だから自分でするのは、身の周りの整理整頓等なので比較的掃除に関しては楽だ。洗濯? 洗濯は毎日お風呂あがってから、トイレにある洗濯機を使って自分で洗う。1 台だけ乾燥機もあるし。洗濯とかに関して不満は何もない。今のままで? 前のとこ [B 県立リハビリセンター] には洗濯機が 5 つあったけど、こっち [Z 園] は 2 つなので順番待ちができたりする。洗濯物をたたんだりするのは大変や。

○ 不満に思うこと (1)

Z園にお風呂は1つしかないから、最初に女性が7:00まで、それから男性が入る。男性は11:00までで、時間が決まっていて不便。広さは別に問題ないが、その時間に入らないといけないというのがある。またお風呂2つこしらえる言うよったけどな。お風呂も専属で掃除をしてくれる。シャワーは毎日使えて、昨日〔水曜日〕はサウナの日。あれ、誰も入らん。わしも血圧が高いから、入れへん。利用したこと？ここに来てからサウナに入っていない。お風呂に入る時にも介助がついてくれないので、みんな自分で入っている。車椅子の人、あの人らも自分で入んよる。介護の人がつくのは隣〔隣の部屋の人？〕だけ。背中を流してもらいたいんやけどな、流してくれん。だからナイロンタオルとかで体を洗っている。普通のタオルより良い。体も自分で拭く。

9:00に消灯が決まっているが、それ以降にテレビを見れないとかはない。一晩中つけとる。つついづつと見てしまうこともあるけど、寝不足とかにはならない。2人部屋だが同室の吉岡君(仮名)に文句を言われたりとかは無いし、個室化しようという動きはあるがこのままでいい。吉岡君(仮名)はK市出身で、わしより先に入所している。同じ軽作業科だが、自動車の部品。2人部屋で気を使ったり？んなことない。自由にしとる。

○ 仕事について

仕事は軽作業で、毎月送られてくるR〔月刊漫画雑誌〕の付録とかを袋に入れたりしている。今、ちぎりしよる。こんなタンポポとか刺身に入れるやつとか。こういうのは、時期によって違う。Rも違うしな。それ以外は、前の軽作業の車の部品を手伝ったりする。仕事はいろいろ見学をして、軽作業に入った。表装科に行きたかったんやけど、行かせてくれんかった。やっぱり、こう、自分の希望とは違う。付録とかを袋に入れたりする軽作業は、最初から難しいということがない。もう、〔すぐ〕できる。だから作業に関して、抵抗も無く仕事に入った。人と協力してする部分というのはない。人によってスピードとかは違うし、仕事は速い方や。だから手伝うこともある。わしは仕事におしゃべりをする事はないし、作業は仕事を分担して、この人はここまで、ここから次はこの人という感じで流れ作業になっている。仕事をやっついて辞めたいって思ったことはない。やりがいを感じているか？係を代わりたいんやけどな、表装に。そういう希望っていうのは聞いてくれる。今も表装に代わりたいと先生に言うてるけど、そこは希望を言って、後は先生がどうするかっていうのを待ってという感じで、結果は先生に任せるしか仕方がない。表装科は難しいみたいやな。前していた板前の仕事の影響とかというのはないし、全然別の仕事や。もう板前にかえれんもん。してみたいと思う仕事？職人に戻りたい。上、立ってしよったから。板長しよったから。

この31日に納涼祭やけど、台風が来ている。台風来たら中止や。それは明日決まる。台風が来ても仕事は休みにならん。寮ではなく通所をしている人もいるが、Z園から車で迎え

に行っているのだから仕事が休みになることはない。個人で車に乗って来る人もいるし。

この袋〔作業着が入っている〕くれたんや。作業をする時の服装は決まっていて、これ着なんだからいかんやけど着んよ。冬やもん。夏用に半袖とかではなく長袖や。欲しい人言うたら全部くれたけど、暑いし着ない。

○ 休日について

日曜日？軽作業、仕事あるよ。仕事が休みの日っていうのは、カレンダー通り決められていて、月4回かな。休みの日は決まると、祭日だけ。カレンダー通りや。会社と一緒に。休みの日はいろいろするよ。出て行って。部屋にもおるし。テレビ見とる。他にしていること？テレビを見て1日ぶらっと。ははは。テレビっ子やもん。こういうん〔番組予定が書かれている月刊誌〕取って、チェックをしている。毎週かかさず見ているものもあるよ。時代劇。サスペンスも好きやし。

○ 不満に思うこと（2）

Z園に入所して1年6ヶ月になるが、まだ慣れてない。夜出て行ったりする、内緒で。理由？飲みに行ったりするん。酒飲んだらあかんやけどな。これは決められとる。医者にも止められとるし。10:00前に点呼が来るんよ。自由な部分もあれば、そうでもない部分っていうのもある。そのひとつとしてお酒を飲んだらいかんというのが。昔は1晩にブランデーを1本空けとった。くも膜下出血になる前で、北陸で借金してK（地名）の新聞屋に肩代わりをしてもらって新聞配達をしていた頃。いろんな所に行っている。この前の25日の天神祭りあったやろ。あすこおったんや、わしら。大阪の梅田、天満宮の何やったっけ、次元町におった。そこでひまやから、イタリアン料理を食べたりした。親父がB（地名）の出身やったから、B（地名）にもおった。サファリパークができていし、変わるとるやろ。レーンの射撃場があって、散弾銃とかの鉄砲も売とったしな。わしの出身はS（地名）。行きたい所は、今は祖谷のかずら橋に行きたい。

Z園で旅行？来月に日帰り旅行や。レオマワールドちゃうかな。こういう旅行は1年に1回だけで、どこ行きたいとかみんなの希望を話し合う。以前は半分負担してくれたけど、今は個人持ちで自由参加。わし？行かん。話し合いでどこ行きたい言ったか？わしは、USJに行きたかった。前にいたB県立リハビリセンターでは行く日にちが決まっていたが、10月1日にこっちに来たから行けなんだ。他の入所者と楽しんで何かをやっているということではなくて、個人個人というかたちだ。

他に不満なこと？あるよ、ははは。施設に設置してあるものとかでして欲しいことは、運動する機械が欲しい。病院みたいななんないからな。昼間は外でフリスビーみたいなことをしているけど、わしやせんよ。外で遊んだり、気分転換に運動すること？運動はせん。今はせんけど、秋になったらすると思う。ウォーキング。前はしよったんよ。希望者の人だけで外に出て、肥満体の人とかと10分位園内歩いた。他に？あんまり言うたら怒られる

けど、自由時間が欲しい。

*〔 〕内は原田。

—感想—

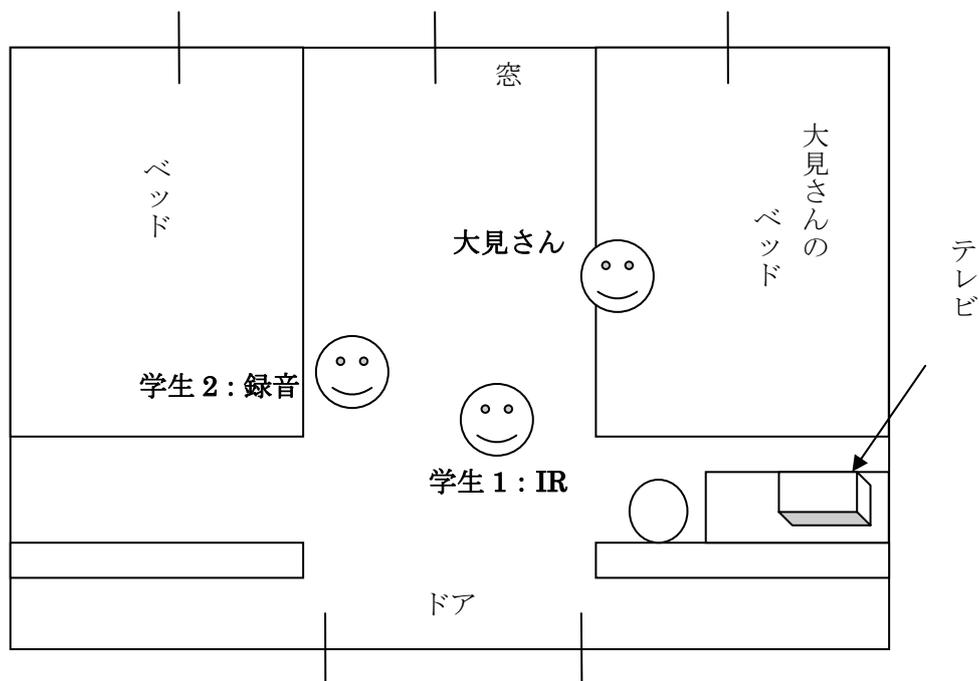
実際にテープ起こしをしてみて、思った以上に人が話す速度というのは速いのだなと驚いた。インタビュー時間は60分であったので、特別長いと言うわけではなかった。それでも慣れない作業に手間取ったのだが、今回テープ起こしに用いた機械が再生速度を変えられたことで、比較的効率良く作業できたのではないかと思う。ただ、速度を変えると、再生音が若干小さくなったので、録音状況は出来る限り良くする必要があるだろう。その場にいた時には多少聞き取り辛くてもある程度は推察できたことも、時間が経って改めて聞いてみると分からないことが多くなったように思う。また、インタビューという対話を一人称一人語り形式にする際に、インタビューする者（interviewer:IR）の質問に対して受ける者（interviewee:IE）が相づちのみで返答をした場合は、それをIEの発言として扱ってよいのかどうか悩んだ。結局、IEの発話のように書いたが、それでは不確かであるようにも思う。すべてをIEの発話と表記するのではなく、場合によるということを意識して書く必要があるだろう。相づちもまたひとつの返答であり、沈黙ですらそうなのだとすることを知り、リアリティあるインタビューを行えるよう心掛けたいと思った。他にも、インタビューの会話の順序に添わないで書くことは難しかったし、後になって気になる発話があってもその時に十分に質問できていないところがあった。これらの反省点をふまえ、インタビューを行う際には、メモをとることで情報の整理をし、次の質問に繋げることが必要だと思う。後々のことを考えてもメモ取りは重要だと感じた。

テープ起こしをしていて、インタビューのなかでIRの質問をIEが推察し、途中でその質問に対しての返答をすることが多く見られることに気付いた。この時のIEの返答というのが相づちであったりしたのだが、IRがそのまま質問を続けると、より多くのことを聞く機会を逃してしまうことにもなりかえない。インタビューであるので、IEが話したらそれを聞き、さらに質問を重ねることも必要だったのかもしれない。実際にインタビューを行ってみるとなかなか思ったようにはできず、IEの発言のどこに着目するのかというのも難しいと痛感した。

一人称一人語り形式にしていて、方言をどうすべきかで悩んだ。IEの大見さんは方言を用いて話していたのだが、表記する時には標準語を用いつつ、主に方言を残して書くことにした。当初は標準語で表記していたのだが、そうすると口語で聞いた発話と違った感じになってしまい、その人らしさを損なってしまうように感じた。そこで、この文体で書くことにした。どういう文体で書くのかということも重要だと感じた。

会話の順序に添わないで書いたことで、IEが発言したことではあるが私の主観が入り、ある意図を持った文章になっている。これは一人称一人語り形式にした以上、仕方のない

ことなのかもしれないが、IE の意図した内容と異なるように表記してしまっている部分もあるということを念頭においておかななくてはならないと思う。インタビューでは過去（障害を持つ前）から現在に至るまでをやや時系列に聞いていった。しかし、この聞き方では話がいろいろと広がって、結局流れが曖昧なままで終わってしまった箇所もあったので、注意する必要があると思う。



【図 1：インタビュー配置図】

オンリーワン 加勢 賢一さん（仮名）インタビュー記録

2004年7月29日 15時45分～
Z園（仮名）食堂にて
質問、記録：林 佑香

[] 内は林

○ 加勢さん（仮名）について

加勢さんは現在 42 歳の男性で、Z園には 19 歳の時に入所し、約 22 年間寮で生活されている。病名は骨形成不全症。骨組織の形成障害が原因で、手足の長い骨が折れやすくなる病気である。骨折などによって手足が変形していて歩行が困難なため、車いすを利用している。また、装具は保護目的として左足につけている。現在は印刷科に所属し、主には受注台帳をつけるなどの事務的な作業を行っている。

○ 病気について

病名は骨形成不全症。骨が弱くて折れやすくなります。日常生活で気を遣っているのは、何をするのでも力をかけずに、できるだけ自分が自信ないものはやめて無理しないこと。小さいときはそうでもなかったけど今はな。慣れた人でなければ抱いたりはできないし、してもらわないです。自分のやり方っていうのが今までに固まっているんです。ああいう時に失敗したなあ、とか、こういう時にこうしたらよかったなあ、とか。まあ言ったら頭でっかちみたいになってるけど、反対に言ったら自分を守るっていうことになってます。

○ 車いすについて

本格的に乗り始めたのは小学校一年生の後半頃かな。それまではなんとか松葉杖ついたり、色々して歩いてたけど、やっぱり折れがひどくて。折れたらくつついても曲がったりするから。どうしようもないから病院に入院したりもしてたんですが。でも左手や全身が折れるから車いすを押せないんですよ。だから押してもらったりしてました。

今の車いすは自分に使いやすいようにしています。例えば〔車輪の〕内側に波〔ゆるやかな波に親指をひっかけて車輪を回す方法によって力がかかりすぎないようにし、回しやすくしている〕が入っていますが、これは皆には入っていません。今は既製品のもでもプラスチックのがあるけど、私のはごっつい波々だったら指が当たって痛いから、指が滑っても痛くない感じの軽い波々です。ゆるく、引っかかっても取れる感じです。手が引っかかってとられたらまた折ってしまいますから。私の場合、内側で親指で挟んで押すから、内側に波々が入ってたら便利ですよ。でもオーダーメイドっていても私が現場に行って作るわけじゃないからなかなか難しいです。たとえ車いす作る業者でもやっぱり人には一回

では分からないですね。やっぱり作る人の基本になるから。なんべんもなんべんも相手に分かってもらえるまで言いました。あの時はああだった、とかいう、それも積み重ねですね。

○ 装具について

今はひざ装具っていうのを左足につけてます。四・五年前までは左手に十年以上、十五年くらい使ってたけど、お風呂に入る時に取ってて手を折ってしまって、それ以来使っていません。私の場合は機能をどうこうするというより、カニやエビみたいに中のものを保護するのが目的です。保護して動かさないようにします。新しい装具と交換した後、合わなかったりすることはもちろんあります。痛いです。作るまで時間がかかるので人間は成長していくから。装具は使おうと思ったら十年くらい使えます。私の場合は歩かないし、保護するためだから、自然に駄目になるのはいいけど、乱暴に扱うってことは、装具が駄目になるってことは手足を乱暴に扱ってるってことですから。

○ 日常生活について

今は二時くらいに目が覚めるから、四時くらいから出て行って散歩します。暗闇だから危なくないしね、車も通らないし、静かだし。神社を回ってみたり。早く起きるのは昔からですね。学生の頃は誰かに起こされるまで寝てたけど、こっち来てからは自分で、目覚ましとかも使ったことないですよ。こっち来たら緊張するという意味でそんなに深くは寝ないっていうことかな。ここは実家とはもちろん違いますね。

食事は寮にいるので三食とも食堂です。好きなメニュー？あんまりないなあ。若い時は煮たものというよりは、がつつりした感じが好きでしたね。昔はインスタントものを食べ続けてみたり、同じものを食べ続けてみたり、乱暴なこともよくしました。やっぱり若い時はそれでいってたけど、年追うごとに色々と、深刻な病気、内臓の病気になってからはどんどん体質が変わって、自分の考えも変わり、あれこれ食べるようになりましたね。結局食べるものが原因でしょう。直腸が裂けて手術したり、貧血になって輸血するくらいにまでなったこともありました。ここは栄養士さんがいるから食事の面は大丈夫だと思います。

洗濯ですか？洗濯は自分でします。洗濯機は共同で、空いてたらします。誰も干してくれないしね。取り込むのは部屋に昼間来てくれてる人がやってくれたり、自分でもします。

お風呂も自分で入りますね。時間帯が決まっているので、行ける人は行って、みんなで入ります。

○ 仕事について

厳密に言えばここは職場でなく、職業訓練施設ですね。労働省でなく厚生省の管轄ですから。仕事内容はまあ、印刷科ってなってますけど、私の場合は印刷科の事務みたいなも

のですかね。パソコンに受注台帳をつけたり、明細つけたり、買った分の台帳をつけたりとその他諸々です。例えば紙が無かって買ったとしたら、どこから買って、何月何日に届いて、いつ払い出したっていうのをつけていきます。それがまた監査でいきますからね。主には事務関係の仕事ですけど、版下作ったり、何でも手が空いてたらしめます。印刷科って刷るばかりでもないんですよ。もちろん刷る人もいますし、版下作る人もいて、出来上がったものを包む人もいて、それが一緒になって印刷科ですからね。収入はあくまでも出来高払いです。まあ日雇いのようなものですよ。仕事で楽しかったっていうのはないですね。大体苦手なものばかりしてますから。印刷科の前は和裁科だったんです。着物縫ったり帯縫ったりしてました。和裁科は「行って見たら？」って言われて、まあ言われたからにはとりあえず投げ出したら駄目だと思って五年くらい続けました。印刷科にも漢字とか全然知らないのに行きました。台帳とかパソコンは教えてもらいながらですね。

○ 家族について

家族と会うのはまあ、月二、三回かな。実家には月に一回か、帰らないときもありますけど。なかなかね、帰って面と向かって話すこともないし。やっぱりここが自分の生活の中心になってるから。本当は向こうでなくてはいけないんだろうけどね。ここはあくまで仮住まいってことにしとかなないといけないんだろうけど。実際本当にここが中心になってますね。

○ 休日について

休日は日曜日と隔週の土曜日です。それも行事が間に挟まってつぶれることもあるけど。休日はテレビ大好きだからテレビ観たり、外をぶらぶらしたりかなあ。映画もだいたい行ってないですね。若い頃はよく行ってましたけど、やっぱりなかなかね、こうしようかっていう時にはすごくエネルギーがいるし。何かのきっかけがなかったら難しいっていうか、動きがね、やっぱりできないっていうかな。

買い物は大好きですよ。コンビニ大好きですから。コーヒーが好きで百三十円くらいでカップに入ってる種類をずっと買ってます。外に行く時は電動車いすに乗って行きます。そうじゃなかったら外は自分で行けないんですよ。今この車いすも平らな所で斜めになってるとか色々条件があるんです。これ自身が曲がってるから、方向がちょっと、普通の人に乗ったら曲がっていくんですよ。だからちょうどいいんですけどね。実際は左手なしで、足がちょっと動いてるだけだし、あまり力がないからこれで外へは行けないですね。中でも電動車いす乗った方が体がこう、まっすぐなるから、楽なのは楽なんですけど。誰かと一緒に行く時は、電動車いすの後ろにつかまって、引っぱって行ってあげるとか色々あるけど、大体一人が多いですね。

散髪も行きますよ。自分で、ここだったら階段もないし、入ってそこの店の人もしてくれるなあと思ったら行きます。まあ色々ありますからね。入って、しにくいなあっていう

人もいるし、店が狭かったら無理なところもあるし。今は決まった店があります。散髪で色々されるのが大嫌いなんですよ。顔剃るとか、もうシャンプーも何もいらないから、切るだけ、カットだけ。それをしてくれるところへ行きますね。

○ Z園での生活について

ここでの生活は〔昭和〕五十七年からだから二十二年か。十九の時に来たからね。Z園開園の時から。若かったですね。開園当初からいる人もまだたくさんいます。後から来た人には、聞かれた時はもちろん教えるけど、先頭になってするっていうのではないですね。職員がいますから。私が来た時はずっと年上の人ばかりで、私が一番若かったですね。まあ反対に言ったら何でも言っても許されるって類でしたね。今はもう違いますね。下にだいぶできましたから。

こっちに来てどう変わったか？夢をあまり持たなくなりましたね。こう、何がしたいっていうのが、うん、年とるごとにね。こっち来た時はもちろん、ありましたよ。すぐ辞めるって気でいましたから。五年くらいいてもすぐ辞めないといけないなあってずっと思っていました。なかなかそれがうまくいかないんですよ。やっぱり自分の体の状況もあるし、引き取ってくれるところもないし、って言ったら。なかなか、自分に合うとこってね。今のように、私らみたいなのが外へ出てこう、何とか一人で生活するとか、色んなあれっていうのはなかなかない時代でしたから、当時は。今のような、ノーマライゼーションがどうのこうのって世間的にはなかったから。自分の夢っていうのは、いつかこういうとこにいないで、出たいな、とは思ってましたね。もしくは違うところに行きたいなって。うーん、今はまたそういう風な気持ちにはまたちょっとなってますね。他の成功した人のこととかも聞いたり見たりしますし。やっぱり今だったらこう、結構多いですよ。重度の人でも一人で、いろんな人の支援を受けながらやってるって人がたくさんいますよね。そんなのを見せてもらったら、自分でもやってみたいなっていう気持ちにはなってますね。自分が年とるにつれて親も年とるし、特別っていうのは無理だろうけど、やっぱり自分なりのこう、一人で、実際一人ではないんだけど、なってみて、やったってことを親とかいろんな人に安心というか、見せてやりたいっていうか。そういう意味でのけじめっていうかな。頭で思ってもね、きっかけとかもいるしね。そのきっかけさえあればね、いいんだけど。それと自分自身の体力とね。

この住み心地？二人部屋っていうのはやっぱりなかなか難しい面もありますね。かえって十人くらいで一緒にいるほうが易しいと思います。けれどまあ、それも慣れですね。お互い干渉しないっていうのがいいですよ。でも冷たいとか知らん顔っていうのではありませんよ。あれこれ詮索しないことが大事ですね。ここで一番便利なことは、市内から中心部とまではいかないけど、中心部だったら反対にやかましいけど、ちょっと離れたところで交通の便もいいし、お店もたくさんあるし。ちょっと国道から入った所だから静かだし。立地条件は最高だと思います。それが何よりの一番好条件ですね。バス停もあるしね。

幸いにしてノンステップバスの停留所もあるし。[バスは結構] 乗りますよ。

最近の楽しみ？ 楽しみねえ、うーん、何だろ。(沈黙) 楽しみってあんまり、言われてみたらただら生きてるなあって。どうだろ、楽しみねえ、ちょっと今は分かりませんね。

○ 部屋の工夫について

いないものは上へ、いるものは自分で取れる所へ。ちょっといないものは奥へ入れといて、棒とか、ごみを挟むやつがあるでしょ、大きい金ばさみっていう、そんなので取ってみたい。まあどうしてもな、下に落ちたらこれ取ってって言わないといけないし、もうそんなのがいちいちめんどくさいんですよ。それだったら挟むもの持ってきてそれで挟めって感じ。部屋には棒とかあるだけです。カーテン閉める時には棒で。ベッドは車いすの高さだったら、[ベッドに] 下りる時はいいけど、今度 [車いすに] 上がる時は力があるから。だからちょっと高いめくらいだったら [ベッドに] 上がったたりできるけど、今度 [車いすに] 下りる時は高かったら楽に下りれるからね、ちょっと高くしてます。[ベッドの下に木の板を挟み、ベッドが少し高くなるようにしている。] ベッドの横にリモコンとか置いてみたいね。いないものは上へ置いといて、いるものは手前に置いて。そんな感じです。

○ 感想

インタビューを終えてみて、事前に、聞きたいことを整理し、質問項目を考えておくことの大切さを感じた。一人でインタビューするのは今回が初めてということもあり、質問項目はできるだけ具体的な内容を書いておくようにした。インタビュー中も、話を聞いてメモを少し取るのが精一杯だった。しかし後から考えると、途中もっと話を広げたり、分からなかった所をもっと深く聞いたりすることもできたのではないだろうかと思う。質問項目にこだわらず、その場の流れに沿ってインタビューすることは難しいが大事なことだと感じた。

加勢さんは、開園当初から入所されていて、Z園での生活は二十二年。寮での二人部屋の生活も慣れたとおっしゃっていたが、「こっち来たら緊張するという意味でそんなに深くは寝ない」そうで、二時くらいに目が覚めるとお聞きして、寮生活に慣れていても、やはり実家とは違って、気が抜けきれていない部分があるのかもしれないと感じた。また、目が覚めて四時くらいから散歩されるそうで、その理由として、「暗闇だから危くないしね、車も通らないし、静かだし。」とおっしゃっている。長年の寮生活を経験される中で、一人になれる時間、ひいては自分が自分である時間を持つことを大切にされているのかもしれない。テレビが大好きで、休日は主にテレビを観たり、外をぶらぶらして過ごされるそうだ。買い物も好きで、毎日散歩したり、コンビニにもよく行かれるとのことだった。

「Z園に来て何か変わったことはありますか？」という質問について、「夢をあまり持たなくなった」とおっしゃったことが印象に残った。加勢さんが入所された当時は、「いつか

は出たい、もしくは違うところに行きたい」と思っている、「今のよう、ノーマライゼーションがどうのこうのって世間的にはなかった」そうで、自分がやりたいことを実現させようと思っても、そのためのチャンスや支援体制などがなく、自分の道を選択していくのが難しい状況、社会だったのではないかと思う。仕事は苦手なものばかりやってきたとおっしゃっていたが、誰にでもできることではなく、何か一つ、オンリーワンを大切にしているとのことだった。

また、Z園について「厳密に言えばここは職場ではなく、職業訓練所」「ここはあくまで仮住まいってことにしとかなないといけないんだろうけど」と述べていることから、Z園を自分の定まった職場、定住地としては捉えていないことが感じられた。

寮の部屋もを見せていただいたのだが、落ちたものを取るための金ばさみや、カーテンを開け閉めする時の棒などが置かれていて、ベッドは登り下りがしやすいように少し高めにされていたり、リモコン類は使いやすいようにベッドの横に置かれていた。自分にとって使いやすい空間にするための工夫がされていて、長年の経験の中で、少しずつ自分に合った方法を見つけていらっしやるのだなあと感じた。



【写真1：金ばさみで包帯を拾う（2004.8.4）】

隠された不満 北川 信一さん（仮名）インタビュー記録

2004年7月29日 15時47分～
Z園（仮名）北川さんの部屋にて
質問、記録：田中 文恵

○北川さんについて

インタビューさせていただいた北川信一さんは、現在24歳の男性でZ園に入所して5年目になる。軽作業科に所属し、少女漫画雑誌の付録の袋詰めの仕事をされている。右半身に障害があり右手を使うことが困難である。両足に装具を使用されており、歩行時には概ね装着している。

○Z園に入所する前について

Z園に来る前に、H峰〔学校とセンターが併設されている施設〕に小学校時から高3くらいまでずっとおった。団体生活だった。H峰におったときは6人部屋だったけん、団体生活にはまあ慣れとるかな。家族と長い間一緒に暮らしていなかったが、土・日は家に帰ったりしよった。

○Z園に入所するきっかけについて

Z園に入所するのは自分で決めたのかって？えーっとな、それは知らんよ（笑）何か知らん間にいきなりな、H峰におったとき何かお母さんに「Z園あるけんそこ入らんの」とか言われて。まあその時は別にそんなに考えとらんかったけど。まあ別に〔Z園に入所しても〕ええよって言って、まあ入ったんやけど。何か知らん間になあ先生〔施設利用者が職員のことを指して「先生」と呼んでいた〕とかが。一回Z園に体験みたいな感じで来たんよ。んでまあ、ここ〔Z園〕に入ったということで。Z園に体験で来てみて、ここだったら良いと思うようなことがあったのかって？別に（笑）そんなことも思わんかつと思うけど。

○Z園での生活

Z園の起床は6時45分やけど、俺はほの時間には起きんな（笑）点呼は朝の6時45分やけど、その時間はまだ寝よるわ。朝飯は7時半か。まあ、たまに忘れて寝よる時があるけど。そんな時は先生が起こしに来る場合があるし、それかもうそのまま寝とって朝飯抜きのときもあるし。仕事は9時から。その間洗濯とかするときもあるしせんときもあるし。お昼休みは俺は部屋で寝る。部屋でテレビ見たり、寝たりしよる。仕事が終わった後はたまに買い物とか行ったりする。ほなけどほとんどが部屋でおるな。買い物はここら辺りの本屋とか。僕はまあ、一人で買い物に行きよるけどな。後は、部屋でテレビ見たりしよる。風呂入ったり。そりゃあもう後は自由やけんあ。風呂は一人で入る。入浴で不便なことは別にないな。トイレも別にいける。

Z園での生活は快適ではない（苦笑）快適とは言えん、言えん。ここがこうだったらいいのにとすることはあることはあるけど。ここの仕事の給料とかもっと上げてくれたらとか、

たまに思うけど。このお金は給料から払っているかって？このお金は払いよらんのかな。払いよんかいな。わからん。給料は買い物に行くときとかに使う。あれ、先生になんぼおろすか〔金額を〕言うて、〔紙に〕書いてほれを下ろしてもら。

部屋の工夫ですか？使いやすいように、う～ん別にないと思うけど。

自分で料理したりとかはせん。健康に気を使つとるとか別にないな。考えてやったとしてもすぐあかんようになる。長続きせんとしてやめてまう。

○実家での生活について

実家での生活しやすい工夫としては、階段に手すりが付けてある。最初は一階だけやって、後で二階ができた時にそのとき付けた。実家のほうがやっぱりくつろぐ。やっぱり家のほうがいいわ。プレステとかしまくれるし。ゲームとかテレビとか見てくつろいどる。たまに遊びに〔出かけて〕行ったり。

○仕事について

担当の仕事は、軽作業の付録入れをしている。（【画像 1】参照）まあ、軽作業やけん。その仕事にやりがいは、ふっ（笑）やりがいは、まあ感じとるってことにしようか。他にやりたい仕事ですか？他にはあんまり、そんなこと考えんけん。付録入れのより前の仕事はない。Z 園に入ってからと同じ仕事じゃ。入所したのはうーん、18 の春休み前か。3 学期の終わるちょっと前の 2 月ぐらいに、何か入所して。ほれで、春休みなかったんよ。もうほんときにここ〔Z 園に〕入ったけん。仕事しよった。そのときから付録入れの仕事をしてた。まあ最初来たときはいろんなところ回ったけど。一番し易いんがええ思うてしよる。自分で付録入れの仕事を希望したのかって？はは（笑）自分で希望した（笑）何か希望したような気もするし、なんか知らん間に決められとったかもしれんし。まあ忘れた。まあ、一番やり易すそやな思うたんは、そやな。

Z 園に入所して仕事を始めて、一時は（笑）、一時的には楽しくなってきたと感じたけど、今は別にほんなおもしろいとか感じんようになってきたかな（笑）。それは、同じ仕事を続けとるからというよりは、やっぱりなあ、給料がなあ。給料がもっと貰えるような仕事がしたいとは思とるけどなあ、まあ無理だろうな（苦笑）。今やっている仕事の目標とかあるか？目標は別にないな（笑）。

○装具について

装具の調整修理は Z 園に技師さんたちが来て行っているのかあるいは、自分から技師さんに連絡をしているのかですか？自分からは〔連絡を〕したことないけど。ほんな、どないしよんだろ。装具を付け始めたのは小一だったかな。小学校の時からやと思う。いやもっと前やったかな。小学校の時はこの〔現在使用している〕装具ではなかったんやけど。違う装具付けとって途中からこれになって。今付けている装具は長いことになる。歩くとき以外はまあ、ほとんど装具付けとらんけどな。歩くときは付けなあかんけど。家に帰る時はまあ、装具を付けずに普通の靴で帰るけど。〔北川さんは歩行距離によって二つの靴を使い分けている。比較的長い歩行距離の場合には装具を装着し茶色の靴を履く。比較的短い歩行距離の場合には装具を付けずに黒色の靴を履く。〕（【画像 2】参照）歩きにくいとか

いうことはない。慣れてるから。

Z園に来てから修理はしたかって？修理とかあの、H峰におったときに作って、修理とかはしたことあったかな。わからん。

○仕事場での工夫

自分の仕事する机ですか？え、あれは自分の机ではないけど、場所は決まっとんな。あれ、だいたいこことかこことか分かれてみんなしよるけん。その場所で工夫はしとると思うけどな。座ったまま手が届くような。

○トラブルへの対処

仕事の納期がせまっているときに体調悪くて仕事ができない、休まなければいけないときはどうするのかって？ええっとね、俺が休んどって納期迫ってきよんだったら、他の人が、先生とかがやとってくれる。まあ体調が良かったら自分もするし。だいぶ体調が悪かったら仕事の途中で、「ちょっと熱はかってくるわ」って言うて熱はかりに行って、熱あったら「熱あるけん寝てくるわ」って言うて。納期が迫っとんやったら〔北川さんの分の作業を〕してくれるし、そうでなかったら置いとくし。まあその時その時やな。

○不満

一人部屋とか二人部屋とか、二人部屋は別にいいと思うけどな。何かけど、そのうちここ〔隣部屋との境の壁を〕ぶち破って四人部屋にするとか言ってるけど、ほんな四人部屋にまではして欲しいないと思うよ。まあ、ここぶち抜くんかどうかもまだわからんけど。そんな話何かでとるみたい。二人部屋で不自由とかは別にないな。

*〔 〕内は田中。

—感想—

今回インタビューをさせていただき、北川さんは全体的に少し話しをはぐらかすような感じの語り方をされるとというのが印象的であった。そのなかでも気になった語りが2点あった。それは①「給料がもっと貰えるような仕事がしたいとは思っとるけどなあ、まあ無理だろうな（苦笑）」という語りと、②「(担当の仕事に) やりがいは、まあ感じとるってことにしとこうか」という語りの部分である。一見すると、①の語りでも感じられるように、自分の能力の限界を知り施設の目的に自己同一化し、諦めであるとか受身的に満足しているように感じられる。しかし、②のような語りによって受身的な満足だけではなく、今の状況、状態に不満を持っているのではないかという推測がなされる。現状に不満を持ちながらも、それを全面に押し出さずにいるというように思われる。北川さんは自身の能力の限界や施設のあらゆる点での現在の状況、環境の中で、可能な限りにおいての範囲で自分なりの自由の行使をしていると言えるのではないだろうか。

今回のインタビューの反省点は、必要であったと思われる質問事項を聞くことができなかったという点である。例えば、「将来の希望」であるとか「今の施設での状況（保障であ

るとか生活、身の補助をしてくださるボランティア等)と変わらない状況であれば一人暮らしをしてみたいか」などの質問ができていれば、先述の隠された不満についてもっと明確に述べる事ができたのではないかと考える。IEの考えや思いを自身の言葉で語ってもらうという点を第一に考え、インタビュー中の受け答えが自然な流れでスムーズにできるように事前に質問事項を作成しそれを念頭に置き、北川さんが語りやすいようにということを心がけたのだが、インタビューをするということ自体に必死になってしまい、その場で適切な質問を考え質問するということができなかった。今回の反省点を活かして、次回からのインタビューをより良いものにできるよう努めたい。



【画像1：軽作業場での様子（2004.8.4 AM9：24：13 カメラ9）】



【画像2：二つの靴（2004.8.4 AM9：07：33 カメラ9）】

第2章 調査の実際

A. 調査用具と収集データ一覧

収集データ

収集データ番号	撮影日時・対象	調査室での 保管場所	自宅に持ち帰った データ・機材
<ul style="list-style-type: none"> DV テープ①～⑦ Hi8 テープ①② 	2004/8/4 撮影 大見 敏一さん	正島・原田班ボックス	<ul style="list-style-type: none"> 2004/10/1 MD① 渡辺さん（正島） 2004/9/中頃～MD① 大見さん（原田） 2004/10/2MD①～③ 大見さん（原田） 2004/8/中頃～DV テープ①～⑩, カメラ 9 （原田）
<ul style="list-style-type: none"> DV テープ①～⑩ 	2004/8/4 撮影 大見 敏一さん		
<ul style="list-style-type: none"> MD① 	2004/7/29 録音 大見 敏一さん		
<ul style="list-style-type: none"> MD①～③ 	2004/8/4 録音 大見 敏一さん		
<ul style="list-style-type: none"> MD① 	2004/7/21 録音 渡辺 広一さん		
<ul style="list-style-type: none"> MD① 	2004/8/3 録音 佐藤さん	田中・林・佐々木班ボックス	<ul style="list-style-type: none"> 2004/8/中頃～DV テープ①～⑧, カメラ 10（林） 2004/8/中頃～DV テープ①②④, Hi8 テープ③⑤, カメラ 4 （佐々木）
<ul style="list-style-type: none"> DV テープ①～⑧ 	2004/8/4 撮影 加勢 賢一さん		
<ul style="list-style-type: none"> DV テープ① 	2004/8/3 撮影 佐藤さん		
<ul style="list-style-type: none"> MD① 	2004/7/29 録音 加勢 賢一さん		
<ul style="list-style-type: none"> DV テープ①②④ Hi8 テープ③⑤ 	2004/8/4 撮影 鈴木 恵子さん		
<ul style="list-style-type: none"> MD① 	2004/5/18 録音 Y 義肢	その他ボックス	
<ul style="list-style-type: none"> DV テープ①② 	2004/5/18 撮影 Y 義肢		
<ul style="list-style-type: none"> MD① 	2004/5/26 録音 Y 義肢		
<ul style="list-style-type: none"> DV テープ①② 	2004/5/26 撮影		

調査用具

- カメラ (DV, Hi8)
- ワイドコンバージョンレンズ
- 三脚
- 延長コード
- ハードディスク
- ノート型パソコン
- カメラの充電器
- テープ (DV 用, Hi8 用)
- MD (レコーダー, テープ)

B. 調査依頼状例

社会福祉法人 ○○県身体障害者連合
セルプ Z 園様

2004年7月13日

調査協力をお願い

徳島大学総合科学部助教授 榎田美雄
勤務先住所) 〒770-8502
徳島市南常三島 1-1 徳島大学総合科学部
電話・FAX) 088-656-9308 (大学研究室)
電子メール: kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

共同作業: 徳島大学学部生 正島祐子ほか3名

今回は、○○○○様のご紹介でこのお願い文を書いております。はじめまして。私達、佐々木実花、正島祐子、田中文恵、林佑香4名は、徳島大学総合科学部人間社会学科3、4年の学生です。

今年度は私どもの大学の社会調査実習で、「義肢装具の相互会話分析」をテーマに取り扱っています。そこで、もし貴園利用者様、ご家族様、関連の医療関係者様及び各義肢装具提供会社関係者様のお許しを頂けたならば、別紙企画書に基づいて義肢装具の装着場面に關する調査研究をさせて頂きたく思っています。関係の皆様方からの必要な許諾が得られない場合には、できる範囲でお願いし、無理強いをしないことをお約束いたします。是非とも皆様にこの企画の意義と内容をご理解頂き、ご協力を賜ればさいわいに存じます。具体的には以下のことをお願い致したく思っております。

- ①義肢装具利用者様のご自宅・ご職場等での活動風景のビデオ撮影
- ②医療現場でのビデオ撮影 (医療機関に行かれる場合のみ)
- ③ビデオ撮影の補充としてのインタビューの御許諾

①、②、に關しての御許諾は、現状ではまだ判断がつかねる、ということでしたら検討課題ということで結構です。もし、見通しがあるということでしたら、實際的な日程と訪問先の相談をさせて頂き下さい。こちら側の都合ではございますが、撮影時には、2~3台のビデオカメラを用いて複数方向から同時撮影を致したく思っています。注目する場面は《非言語的コミュニケーション》がどのようにコミュニケーションの全体的なあり方のなかで使われているかです。

なお、当然のことではございますが、プライバシーの保護には配慮いたします。皆様のお名前ははっきりしたお許しの意思表示がない限り匿名化して表示し、集めたデータは研究以外の用途には使わないことを堅くお約束します。また、研究の成果(『調査実習報告書』)の提供もお約束します。

上記のような趣旨です。どうか我々の趣旨をお汲み取り頂き、調査にご理解・ご協力下さいますよう、お願い申し上げます。

礼文例

鈴木 恵子様

拝啓

そろそろコートが欲しい季節になってまいりましたが、鈴木様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

先日はお忙しい中、朝から晩までの密着取材にご協力下さいまして、ありがとうございました。お陰さまで鈴木様の快いご協力により、貴重なデータを得ることが出来ました。

取材後、特に興味深いと思った点を取り上げ、それを各自でまとめてゼミで発表し、先生や友達にアドバイスをしてもらいました。現在は教科書の勉強をメインに行っておりますが、実際に具体的な研究にどう生かしていけばよいのかを考えているところです。出来るだけ良いものに仕上がるよう努力してまいりたいと考えております。

朝夕の冷え込みもだいぶ厳しくなりましたので、どうかお体を大切に。

まずはお礼申し上げます。

敬具

佐々木 実花

2004年11月17日

お問い合わせ

〒770-8502

徳島市南常三島1-1

徳島大学総合科学部 榎田研究室

Tel 088-656-9308

3年 佐々木 実花

C. Y 義肢工場訪問報告

林 佑香

「義肢装具の相互行為分析」についての研究を始めるにあたって、5月18日（火）、5月26日（水）の二回にわたり、Y 義肢工場を訪問させていただき、義肢装具についてのお話をうかがったり、実際に義肢装具を製作している場面を見学させていただいた。

・ Y 義肢工場について

Y 義肢工場は、義肢・装具・リハビリテーション機器等の製作及び販売を行っている義肢製作所である。

義肢…事故や病気等で、手や足を失った方が使用する義足や義手。

装具…身体の一部が弱かったり、機能が失われた時に用いられる。治療を目的として短期間使用される場合と、長期にわたって ADL（日常生活動作）確保のために使用される場合がある。

参考資料：社会法人 日本義肢協会、2000、『義肢装具』

・ 5月18日（火）16時30分～

工場とは別の部屋で、はじめに義肢装具についてのビデオを見せていただき、そのあと Y 工場の義肢装具士である A 氏に、解説を行っていただいた。私達は義肢装具について全くと言っていいほど無知であったため、事前に用語など基礎的なことの予習をおこなっていたのだが、やはり具体的なイメージを持つことができずにいたように思う。実際に義肢や装具を見せていただきながら A 氏の説明を受けたことで、やっと予習の内容とイメージが一致し、理解することができた。義肢はそれを使用する人の年齢や仕事の内容、運動量によって違ってくる。よってその人に合った義肢を一つ一つ作るのだそうだ。

今までの義足は、一定に設定された義足の速度に合わせて歩くものであった。これでは仮に朝の歩行速度に合わせて義足の歩行速度を設定していた場合、疲れて歩行速度が遅くなっている夕方などは歩行速度と義足の歩行速度とが合わず、歩くことが困難となる。そこで開発されたのが「インテリジェント大腿義足」だそうである（写真6参照）。「インテリジェント大腿義足」は、その時々歩行速度に瞬時に対応し、空気圧などの仕組みによって速度の微妙な調整を測ることができるという義足である。これによって、使用者は常に自分の歩行速度で歩くことが可能になり、今までの「義足の速度に合わせる」ことへの負担が軽減したそうである。速度調整の段階（どれだけ細かく対応できるか）も、技術の発達と共に 5 段階から 10 段階まで増えたそうだ。しかし、利用者の中には新しく、速度に細かく対応できる 10 段階は使いにくいとおっしゃる方もいるそうで、義足は本当に利用者一人一人によって感じ方や求める機能が違っていて、一人一人に合った義足を作ることが重要なことであると感じた。

また、医療費の助成などは行政の制度によって違ってくることなども知ることができた。聞くこと聞くことが初めて知る事ばかりで、とても勉強になり、その後研究を進めていく中でも基礎知識として役立った。

・ 5月26日（水）15時30分～

装具を作る時に足の形状を測る機械を見せていただき、とても興味深かった（写真1・2参照）。実際に一緒に訪問した実習メンバーが足の形状測定を体験させてもらった。その機械の上に立ち、測定を開始する。すると足の下から敷き詰められた細い円柱状のものが何本も伸びてくる。（体験した彼女曰く、「こそばゆいような変な感じだった。」らしい。）その円柱状のものの伸び具合によって足の大きさや土踏まずの高さまですべての足の形状が測定されるのである。またその機械とパソコンをつなぐことで、測定したデータをもとに作成された画像データも見ることができるようになっていた。こうした形状測定の仕組みは、女性の下着開発などにも応用されているらしく、目から鱗であった。

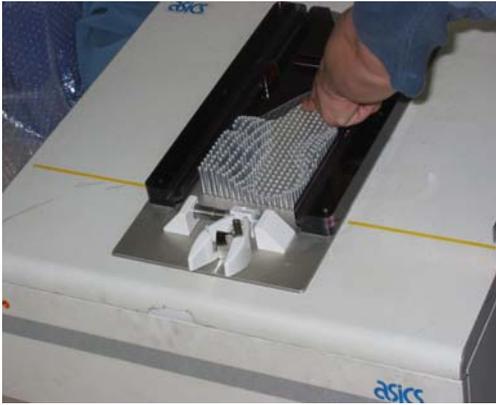
その後、実際に義肢装具を製作している作業所を見学させていただいた（図1参照）。まず、作業所に入って私達が驚いたことは、シンナーのような匂いがすることであった。義肢製作過程で使われるものの匂いらしい。作業されている方に伺ったところ、「全く気にならない。」とのことだった。普段嗅ぎ慣れていない私達にとってはとても印象的だった。作業をしている方は女性二人、男性七人であった。靴を作っている人、義足を製作している人、装具を製作している人、ミシンで縫う作業をしている人など、それぞれがばらばらの作業で、流れ作業ではなく、一人で一つの義肢装具を担当しているようだった。しかしそれぞれの机が決まっているというわけではなく、空いている机を使うこともあるそうだ。また、一人で並行して違う作業を担当する場合もあると聞いた。

出入り口付近にはホワイトボードが設置されており、そのホワイトボードには義肢や装具の発注リストや作業の進行状況、納入日などが表示されていた。作業内容はばらばらであるが、それぞれの作業内容や進行具合が作業者みんなに理解可能となっている、ということがとても興味深かった。このことによって、作業者の人々は、時にはお互いがお互いを監視（少し大げさでもあるが）し合い、また時にはお互い協力し合うことで、全体を通しての作業の円滑化が図られているとも考えられる。

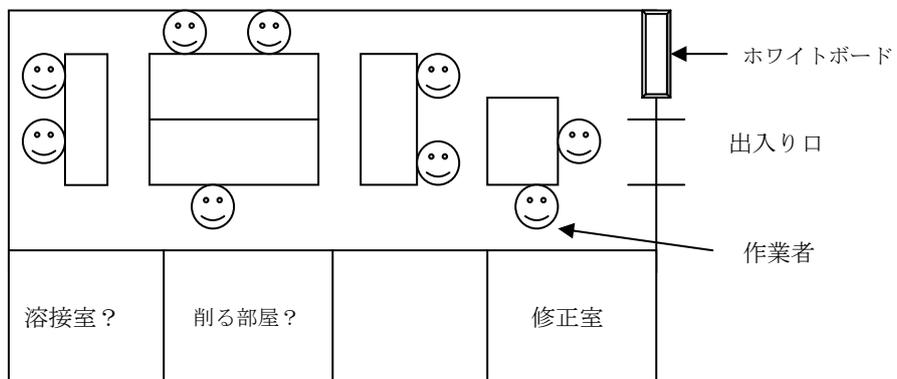
ここでは修正室、削る部屋、溶接の部屋などがあった。削る作業の際に出る粉塵で健康を害さないように、小部屋が作られているのだそうだ。興味深かったのは、義肢装具の金属部分を新しく光ったままにしておくのではなく、金属の粒子（のようなもの？）を吹き付けるなどして敢えてくすませるそうである。これは義足が目立たないようにするためで、使用者への配慮だそうだ。また、義肢装具は診察・処方から約一ヶ月後に仮合わせ、その一ヶ月後に装着があるらしい。作業は一つ一つ細やかな気配りをしながら進められていることが感じられた。



【写真1：足の形状を測定する（2004.5.26）】



【写真2：測定後（2004.5.26）】



【図1：Y義肢工場の作業所の配置（2004.5.26）】



【写真3：義足製作過程（2004.5.26）】



【写真4：装具製作過程（2004.5.26）】



【写真5：義肢・装具に使う金属を削る機械】



【写真6：インテリジェント大腿義足】

D. インタビュー記録作成の苦勞

原田 越代

今回、私たちが作成したインタビュー記録で苦勞した点について、反省を含めて書いてみたい。またこうした反省から、次にいかせればと思うことをあげてみる。

1. テープおこしの苦勞

テープおこし（録音テープを聞いて会話を全て書き出す）をしようと録音したインタビューデータを改めて聞いてみると、インタビュー中は感じる事がなかったが、人が話す速度というのは思った以上に速いものであった。会話の速度に書き取りが追いついていくことができず、テープおこしには苦勞した。これは慣れない作業に手間取ったということもあるが、夏休み課題として自宅においてインタビュー記録を作成していたために、録音に用いた SONY のポータブルミニディスクレコーダー MZ-B10 ではなく、MD デッキで再生して書き取りを行っていたことが理由としてあげられる。私はテープおこしの段階ではノートに手書きで書き取りを行っていた。MD デッキを用いる際には会話が聞きとれなかったり書き取れなくても、その度に停止を押しては効率が悪いので、5～10 分間ほど停止することなく聞いては書き取る作業を繰り返していた。しかし、この方法では聞き取りにくい箇所を何度も連続して聞くことができず、時間がかかるだけであった。そこで、用いる機器を MZ-B10 に換えてテープおこしを行った。大学の備品で数に限りがあるために数日間のみ借りたのだが、これは再生速度を変える（スピードコントロール）ことができるだけでなく、小型なので机の上に置いて書き取りをしながら操作を行えたため何度も巻き戻して聞くことができ、非常に便利で役立つものであった。ただ、再生速度を変えると再生音声は若干小さくなったので、録音状況は出来る限り良くする必要があるだろう。MD デッキもリモコンを使えば容易に操作できるのだが、リモコンをデッキ方向に向けなければならず、これが面倒であった。また、今回私は MZ-B10 を直接操作しながら手書きでテープおこしをしたのだが、別売りのフットコントローラーを利用すると足で操作できるのでパソコンで打ち込む場合は特に利用すると便利だと思う。

今回の調査において、2004 年 7 月 21 日の渡辺広一さん（仮名）を徳島大学にお招きし、総合科学部 1 号館第 2 会議室にて、7 月 29 日の Z 園（仮名）での調査では、調査協力者のお部屋など静かな場所でインタビューを行えたこともあり録音状況は良かったと言える。しかしそれでも、インタビューする者（interviewer:IR）とインタビューを受ける者（interviewee:IE）の会話と会話のオーバーラップや相づちなどは聞き取りにくいことが多かった。その場にいた時には多少聞き取りづらくともある程度は推察できたことも、時間が経って改めて聞いてみると分からないことが多くなったように思う。インタビューから日が経っていたためにますます記憶が薄れていたのだが、このような場合に、インタビュー中にメモ取りをしていると後々の作業で見返すことができるので「メモ取りは大事」だ

と実感した。さらに明瞭な音声を録音するためにも、外部マイクを使っても良かったのかもしれない。聞き取りづらい部分はあったものの、ヘッドフォンをすると音声の聞き取りやすくなり非常に役立った。

2. 一人称一人語り形式として記述することの苦勞

2-1. 記録作成で分かるインタビューの難しさ

テープおこしで書き出したものを編集する際に、話のつながりや内容に合わせながら会話を一人語りとして組み立てていく作業に苦勞した。インタビュー記録ではあるが1つの読み物として読む人にも分かるように表記することと、IEのその人らしさを失わないように記述することを心掛けた。その人らしさを失わないという点に留意すると、IEの話をそのまま使った方がよりリアル感が出たのかもしれないが、インタビューの会話の順序に添わないで書くことにした。というのも、実際にインタビューを行ってみるとつながりのある質問をすることがなかなかできず、会話の順序に添わないで文章を組み立てていく方がよいと考えたためである。半構造化面接だったので必ずしも質問項目に沿って進めるのではなく、IEの話に応じて質問をするようにしていたのだが、会話が様々に広がり、次の質問が思い浮かばなくなってしまう時に上手く用意していた質問項目に移ることができなかったというインタビューの失敗がある。また、気になる箇所があってもIRが深く踏み込んだ質問をためらってしまい、質問をするに至らず後悔することも多かった。相手に断わりを入れてから質問をすることで、より本音に近いお話を伺うことができたかもしれないと思うと質問を制限してしまったことは心残りである。

インタビュー記録を作成していて、気になる発話があってもその時に十分に質問できていない箇所がある度に、相手の琴線に触れるようなインタビューをすることがいかに難しいかを痛感した。これらの反省点をふまえて、事前に相手に対して知っておくべき最低限の予備知識を得ていること、そしてインタビューを行う際には、メモをとることで情報の整理をし、次の質問に繋げることが必要であると感じた。また「メモ取りはメモを取るという目的の他に、次の質問をするまでの会話の空白をうめる」ので、次の質問を考える時間稼ぎとしてもメモ取りは役立つだろう。

2-2. 記述での苦勞 ～相づちと方言の表記、匿名化について～

インタビューのなかでIRの質問をIEが推察し、途中でその質問に対しての返答をすることが多く見られた。この時のIEの返答というのが相づちである時もあったりしたが、インタビューという対話を一人称一人語り形式にする際に、この相づちをIEの発言として扱ってよいのかどうかで悩んだ。結局、IEの発話のように書いたが、それでは不確かであるようにも思う。すべてをIEの発話と表記するのではなく、場合によるということを意識して書くべきであった。相づちもまたひとつの返答ではあるが、さらに質問を重ねることも場合によっては必要だったのかもしれない。どの話でさらに質問を重ねればよいのかという判断は、インタビューにおける注目場面へ臨機応変に対応する上でも重要だと言えよ

う。沈黙ですらひとつの返答であると考え、何に注目して質問をするかが、リアリティあるインタビューにつながるのだと感じた。

その人らしさを失わないように記述する時に、方言をどう表記するかで苦勞した。当初は、読む人にも分かりやすいようにと考え、IE の話をそのまま使うのではなく標準語で表記していた。だが、そうするとリアル感がなく口語で聞いた発話と違った感じになってしまい、その人らしさを損なってしまうように思えた。そこで、表記する時には標準語を用いつつ、方言を残して書くことにした。その人らしさは方言以外のところで表わすという書き方もできたであろうが、話し方などにその人らしさが強くでていることでもどう表記するかも重要だと思った。

インタビュー記録作成にあたり、事前に共通して使う地名や施設名などの固有名詞の匿名をどう表記するか決めていなかったために、作業後、統一するよう手直ししなければならず面倒であった。何度か匿名化に関する話は出ていたのだが、統一しないまま作業に入ってしまったことで後々余分な手間がかかったのは痛かった。共通して使うことが分かっている固有名詞は、あらかじめ話し合うなどしてどう表記するか決める必要があったと反省している。特に、「ローマ字で匿名化する場合は要注意」だと言いたい。というのも、共通する固有名詞の匿名を統一する際に用いることが決まったローマ字が、自分の作成したインタビュー記録では別の固有名詞の匿名化に使われていることがあり得るためである。ややこしく、手直ししていて間違う可能性も高い¹。このようにちょっとしたことをいい加減にしていると、無駄な作業に思わぬ時間を取られてしまうことを、身を持って学んだ。調査協力者のプライバシーを保護するためにも、匿名化は細心の注意を払わなくてはならないので、徹底するよう心掛けたい。また、固有名詞の頭文字をそのままローマ字表記するのは匿名性が守れたとは言えず、調査対象者を知らない人が調べても分からない程度にはしていなければならないことを学んだ。

2-3. インタビュー記録を組み立てる

話のつながりや内容に合わせてながら会話を一人語りとして組み立てていく作業では、テープおこしで書き取ったデータを何度も読み、どう文章をつなげれば読みやすいか、書いては修正を繰り返すという作業を行った。この文章を組み立てる作業は、簡単なようではなかなか難しかった。最終的に原稿として載せているものは、インタビューデータの会話の順序と大きく違っているが、会話の順序に添わないで書いたことで、IE が発言したことではあるが各執筆者それぞれの視点が現れているというおもしろさが出ているのではないかと思う。はじめは、インタビューという対話をどのように一人称一人語り形式として表記することができるのか戸惑ったのだが、会話を組み立てて文章を組み立てていく作業は後々の調査分析を行う上で文章を構成したり、記述することに役立つものであった。またインタビュー記録を作成したことで調査対象者について多くの情報が得られ、状況（文脈）

¹ この原稿を書いた後に、Microsoft Word（私が使用しているソフト）に「置換」機能があることを知った。

に依存した道具の使われ方を見ていくという調査分析の際に、具体的な障害の状態から考えることもできたように思う。

3. まとめ

「研究テーマが決まっても、実際に調査を行うために準備を整えることが、じつはもっとも困難な場合が多い。」(山崎編、2004:60)と言われるが、今回の私たちの調査においては多くの方々に快い調査協力を頂けた。こうした多くの方々によってデータが得られたにも関わらず、お礼状を出すのが遅くなってしまった。今回の調査だけに言えることではないが、今後の方針などをお伝えするためにもお礼状は早く出すようにしなければならなかった。

〈参考文献〉

山崎晶子・菅靖子・葛岡英明、2004「調査の準備とビデオデータの分析法—博物館調査を例として—」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、60-70頁

E. 撮影の苦労

正島 祐子

今回実際にZ園へ行き、撮影をしたがやはり撮影の難しさは実際に現地に赴いて撮影してみなければわからない。思わぬところで問題が起こり、自分の思い通りにいかないことが多々あった。そこでここでは具体的に何が問題になったのかを含めて述べていく。いくらかのエスノメソドロジーの本に紹介されている撮影に関する章を参考にしながら、より実践で活用できるよう、既刊書では書かれていない事や細かい部分もいくらか挙げる。ここでは参考文献にあげている文献に加えて、これからビデオ分析を使ったエスノメソドロジーを学ぶ学部学生のみなさんに少しでも役に立てれば幸いである。

1 調査（ビデオ撮影）の前に

まず必要なのは撮影先の許可である。相手先に出向くのはもちろんのこと、文書での承諾の取り交わしは相手先との後のトラブルを防ぐためにも重要である。具体的に何を承諾書に載せたらいいのかはこの章の「調査依頼状例」で今回調査に実際使った調査依頼状を載せているので参考にしてほしい。

2 撮影機材について

我々が撮影に用いたカメラはDVとHi8だ。この章の調査用具と収集データ一覧に詳細を載せている。今回以下で述べるのは二つに分けて機材の操作と準備である。

2-1 操作

基本的な撮影するための操作はもちろん練習しておかなければならないが、エスノメソドロジーのためのビデオ分析で必要となる操作は「時刻合わせ」である。これが重要であることはエスノメソドロジーの本でも紹介されているが、時刻合わせ自体は簡単な操作である。しかし問題はその時刻合わせしたタイマーを画面に表示するタイムコード操作だ。実際撮影してみると難しい。撮影時の時間は後に分析する際にも重要であるためタイムコード操作は確実にしておく。

しかし、カメラ本体内蔵のバックアップ電池が完全に消耗していることがある（実際に今回の撮影時に起こった）。撮影以前の問題である。本体内蔵のバックアップ電池も確認しておくことをお勧めする。

2-2 準備

撮影は多くの機材、道具を準備し、撮影先で使用しなければならない。三脚のような大きいものからテープのような小さいものまで使用するため準備物の整理を行っておくと撮影も円滑にいく。撮影に必要な機材、道具はだいたい本にも紹介されている。これも調査用具と収集データ一覧に今回使った機材を詳細に記述しているので参考にしてほしい。以下では多くの準備した機材をどう整理したら撮影に便利かを我々が実際に行っている方法を紹介しながら述べる。

多くの場合ひとつのカメラに対し必要な機材はワイドコンバージョンレンズ、バッテリー、コード、三脚などだ。その他にも外付けマイクなど撮影場所に応じて準備が必要になる、またはあると便利であるような機材はあるが、最初に挙げた基本となる機材は場所が変化しても変わらない。したがって最初から基本のセットをつくっておきそれを単位にカメラ本体も含めカメラ①,②,③…と番号をつけて管理すると管理が容易にできる。ワイドコンバージョンレンズ、バッテリー、コードにもカメラと同じ番号を振っておくと、間違っただけで違うカメラケースに入れてしまいカメラによってワイドコンバージョンレンズが二つになってしまい、別のケースからは欠落するということはなくなる。もし紛失した場合でもどのカメラのレンズが紛失したのかがすぐ明らかになる。特に今回のように数台のビデオカメラを用いて撮影をする場合はぜひ参考にしてもらいたい。

3 撮影する際のポイント

撮影範囲、撮影機材の設置場所は事前に撮影場所の責任者と打ち合わせし、実際に自分でも確認しなければならない。今回苦労したのは機材の設置場所であった。事前に固定のカメラだけはZ園に準備していたのだが、Z園のような狭い部屋で多くの方が作業している場所ではカメラを置くスペースが非常に狭い。狭いスペースの中でカメラ設置を行うことは調査ではよくある。そういう際の注意をここで述べておくと、本番撮影の前日に打ち合わせで撮影先に行き撮影場所を決定するが、人の動きも考慮して、邪魔にならぬスペースに設置することが大切だ。作業には影響がない場合でも人が移動する際に使用するスペースになることがあるため注意が必要だ。

また音声確認も必要である。普通のビデオカメラの音声録音能力では鮮明な音を録音できない場合、マイクの設置法やマイクの種類を変える方法もあるが、今回の調査ではMDレコーダーを使い音声だけを録音する形をとった。

4 テープ管理

長時間の撮影では多くのテープ数になる。撮影終了のテープはそのつど時間、撮影場所、順番などのデータを記入しなければならない。データの誤消却防止にテープのつめをおっておくと確実だ。データが紛失したり、消却されないよう心がける必要がある。データはデータリストにすると、整理に便利だ。今回撮影でつくったデータリストも調査用具と収集データ一覧に載せているので参考にしてほしい。

参考文献

山崎敬一・山崎晶子・鈴木栄幸・三樹弘之・葛岡英明、1997、「〈附論〉ビデオデータの分析法——ビデオとコンピュータを利用した新しいデータの分析法——」山崎敬一・西坂仰編『語る身体・見る身体』ハーベスト社、285 - 321。

山崎晶子・菅靖子・葛岡英明、2004、「調査の準備とビデオデータの分析法——博物館調査を例として——」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、60 - 70。

F. 報告書作成の苦勞

田中 文恵

1. 報告書作成までの苦勞

今回の調査は、実習の授業の中で調査の方法についてや社会学の文献を読み知識を得ながら「義肢・義足のエスノメソドロジー」というテーマを設定し調査を行ってきた。前期にはY義肢への訪問や、後のZ園での撮影のための下見を兼ねてZ園を訪問し、調査対象者の方々へのインタビューを行った。そして夏季休業中に分析を進められるように、夏季休業に入る前にZ園での撮影を行った。撮影当日、撮影技術の面で多少のトラブルはあったが1日かけてじっくりと撮影を行い、貴重なデータをとることができた。そのデータを持ち帰り、各々に個別のテーマ設定をし、分析を進めていった。

実際に調査に入る前に大まかな調査予定を立て、その都度修正を加えながら分析を進めていき、多少遅れ気味であったが何とか順調に進んでいたように感じたのだが、報告書作成の時期が近づき問題点が発生した。各々が分析を進めていたのだが、それに伴うデータが不足していてもう一度Z園を訪問し撮影を行わなければならなくなった。その問題点に気付いたのが12月に入ってからのもので、報告書作成まであまり期間がなく慌しく撮影を行うことになった。そういったこともあって、先に挙げた夏の調査での反省点を活かすことができず、12月の調査でも技術的な失敗があり、必要なデータを上手く撮影することができなかった。また、Z園との事前の確認に不備があったために、私の調査対象者である方が12月の撮影時に病氣療養中で自宅に戻っていらっしゃるということをZ園に訪問してから職員の方に伺い、撮影を行いたいのには被写体がないという事態が起こってしまった。

これらの問題点については、事前にしっかりと予定を立て余裕を持って行うことで防げた事態だと思う。各々の分析を進めていく中で、その過程を持ち寄り、他のメンバー全員で自分の分析の進み具合を報告しあったり話し合ったりする時間をもう少し確保し、それにあわせてその都度詳細な予定を立てていくことが重要であると感じた。そうすれば、報告書作成直前になってのデータ不足の問題も回避でき、もう一度撮影を行うにしても、連絡の不備や技術面での失敗も防ぐことができたであろう。

2. 報告書作成での苦勞

ここでは、撮影が無事終了しデータを基に各々個別のテーマを設定し研究を行うという段階での苦勞について記述したいと思う。この調査では、まず調査対象者の一日に密着し撮影を行い、そのデータから自分が注目する点を取り上げそれについて詳しく分析を行うという手法で行っている。そのようなことから、各々の設定した取り上げた注目点が社会的なものであるのか、または設定したテーマに合致しているのかなどが十分判断できずテーマを何度も変更したりということがあった。今回のこの調査報告書全体の調査目的は「義肢・装具のエスノメソドロジー」というテーマのもとに明確になっていたのだが、個別のテーマ設定にあたっては先述のような調査の手法であるため、撮影の段階では個別のテーマに対する調査目的が明確ではなかったと言える。我々実習生がそのような手法に不慣れであったため、報告書作成にあたっての難関となった。

次に、テーマを設定し各々が分析を進めていく中で考えや執筆が行き詰ってしまうとい

う問題があった。ここからは個人での作業が中心となり、どうしても考えが堂々巡りになってしまい何をこの調査報告書で訴えたいのかということが分からなくなってしまうということが起きた。授業中にもお互いの研究過程を持ち寄り、報告し話し合うという時間を確保し、合宿も行ったが、もう少しこういった時間を増やし相談を重ねることで改善できる点であると思う。加えて、班に別れ、班ごとにそういった時間を持つことも有効である。今回の調査でも 2 つの班をつくり調査していたのだが、それが上手く機能している班とそうでない班とがあった。上手く機能しなかった班では、個別のテーマ設定での研究ということもあり、自身の研究で手一杯になってしまい班内での話し合いの時間を持つことがあまりできなかった。他者の客観的な意見を聞くことができる有効的な場であるので、できるだけ班活動の時間をつくり活用すべきであったと思う。

全体を通して、個人だけで研究を進めるのではなく、他者との報告や話し合い、相談の場や時間をできるだけ作り、それを活用するということが大切であると言える。

G. オブザーバーとして

田村 直樹

1. はじめに

筆者は神戸大学大学院でマーケティングを専攻する院生である。自分の論文での方法論をエスノメソドロロジーに依拠し、研究を進めてきた。縁あって、徳島大学の榎田研究室に共同研究者として参加させていただくことになった。関西では（おそらく西日本）、エスノメソドロロジーの講義が殆どなく、頭を悩ませていたが、榎田研究室との出会いのおかげで、社会学、エスノメソドロロジーについての理解が深まった。

ゼミでは、単にテキストを輪読するという事に限らず、フィールドに出て、インタビューやビデオ撮影といった調査方法を身につけるということが主眼におかれている。

筆者が参加したのは2004年10月からの後期であるが、この約4ヶ月を振り返りつつ、オブザーバーとして参加した感想等をこの紙面をお借りして、述べさせていただくことになった。

2. 講義について

後期の講義では、テキストとして上野直樹（1999）『仕事の中での学習』東京大学出版会を使用した。学部生にとっては、かなり高度な学術書にもかかわらず、榎田ゼミのメンバーは、丁寧にレジメを作り毎週の議論に参加されていることに、驚きと頼もしさを感じた。

上野（1999）は、道具と人とのインタラクションを扱っているものだ。ゼミメンバーは、それぞれの問題関心に沿って、テキストを読みこなし、自分のインタビューデータと参照しながら研究を進めていった。こうした、テキストのみに頼るのではなく、フィールド調査の結果と参照しながら理解を深めていくという方針に、感心させられた。

そうしているうちに、自分でもフィールド調査がしたいと思うようになった。そして、幸運なことにその機会を12月15日に得ることになったのである。

3. 調査実習について

2004年12月15日、筆者は榎田研究室のメンバーとともに、Z園における現地調査に参加させていただいた。筆者以外のメンバーは夏にも調査を経験しており、その手際の良さに心強く思った。カメラの扱い、カメラ設置場所の配慮、ビデオテープが混乱しないようにインデックスをこまめに記入等、といった一連の作業がチームワークよく進められた。

そしてメンバーは、自分たちの調査に協力してもらっている方々ととてもフレンドリーに接しており、その光景が自分にとって新鮮なものであった。撮影は、調査対象者をカメラで延々と追いかけていくというものだ。これまでの筆者の考えであれば、このようにカメラが追尾するという事に、恐らく調査者は困惑するのではないかと。しかしながら、この撮影現場は筆者が考えているようなものではなかった。Z園の方々と榎田研究室のメンバーとの、いわゆる信頼関係を見たように思う。

撮影後、メンバーは、調査に協力いただいた方々にお礼を申し上げ、再度手際よく機材を片付けて研究室に戻った。実はこれからが、メンバーにとって力仕事になるのだ。収集した貴重なデータをパソコンで管理し、画像データをメンバーで共有しつつ、報告書を仕

上げねばならないのである。

4. データセッション

2005年1月7日、8日はゼミ旅行となった。場所は小豆島。筆者もそれに参加させて頂くことになった。その7日というのが、メンバーが撮影したデータをどのように報告書で扱うかを議論する、データセッションとなった。

それぞれのメンバーのテーマに関する画像データを、全員で議論するというものである。こうしたデータセッションというのも、筆者にとって初めての経験であった。

画像データという情報の、その多さに驚かされた。ビデオを利用することによって、何度も繰り返し再生できるので、ほんの数秒の出来事の中に膨大な情報を入手できるのである。メンバーは、そうした数秒の出来事の中から貴重な情報を議論していくのである。撮影時には、調査者も気づかなかつた、ほんの些細な被調査者の言動を捉えることができる。

そうした一瞬の相互行為を見逃さず、それを研究していくという緻密さ、それはエスノメソドロジーが持つ特徴の一つであることを実感させられた。

5. ゼミ旅行

データセッションの翌日は、小豆島観光が待っていた。小豆島のユニークさを再発見できたとともに、メンバー間の絆がいつそう深まったように思う。ゼミ旅行幹事の正島さんの観光計画は絶妙で、どこにいても楽しさを満喫できるというものであった。

世界一距離の短い海峡に困惑し（これでもギネス？）、サルが放し飼いにされている自然公園で驚き（サルが足元にいっぱい）、ケーブル山頂から魔よけの小皿を溪谷に投げる快感、讃岐うどんを楽しみ（歯ごたえがいい）、二十四の瞳記念館で小豆島の自然と日本の時代性に思いをはせ、オリーブ館でお土産を買う等。筆者にとって、本当に忘れられない思い出となった。

6. おわりに

最後にこの場をお借りして、謝辞を述べさせていただこうと思う。樫田先生には、エスノメソドロジーだけに関わらず、社会学について広くご教授いただいた。そして調査実習でお世話になった、正島さん、林さん、佐々木さん、原田さん、田中さん。卒論ゼミの吉野さん、中本さんには筆者の研究に貴重なコメントを頂いた。樫田研究室の瀬尾さんには各種事務手続きをしていただいた。

筆者の研究人生のなかで、忘れることのできない貴重な4ヶ月であったということを書いて、締めくくりにしたい。



【ブランコに乗る榎田先生 自然公園にて（2005.1.8）】



【二十四の瞳記念館にて（2005.1.8）】

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊（国立国会図書館等所蔵）

- | | | |
|---|---|------------|
| 1 | エスノメソドロジーとその周辺
ー平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 1998年3月発行 |
| 2 | ラジオスタジオの相互行為分析
ー平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版)ー | 1998年10月発行 |
| 3 | エスノメソドロジーと福祉・医療・性
ー平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 1999年2月発行 |
| 4 | 障害者スポーツにおける相互行為分析
ー平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版)ー | 2000年2月発行 |
| 5 | 日常生活の諸相
ー平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 2000年2月発行 |
| 6 | 現代社会の探究
ー平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 2001年2月発行 |
| 7 | インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) | 2003年2月発行 |
| 8 | インタビューと対話の相互行為分析ー気配りと配慮の社会学ー
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) | 2003年9月発行 |
| 9 | 社会学の窓ードラマティックな日常生活ー
ー平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集ー | 2004年2月発行 |

義肢・装具のエスノメソドロジー

発行日 2005年2月14日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088) 656-9308 E-mail:Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成16年度徳島大学総合科学部榎田地域調査実習報告書発行プロジェクト
